

冬の夜  
snow black

河上真琴

冬の夜には幻想が住む

## 主要登場人物

- \* 藤原理子 Fujiwara Riko (女)
- \* 山根閑 Yamane Nodoka (男)
- \* 三浦ユキ Miura Yuki (女)
- \* 吉岡達也 Yoshioka Tatuya (男)
- \* 水無川無月 Minagawa Natsuki (一)
- \* Az Azu (人形)

あの夏の日の夢を見た。

きっかけはささいな食い違い。幼いころの私は彼に向かって何かを叫んでいた。必死に言葉を選び、彼の眼を睨んで。私と彼の間には積み木が散乱して、しかし一部は「城」の一片を残している。彼はいつも冷静で、私は余計にカツとなる。たったそれだけの夢なのに、何故だか悲しくなった。夢の中の私と彼は、やがて反対方向に去ってゆく。意識には闇と「私」だけが残っている。やがては「私」の意識もまどろみ、光景は少しずつ薄まって、本当の闇だけが残される。そう、そして夢は覚めて。

\* \* \*

ケータイのアラームが台無しにしてしまった朝の静けさの中で、私は目覚めた。目覚めた、とは言ってみたものの、ずっと布団の中で丸くなって、ときどき、ん、と身じろぎする程度の覚醒なのだが。私は朝に、めっぼう弱い。意識が起ちあがってから体が立ち上がるまでに何十分、いや数時間を要する。中学、高校まではそれでも何とか体にムチ打って毎日定時には食卓についていたのだが、これが大学になって一人暮らしをすともう、なんというか、まあ、そうなるワケですよ？そういう事で4年間、本来の体質(?)のままにだらだらとしていたせいで、社会人になっても、こうして朝の間はルーズになってしまいがちなのです。さて、時計は朝の8時と45分。朝一番の選択としては

- ① パンを食べる。そして遅刻する。
- ② 何も食わずに会社までダッシュする。
- ③ ずっとこのまま布団で丸まる。

..... とまあ、②あたりが正解なんだろうけれど、自分の場合は、職場の方が割合とルーズなため、①という手もあり得る。問題の③はさすがに社会人としてのプライドに関するものでナシという方向で。

\* \* \*

7時50分。起床、続けて伸びを兼ねた大あくび。パジャマのボタンを一つずつ外して、布をすくとんと落とす。狭いアパートメントの端にちょこんと置かれた4段の木目美しい日本箆笥から下着を取り出して装着、となりのクローゼットからワイシャツを取り出して首元までボタンをしっかりと止める。スーツのパンツを穿いて、ネクタイを結ぶ。スーツの上着を羽織り、ボタンを片手でとめていく。ボサボサのはね毛を手ですいてゴムで止める。締めくくりとしてデスクに3本並んだメガネから右のメタルフレームのもの選んで、髪を避けて装着する。屈みこんでベットの下面から黒い革のバックを取り出して、廊下に出る。玄関のドアを開ける。一瞬の眩しさは、浸み込むように引いてゆく。いつもの風景、いつもの日常。カードキー式のドアロックに、バックから出した青色のカードを通してロック。腕時計の針は8時16分を指していた。一日が始まる。

「おはようございまーす！遅刻してすいませーん！」

一瞬、一同の手が止まる。勢いよく戸を開けての開口一発、しかも手を上げて。刻が止まるのも無理らしからぬ。しかし一同、すぐに目を自分の手元に戻して作業に戻る。三浦のこういった面はすでにパターン化している。当の本人のノルマがハードになる以外、なんの問題もない。いつものことだ。耳に痛い沈黙を最初に破ったのは右側窓に面したデスクに座るダークスーツの女性、理子さんは光の反射で白く透明化した眼鏡のテンプルを押さえて言う。

「あー、まあ、うん。それは見れば判る。とりあえずおはよう。それでだね、まあ罰、というワケでもないが、ちょうど今外回りの仕事で厄介なのがあってね。ちょっと頼まれてはくれないかな。何、大したことではない、ただちょっとキャラクター的に向き不向きがある用件でね。ちょうど君かなーと思っていたんだ。それでまあ、なかなか来ないからどうしようかと考えていてね。一つ頼まれてはくれないかな」

「ええそれはゼヒ、全くもう遅刻した上にホントすいませんでしたんで、ええもう、全身全霊死力を絞りつくしてその用件とやらをやっつけてしまいますよもう全く本当にすいません遅刻ばかりで」

死力を絞ってどうする、とつつこんでから、

「それではその内容という事なのだがね、これを」

と言ってデスクの、山のように積まれた書類やらハードケースやらの一番上の茶封筒を取り上げて、

「うちの幽霊社員の所まで届けて欲しいんだ。いや、郵送するほど遠くもない所だから、ね。なにしろ昨今、コスト削減も大変な時代だからね。無駄は省かなくてはやっていけないというワケさ。それに」

と言って一度、言葉を切る。ふう、と息を吹き上げる。やわらかい前髪がそよぐ。

「君は新人だからね、一度、彼に会っておくと良い。彼はね、うちの生命線みたいなものなんだ。君もここに入ってもう半年くらいになるから判ると思うけど、まあこの会社は言ってしまうと“何でも屋”みたいな所だし、変なスキルを持った連中ばかりだけど、ときかく彼は飛び抜けていてね、何人もの常連客、リピーター？、まあどちらでも良いが、がいてね。とにかく特別なんだよ。一度会っておいた方が良いね。ちなみにその封筒の中身も彼へのファンレターと依頼書みたいなものだよ」

そう言って人差し指を立てる。それを左右に3回ずつ振ってから扉の方を指して言う。

「気をつけて、行ってらっしゃい」

\* \* \*

数十分後、私は市営の高層アパートの66号室の前に立っていた。右手にはB5の茶封筒、左手には万年筆の手書きの地図を持って。しばらく立ちつくす。

ここは市のランドマークとして近年建てられたばかりの、100階を超える高層アパートメントだ。眼下には市のほぼ全域が見渡せ、遠くには海と地平線、そして雪をたたえた連山のシルエットが見える。私もこの街の住人だからなじみのある建物なのだが、実際に入るのはこれが初めてとなる。薄灰色のコンクリートを主色として長方形の窓とバルコニーが黒い抜き色として整列した外観はクールかつ高級な印象を見る者に与える。それとは別に、私の主観だけでも、少しばかりシャイな感じというか、マジメな印象の建物である。で、私は息を整え、少し躊躇した後、覚悟を決めてインターフォンの白く四角いボタンを押す。

ピーーン。

ポーン。と電子音が聞こえ、ガタゴトというノイズが入る。中と繋がった合図だ。言う。

「ごめんください。私は■社の者で三浦と申します。理子社長からの仕事で手渡したい物があり参りました」

雨だけが聞こえる。返事は来ない。あのお、ともう一度口を開きかけたところで小さく、はい、という返事が返った。不思議な声だ。男性とも女性ともつかない、あえて言うなら、幼い、ような柔らかい響き。ぱたぱたとドア越しに足音が近づいて、そしてノブが回る。アルミの扉が内側に開く。そこにエプロンを着た小柄な人が立っていた。眼が合う。右目だけが二重になっていることにすぐ気がついた。綺麗な人だ。体のラインが判るスウェットを着て、長い髪(白髪だ)をまとめて背中に流している。黒に近い蒼い瞳、アルミのドアノブにかかった細く綺麗な指、私よりずっと細いデニムのパンツ、柔らかいラインをつくる顎に、白すぎる肌。それらを一瞬で見取って改めて思う事は一つ。すごく、綺麗。第二の声は向こうからかけられる。

「はじめまして。事はさっき理子さんからメールありました。外は寒いのでどうぞ上がってください」

促されるままに進む。ドアが背後で音もなく閉まる。雨雲が空を覆う灰色の外から一転して、柔らかな暖色の照明に影付けされた廊下はゆったりとして、そこを連れだって進む。突き当たりの部屋に案内される。どうぞ、と促されるままに、ガラスのテーブルセットに座る。相手も、うんしょ、と向かい手に座る。間がある。

「改めまして、こんにちは。私は今年から■社に入社した三浦ユキと申します。今日はこの封筒を社長から預かって参りました。えと、あなたは」

少しの間、考える。すぐに答えが見つかる。

「水無川ナツキ様、でしょうか」

はい、と柔らかな返事が返る。そして、

「はじめまして。僕は■社の主に特注品を主に手掛けている水無川と言います。ナツキは月が無いと書いて無月です。えー、まあ、あまり固くならずに気楽にしてくださいね」

と言う。柔らかい笑顔。仕事の上司というより、親身な部活の先輩のようなそんな感じで。だから二言目は自然と緩くなった。

「じゃあ、私の……先輩、と言っていいんでしょうね、これからもよろしくです」

はい、と再び暖かい笑顔。なんだか少し……可愛い人のようで、つい心を許してしまう。そこでふと、ある違和感を感じる。何だろう。何かが少し。

「とりあえずそれを」

私の右手を指して、

「見たいですね」

あ、はい、と我に返って差し出す。水無川さんはレターオープナーを引出しから取り出して開封する。中には鉛筆で描いたらしいスケッチらしきものと、ロットリングで描いたらしい細かい図面らしきもの、それから短い手紙が入っていた。それをじっと真剣な表情で見る水無川さんを私は見る。何、だろう。そのまま数分が経つ。ぱさっと紙をめくる白い指を目で追いながらさっきの違和感の正体を探す。そのまま5分が経った頃、

「了解です、ありがとうございました」

ハッと再び我に返る。つい考え込んでいて反応が遅れる。そしてふいに違和感の正体に気づく。社長との会話を思い出す。“彼”。そして“彼”の“僕”そして目の前には.....もしかして、男性？ファーストインパクトでとっさに女の方だと思っていた。いやしかし、と目の前の“彼”に目をやる。水無川さんは、ん？、と反応する。その小首をかしげる反応も含めて思うのは、――性別、どっちだろう。見た目はとても男性らしからぬ細さ、声も高い。そして一人称は“僕”。どちらだろう。服装にしてもパツと見どちらの性別かは判らない。ただどちらにしても、何か特殊な印象を受ける。中性的、とも言おうか、いやどちらにしても.....綺麗な人だなあ、と思う。そんな視線に気づいたのか、彼(あるいは彼女)は言う。

「そうですね、初めて会う人にはたいてい聞かれます。あなたの考えていること、『どっちだろう』、でしょう？」

言い当てられた。失礼だったと少し反省。

「実はですね、僕はちょっと特殊な体質で、ホルモンバランスがですね、いや、まあ専門的な話は置いといて」

と「置いといて」のジェスチャーをする。空気の箱をどけるように。

「性別があまりはっきりと出てないんですよ」と言う。つい、どういうことですか、と問う。

「つまり無性質。男性としても女性としても性的に肉体が不完全、というらしいですね。日本では珍しいですが、世界的にはそこそこ在るらしいですね」

だから、

「初めて会う人にはちょっと気を遣われてしまう、のでしょうか、だから僕を呼ぶ時にはとりあえず“彼”というふうになっている訳です。一応ですね」

少しながら、いや、大いに驚いた。さっきからの違和感――容姿と一人称の不一致。そういえば社長も彼のことを何か「特殊」みたいのことを言っていたような。しかしこれは、また別の意味だと後から気付く。「水無川、さん？」 ナツキで結構ですよ、と穏やかに笑う。

「じゃあナツキさんはその」

考える。何か問う事は無いものか、と思いついた事をそのまま言葉にする。

「トイレとかはどちらに」

言ってしまうって、ああやってしまったと思う。これはさすがに失礼だった。水.....ナツキさんは苦笑のような笑顔で言う。

「女性用、ですねとりあえずは、この」

と言って自分の胸に手を当てる。そこには何のふくらみも無い。

「外見ですから、7割ぐらいの人には女性に見えるようです。特に外出する時には女性用の服装で出歩くように気を付けていますし、でもやっぱり少し、恥ずかしいものです」

私は赤くなって少し目をそらす。何か他に話題は無いか、と探す。何か。ふと、彼の背後のデスクに目が留まる。一見、事務用かと思われるが、サイズがやや大きく白い。それに、アーム式の白熱灯ランプやその他見たことのない道具がスタンドに立っていて、卓上には何か、模型？のようなモノが置かれている。金属色のオブジェか、何かそういう香りのするもの。私はそれを指して、

「ところで、あれは」

ん、とナツキさんは振り返って見る。

「何でしょうか。何か仕事のモノでしょうか？社の方もときどきあのようなモノの外注が入って、私も何度か製作をさしてもらったのですが、そういう類のモノでしょうか？」

彼はすこし考えるそぶりをして、

「そうです。私の専門は精密細工で、本社に来た依頼から、特に難しく厄介なモノがあれば私の方に流れてくるというシステムです」

驚いた。私が所属している会社は、主に造形物の外注を受けて、それを専門のメンバで仕上げていく、というものだ。私も美術系の大学を出てここへ来たけれども、仲間達は各自何かしらのプロフェッショナルで誰もが超一流、自慢ではないが、多分、各分野の中では皆世界的にもトップクラスに入るのではないだろうか。そんな環境で“本社の方がお手上げ”だという製作を請け負うとはどれ程の腕の持ち主なのだろう。想像を絶する。しかも一人である。

「もともとはフリーの造形家だったのだけれど理子さんの目に留まって、会社で働くようになったというワケです。でも、ちょっとした事情があって以来あまり外に出なくなって、それから製作はこのアパートでやっています。この部屋の家賃も会社の経費から出してくれていて、理子さんには本当にお世話になっています。それでいま作っているのは、」

つんつん、と作業机の上のモノを指さす。

「サグラダファミリア贖罪大聖堂の完成予想模型で、バルセロナ市からの発注で、これを原型とした建築マニア向けのプラモデルを発売したいとかなんとか」

2028年完成予定の大建築、サグラダファミリアは、建築家アントニオ・ガウディの未完成の代表作で、全体にオーガニックな曲面を持ち、造形には相当の技術が必要なうえに、細部に渡りびっしりと彫刻が彫りこまれており、その情報量は想像を絶する。そのうえで、作業机の上のその造形物を見ると、そういう高密度の造形が、恐らく一切の省略無く、コンマ数ミリのレベルで再現されている。もし建築や模型に興味が無い者でも、その「技」には誰もが目を見開いて黙って見入るしかないだろう。そう思った。サグラダファミリアはその図面のほとんどが焼失している。よって細部は造形家が全体から想像するしかない。そのため、手を抜こうと思えば早く完成はするが、造形物としての力に欠くものとなるだろう。模型であればなおさら細部の省略の余地はあるだろう。しかし今、私の目の前にあるモノはそういった「力の抜きどころ」がどこにもない。現物自体が未だ未完成の建築であるにも関わらず、ここにある造形物は、細部の執拗なまでの作り込みによって、圧倒的な現実感に溢れている。真に造形を愛し、そしてそれを表現する

技術と気力、そういったものに溢れている。聳え立つシルエットは、切りだされ、彫刻された石の一つ一つを丁寧に積み上げて組み立てられた様子すら感じさせ、力強く、しかし滑らかに伸びる。門に埋め込まれるようにある聖者達の像は、針の先よりなお細くその表情を作り込まれている。そこには、理想を夢見た一人の天才建築家と、それを実現させる何百人もの匠、そして遙かな年月が確かに存在した事実が表現され、見る者を圧倒する。徹底的で、圧倒的。誰でも出来る事なんて価値が無い。そんな半端なモノづくりのために生きているんじゃない。そんな強さを秘めている。そう秘めている。TVで取り上げられるぎらぎらした目のベンチャーではなく、穏やかに、そして密やかに、それでも自分と、それを目にするのできる数名だけには伝わる、その強さは、青くて静かな炎のよう。かつて私が憧れた、そして諦めた人生がここにある。彼は本物だ。そして自分の事を思う。いつからだろう、私はこんなに丸くなってしまった。工夫も苦労も中途半端、そんな生き方に甘んじて、肯定して、疲れたと自分に言い訳して。でも本当に頑張ってる人には嫉妬して。いつからだろう。私は、こんなにも弱くなってしまいました。気がつく、私は泣いてしまっていた。そして自覚した。私はもっと頑張りがかったんだ。なのに何故、止めてしまったんだろう。それは弱さか。どこが弱さか。判らない。そして、悔しさが苦しい。ふっと。右目に優しい感触。ハンカチが当てられる。目の前にナツキさんがいて、ここがどこで、いまがいつだかが返ってきた。ナツキさんが何かを言った。でも聞き取れない。だって、あなたは私には遠すぎて。憎すぎて。そんな事を考えている自分が情けなくて、くやしくて。

「——いじょうぶ——から——————へ——」

ナツキさんが何かを言っている。もう立ってられない。

目を開いたまま前へ倒れかかる私を、とっさの動きで受け止めて、そして抱いてくれる。あたたかい。そうだ、こうやって、休む心地よさを知ってしまったから、私は弱くなったんだ。意識が闇へ落ちる瞬間、私はもういない父の背中を見た気がした。

\* \* \*

とある冬。これは忘れられていた物語。息白く、身も心も凍える朝、私はアパートメントの戸を外へと押し開く。が、開かない。見るところ、30センチ以上降り積もった雪がつかえていて、僅かに開いた扉からもあられまじりの新雪がこぼれ込んでくる。力を込めて強引に扉を押し開く。瞬間、全ての視界が消し飛び、そして、視界の全てを白が占領した。眩しさに目を細め、一步を前へ、雪の街に踏み出す。すぐに靴に雪が入って靴下を濡らしたが、それも今は、冷たくて新鮮だと感じる。何故ならば、これは私にとって1年ぶりの外出だったからだ。変わった事は何もない。ただ、この1年間、何かを探していたのは事実だ。だってこんなにも焦がれている。何に？とは言わない。だって誰もが知っている事なのだから。それはあらゆる国で、あらゆる歴史の中で、文化がある一定の方向へと進んでいる事からも判る事だ。“ソレ”に触れることで、たとえそれがTVドラマとかのくだらないものだったとしても、涙が出る事がある。胸を突くソレ、私はそれを「人類共通の心の穴」とでも言えればいいと思った。誰の心にも、同じ形の小さな穴が空いている。だからその形をたどり、指でなぞり、そこに合う形がこの世の何処かに無いか

と探している。また、人によってはその形を自らの力で、技術で作ってしまおうともする。ともあれ、私もその一員で、その事について、つい考えをめぐらしてしまうということだ。雪が毎日の生活の中で染み付いてしまったどうでもいいことを全て吸い取ってしまうせいで、つい思考が、考えるべき核心の周りをぐるぐると巡ってしまうようだ。そんな天気だからだろう。気が付いた時には、取るべき行動の最善の目的地たる知人の工房へ、雪の中、足が勝手に体を連れてきてしまったようだった。はたと思考の空転から我に返って、改めて外出の目的を思い出す。昨夜の7時半ごろ、普段は鳴る事のないケータイに着信があった。設定してあったサティのヴェクサシオンの着メロで、相手が誰だかはすぐに分かった。そろそろかな、とも思っていた。吹雪の中を歩きながらログを再生する。

「やあ、先日会った時に話したモノが完成した。ハイパワーアクチュエータ46基搭載、マイクロアクチュエータ413基、イオンバッテリー3基、FRチタンフレーム製。重量は10キロ。その他もろもろ予定範囲内のスペックで費用も予算内だ。暇な時に受け取りに来るといい。しばらくは仕事もないからいつでも港の方の工房にいるよ。じゃあ」

ブツ、というノイズを残して、ケータイが切れる。それをジーンズのポケットに戻して、少しだけ早足で歩を進める。寒いから早く着きたかったからだ。やがてアスファルトの道路が砂利道になり、それもやがて、雑草の多い土の道になった。段々と海に近付くにつれて、吹く風は強く、冷たくなる。あられ交じりの向かい風の中を、タートルネックに顔をうずめるようにして急ぐ。やがて小さく、赤茶けたトタン屋根の、背の低い小屋が見えてきた。辺りにはもう他に建物は無い。そこが塩崎豊という男の工房だ。いよいよ到着した。正門のシャッターの脇に、スクラップを捨てるドラム缶と、小さく古びた木の小椅子が並んでいる。小椅子の上には灰色の猫が一匹、丸くなっている。シャッターは半分だけ開いていて、暖かい光と機械の騒音が漏れている。背を屈めて中に入る。鉄とオイルの焼けた匂いが鼻先をかすめた。狭い空間には大きな裸電球が一つ、天井から吊られている。窓はない。年季の入ったフライス盤、旋盤、ボール盤等の大きな工作機械が左の壁側に並び、向かいの壁には様々な鉄板や棒材が種類別に並び、壁にはいくつもの図面が、マスキングテープで張り付けられている。その中に自分が描いて製作を依頼した図面が無いかを捜したが、無い。恐らく、完成したから剥がしたのだろう。コンクリートの床にはうっすらと埃と鉄の粉塵が混ざったものが堆積している。それでもいつもに比べると比較的きれいだ。もしかしたら自分を呼び出したついで、大掃除でもしたのかもしれない。部屋の奥にはさらに奥の小部屋へ続く入口が空いており、その暗がりの奥から、じ、じ、じ、という音と共に、時折溶接の閃光が漏れている。そちらに進む。小部屋には、背中を丸めた中年のおやじが溶接面をかぶって工作に熱中している。まだ訪問者に気づいてはいないようだ。しばらく男の後ろに立って待っていると、ようやく私に気づいて、手を止め溶接面をぐいと頭の上に押し外した。急に部屋がしいーんとなる。

「来たか。だがすまないが、ちょいとばかり待ってくれないか。もうちょっとでコイツが」

と言って立てた親指で台の上のモノを指して、

「仕上がるからな」

そういつて返事も待たずに再び溶接面を下し、作業を再開してしまう。私は近くに立てかけてあったパイプ椅子を寄せてきて、積もった埃を手で払ってそれに座る。位置は彼の工作を観る特等席だ。座面は寒さでしっかりと冷えている。ここには暖房は無い。溶接の光を直接見ないように気を付けながら、しばらく、彼が作っているモノを観察する。どうやら何かのエンジンの様だ。ただし、見た事のない、七角形のような独特のフォルムの設計だ。多分、この仕事は修理とかのレベルではなく、オリジナルの設計、つまり彼の趣味のものだろうと見当をつける。知る限り、彼を超える職人は日本にはいない。彼が既製品のパーツを流用することは殆んどない。曰く、真の創造には他者の造形理念を取り入れては面白くない、だそうだ。いつか言っていた事を思い出す。音と光が止んだ。仕事、いや趣味が一段落したのだろう。顔を上げる。

「ちょっと待ってな、いま取りに行く」

そういつて彼は出てゆく。どっしりとした作業台の上に、ピカピカのエンジンがある。触りたかったがまだ触れないほど熱いようなので見ているだけにした。作業台の周りをぐるぐる回りながら、顔を近づけてじっくりと鑑賞した。一応自身も分野は違うが、造形のエキスパートであるので、それがいかに怪物じみた精度のものなのかがよくわかった。一言で形容するなら、奇跡。マスプロ、つまり一般に流通している工場生産品は、安定した品質で生産するために、どこかに必ず生産の為の妥協が設計されているものだ。ほとんど性能に影響の無い範囲での差だが、ワンアンドオンリーの工作物と比較するなら、それは決定的な差でもある。この、おそらく趣味で作られたであろうエンジンには、そういった点で設計に一切の容赦がない。工作精度でも、工場生産の限界を超えた、手仕上げの精度があるだろう。細部の差でしかないけれど、見る目を持った者ならば、たとえ法外な値段を言われたとしても買うだろう。市販品を超えているからだ。

「おまちど」

彼が返ってきた。肩には旅行鞆を細長く引き伸ばしたような形と大きさの、そう、例えばトロンボーンのカースのような、艶の無い黒い箱を担いでいる。彼は一度それを地面に下ろして、作業台のエンジンを、大事そうに壁に埋め込まれた棚に仕舞ってから、再び持ってきたカースに手をかけた。さっきよりもっと丁寧な物の扱いで、空いた作業台の上に置く。銀色に輝くロックをパチン、パチンと一つずつ外してゆく。その数上面に4つと両側面に1つずつの計6つ。最後のロックを外した途端、ぱかんと箱が割れた。裂け目を広げるように左右にカースを押し開くと、乳白色のエアパッキンに包まれた直方体の中身が現れる。さらにエアパッキンをそっと剥いてゆく。中身が現れるその瞬間に鼓動が速くなる。ドキドキしながら見ているうちに、エアパッキンのふちから光沢を放つ白い中身の角がついに現れた。全ての包装が外される。現れたのは、ひと塊の金属光沢のある白い直方体だ。塩崎はそれを片腕で抱き抱えると、黒いカースと梱包材を台からどかす。そして改めて、抱えたソレを置き直す。私はそれをもっと近くで見ようと立ち上がり、近づく。白い光沢の長細い直方体だ。飾りは何もない。手を伸ばして上辺を、掌の肉感で探るようにそっと撫でてみる。冷たい金属の、ひやりとした質感と、指に引っかかる事の無い、継ぎ目の完璧な処理に奮え、全身が歓喜する。叫ぶように笑い出しだしたいほどの喜びが、指先から全身に広がり、口元がにやりと歪む。しかし、本当に確かめるべきは工作精度のような些細な

ことではない。完璧であることは、あくまで最低限。道具は理念、いや、遣い手の願いそのものに他ならない。それを糾す。ここに具体となったモノは、私の願いだ。いくら造形が美しくても、そこにももの本質は問われない。何を作るか？何を願うか？何処を目指すか？何を求めるか？その結果が形となって現れる。私の願いは本物か。道具がその使用の結果への道を拓くとき、その答えがあるだろう。何を言っているのかわからない？そうだろう。この“真理”は、造り続ける者にしか、きっと判らない。彼は書類と工具箱を取ってくると言って、また何処かへ行ってしまふ。部屋には中央にある台と壁の収納棚の他にも、いろいろな備品がある。そのひとつ、等身大の移動式鏡を見つめて時間を抜くことにした。こうして自分の全身を直視する機会は、実は人生に百回もないのではないだろうか、そう考えて、そこに映る自分を形容してみる。やや小柄で華奢な身体は白いストレッチ素材のハイネックセーターを着ている。小さな口は薄桃色の唇、ほっそりとした顎のラインだけれども、角張ってはおらず女性的に丸みが付いている。脱色したわけではない生まれ持ったの白髪は清水の様に冷やかで透明感がある。それをショートカットにしている。前髪はちょうど眉を隠すように、横髪は耳の前に房を残して、後ろ髪は肩に触る程度、細くやわらかい髪は重力に逆らわず、真っすぐに伸びている。眼は半眼で、その奥に覗くのは、怖いほどに深い黒の瞳。低い鼻。少女のように頼りなく細い腰に、赤と黒のチェック模様の上着を巻いて、袖で縛っている。デニム地のスリムパンツと安物の白いスニーカー。頭からつま先までを総合しての印象は、軽く、柔らかく、弱く、脆い。はかなげ、とも違う。もっとアンバランスで不安定だ。正しく例えば「弱っている」様であるとか。昔はよく図書館や美術館で、女の子に間違えられた。いまでも時々間違えられる。両性の境界線上をぎこちなく歩いている身にとって、それはむしろ、少し嬉しい。ちょっとした快感でもある。少なくとも男なんてむさくるしいものには見られたくはないので、意識して女の子っぽく振舞っている節もある。例えば腰に巻いた上着は、後ろ姿からではスカートに見えなくもないし、服も、身体のラインが判るような物を選んで着ている。髪も、以前に鏡の前に立った時よりもずいぶん長くなっている。不思議と、女に生まれたかった、とは思わない。今の危ういバランスを取っている、男でも女でもない状態が愛おしい。少し異常かな、とも思ったりするが。鏡で自分と対話する時には、常に本音が出る。日々、男らしさを殺したり、街で女性に間違えられて声をかけられると少し気持よかったりする、それが自分だ。もうひとつだけ、本音の自分を観る事の出来る物がある。振り返って台の上の白い直方体を見る。それは自身の創作物だ。常に偽りなく自身が投影される鏡。同じDNAを持ったもう一つの自分自身。

「さて」

気づくと、資料を抱えた塩崎がその作業台の側に立っている。いつの間に戻ったのだろう。思索に耽っていて気が付かなかったようだ。

「まずは細部の説明から始めよう。おおむねはお前の図面道理だが、より効率良く運用できるように、設計の一部に手を入れさせてもらった。図面のままでは強度が不足だろう箇所や、軽量が可能な箇所も同様に設計を描き変えた。勝手にして悪いとは思ったが、つい放っとけなくてな。まあそこは俺の眼と技術を信じて欲しい。」

さて、

「外寸は1400、250、150の直方体、だいたいお前が両腕を広げたくらいだな。重量は9,7キログラム。まずは操作系だが、上面の起動ボタンを深く押し込むと、ハンドルがせり上がる」

彼が実際に操作しながら説明する。上面にある判子サイズの丸いスリットを親指で押し込む。ボタンが沈み込んで、そしてモーターの起動音が始まる。ずっと、静かにハンドルがせり上がり、ただの直方体から、靴状に姿が変わる。

「グリップの側面には5つのボタンがある。それぞれ5指の位置に対応し、使用頻度の高いものが人差し指に対応している。誤動作が無いように、押し心地はかなり硬めにしてある。」

台から持ち上げ、人差し指を強く握り込むように押し込む。外装がスリットで分割して、隙間が出来る。浮いた外装が移動し、正面に丸い穴が現れ、全長がスライドして伸びる。側面に内部の機構が露出する。外装の内側は黒のフレームだ。

「これが通常の射出形で、ボタンをさらに深く押し込む事で弾丸を射出する。次に」

中指を操作する。銃口が閉じ、スライドが元に戻り、ガチンというロック音と共に今度は側面の別の外装が大きくがばっと開く。中からハニカム構造の面が現れる。

「ハニーブロックマイクロミサイルは、一度の長押しで1ブロックの発射を行う。発射されたブロックミサイルは目標軌道上で分解し、16発の弾頭に別れ、広範囲を爆撃する。この形態で5つのボタンを同時に押し込むと」

開いていた外装が、別の可動軸でさらに大きく押し開いて、露出した面の後方の外装がそれと連動して開き、ラジエータのフィンが現れる。冷却が始まり、フィンから熱放射の陽炎が立ち昇る。

「全ブロックがランダムロックで射出され、周囲一帯を広範囲で爆撃する」

次に、

「中指を同様に押しすと」

展開していたフレームが急いで内部に戻り、外装がいったん閉じる。そして、前方上面と底面から箱型のマガジンが回転するように現れ、本体に垂直に埋まり込み、十字架を成す。小さく開いた側面の外装内部からグリップとスコープが浮上する。前方下部が開き6つのバレルから成る砲身が現れ、初弾がカシャと装填される音がする。後部からラジエータとアンカーが現れ、開いた各部の外装が、引き締まるように本体に密着固定される。

「これがフルサイズのチェーンガン。毎秒12発で中口径のライフル弾を高速射出する。連続使用限界の目安は5分。それを超えたら、熱化した砲身が予備の砲身と自動交換される。交換時の間隙は3秒弱」 下部からもう一つの砲身が現れ、それまでの砲身と、回転するように交換される。外された方の砲身は、本体下部にするすると格納されて見えなくなる。

「次」

白い直方体はめまぐるしく変形し、覗く黒色のフレームがいたる場所で同時に回転、スライドし、外見を変形させてゆく。

「薬指に対応するパイルバンカー」

全長が縮み、フレームが中央で左右に分かれ、それぞれがくの字になる。ちょうどマジックハンドの一節を抜き出したような構造だ。内部に、杭となるシリンダが、クロムの輝きを見せている。前部に両手持ちの為のサブグリップが現れる。フレームがゆっくりと引き絞られ、射出の待機状態が完了する。

「グラフィイトレインフォースド合金製のアンカーを速射して、40ミリ厚までの鉄板を貫通する。伸縮するフレームが反動を吸収するが、それでもある程度の反動が残るので、しっかりと握って使用しないと危険だ。コンプレッサの充填時間が掛かるので連射は出来ない」

最後に、と言って小指を押し込む。フレームの変形が元に戻り、次にこれまで見た全ての可動部が一気に開く。白色の外装がアームで伸長され、全ての面が前方に向く様に角度を変えてゆく。無数に伸びたアームは、アクチュエータで位置を修正するように、小刻みに揺れ動いている。

「オートディフェンスモード。本体の熱源センサに連動し半径900ミリへの侵入物に対して、外装が自動的に高速移動して盾となる。さらにこの形態のまま全てのボタンを握り込むと」

微動していた全てのアームが一瞬静止し、そして全ての外装を前方の一点で重ね合わさる様に集中し、厚みをつくる。それに内部の黒鉄色のフレームの動きも加わり、前方の盾を後ろから何重にも補強する。「小型ながら一点集中の耐圧防壁となる。それぞれの外装と、それを支えるフレームがフレキシブルに連動することで、強力な衝撃を分散させ、ラジエータが熱を発散させる。なお、親指の5秒間長押しで全てのギミックをリセットし、スリープ状態に戻す。」

数十のフレームが蠢き、静かに箱の中に収まってゆく。そして最初のただの白い直方体に戻る。

「電源ボタンを長く押せばグリップが収納され、電源が落ちる。メンテナンスの操作は、底のパネルの中のコックを捻ると、フレームが自動で全展開位置に開き、オーバーホールが行える。この形態で、消耗した部品の交換や弾薬、各種オイルの充填などを行う。最後の機能になるが、戦闘中にこの全展開形態にしてから全てのボタンを握り込むと、全武装、全残弾を前方に向けて一斉発射するフルバーストが行える。ただし、これはフレームにかなりの反動負荷がかかるから、最後の手段と思っておいて欲しい。俺からの説明はこれで全部だ」

塩崎豊は長い説明をそう締めくくった。四角い眼鏡が光の角度で白く光る。

「っと忘れてた」

言いながら、脇にずっと抱えていたA4の黒いファイルを差し出してきた。受け取る時に、指先が触れる。いかつく、太いがさがさした指は職人のものだ。

「その他の細かい機能とメンテナンス、構造図面などは自分で読んでいてくれ。とくにこいつはともかく可動部位が多いから、メンテナンスはまめにやってあげてやれ」

そう言う。私は彼に御礼を言った後、ところで、これの名前はなんて言うのですか、と、そう聞いた。私はスケッチと大まかな図面を渡して依頼しただけで、名前は、実際に作った彼に名付けけてもらうように約束してあったのだ。

「X6x」

彼は短くそう言った。が、難しい発音で聞き取れなかったので、えっと、なんですって、と聞き直した。

「エクス、シク、クロス」

今度は判った。図にすると幾何学的で、凝った名前だと思った。だから、エクスシククロス、エクスシククロス、とその名前を確かめるように口の中で転がしてから、

「いい名前です」

そう答えた。彼は満足げに微笑み、目じりにいっぱい皺がよる。自信を持った職人だけが出来る、いい笑顔だった。私は台の上で待機しているX6xの上面をそっと何度も撫でる。ひやりとして冷たい。指の腹が、パーツの分割面で引っかかる事もなく、面の処理も完全にフラット。完璧な仕上がりを再度確認して思わず笑みが浮かぶ。軽く電源ボタンに触れてみる。反応が無いのでやや力を入れてみると、かちっと音がしてヴーンというアクチュエータの起動音に変わり、やがて滑らかにグリップがせり出てきた。右手で持ち上げて、少し台から浮かしてみる。思っていた以上の重量に手が驚く。よろけそうになったが、左手も添えて両手持ちにすると、力強い重みとして安定した。重みだけは図面上で実感する事が出来ない。しかし作ったのが彼の事だ、これでも可能な限り軽量化した結果なのだろう。試しに、人差し指に当たっているボタンを握ってみる。軽いタッチでボタンが沈み込む。そしてほぼ瞬間と言える間を持って、フレームが変形する。重心がやや後方に移動する反動と、アクチュエータの振動が肩にまで伝わってくる。意外なほど静かに変形すると思った。可動部の一つ一つを観察する。肉眼で確認できる範囲ではぐらつきもずれも見当たらない。何度か他の変形も試した後、電源を落とす。シュという最小限の音で、巨大な凶器が無害な白い箱に姿を戻す。そのギャップは少し不気味でもある。

「ありがとうございます。相変わらず完璧な仕事ですね」

「なに、俺の腕は天才だからな」

ジョークではなく本気で言っているな、と思う。そしてそれに間違いはないだろう。彼は私からX6xを受け取ると、元のようにキャリングケースにそれを仕舞いながら唐突に問うてきた。背中を向けてしゃがんでいるので、表情は判らない。

「俺は、水無川を良く知っているから、何も言わずに図面のままに作った。けどな、これは本来、この日本にはあってはいけないものだ。判るだろう。言うまでもなくこれは違法な凶器だ。遣い方次第で人が死ぬ、いや、むしろ積極的に人を殺傷するための技術を大いに応用した武器だ。だから今一度、本当に今になってだが聞きたい。答えによっては、俺はこれを手渡すわけにはいなくなる。判るだろう。水無川、お前は人に凶器を作らせといて何をやろうとしている。いや、何とは聞かない、ただどんな結末を望んでいるかだけは確認したい。判るだろう」塩崎は背中を向けてしゃがんだまま動かない。無言の背中が答えを待っている。それを見つめて、しかし口は動かない。ただ、それは言葉を選んで沈黙で、彼に伝えるべき答えは喉まででかかっている。無意識で右手の人差し指でぐるぐると小さく円を描いている。何かを考えている時の癖だ。いくばくかの沈黙を要して口を開く。意識してゆっくりと、小さくてもはっきりとした声で

答える。

「どうしても手に入れたい物があるんです。元は僕の所に有った、いや居たというべきかもしれませんが。それは僕の半身のようなもので、それが今はとても遠い所で、嚴重に守られています。どうしてそうなったのかは分かりません。それを取り戻したい。そうしないと僕は、ずっと胸が苦しくて、きっと壊れてしまう。それを取り戻すのは、どこまでも私的な用件だから、僕一人で為さなければいけない。でも、僕にはそんな力は無い。だから道具を遣います」

「その私的な用件の為に、人が死ぬかもしれない、いや、人を殺さなくてはいけないかもしれない。そう考えた上でもまだ、やらなければいけない事か」

問い詰める声はいつもより低い。でも答えは変わらない。それを口にする。

「僕は……それを堪えられない。たとえそれで僕が人殺しになって、みんなのところへ帰れなくなっても、僕はそれを堪えられない、と思います。だからせめて事をなるべくスマートに遂行するために、最良のツールを遣う必要があるんです」

そうか、と塩崎は言って立ち上がる。わずかに首を回すが、まだ表情は見えない。そのまま言う。「判った。それがお前にとって大切な事なら、俺はそれを全力でサポートする。しかし、決して忘れないで欲しい事がある。武器は、たとえ良く使ったとしても、本質的に人を殺す為の技術だ。それが俺がMITで学んだ恐らく一番重要な事実だ。それをしっかりと理解するなら、俺はX6xをお前に委ねられる」

塩崎は振り返って私の瞳を直視する。そこに何か視えたのだろうか、ふと歯を見せた笑顔になり、脇に身体をどけて、通り道を譲る。私は感謝を込めた会釈をして、屈んでキャリングケースのハンドルをしっかりと掴み、一瞬両目を閉じて、決心して持ち上げる。細い体が重さによるめく。が両脚を大きく踏みしめて、しっかりと立つ。塩崎の傍らを通り過ぎて、工房の出口へ向かう。塩崎はすれ違う瞬間も無言だった。言うべき言葉は全て尽くした。だから何も言う事は無い。暗い室内から白い吹雪へ、そして塩崎は工房のより深い闇へそれぞれ歩む。二人はそれぞれの場所へ、願いの向く先へと進む。止める者は誰も居ない。

\* \* \*

視界を白が塗りつぶす。地上も、天上も、そしてその境界線でも白と白が溶け合っている。思う。ここは何処だろう。今はいつだろう。いつから自分はここにいるのだろうか。そして、自分は誰だろう。自己を確定する外界の一切が白に塗りこめられて存在しない今ここは、どこでも無く、いつでも無く、そしてだれでも無い。無い。いや、無い世界の他に一つだけ、この思考のみが唯一の拠り所となって、自己を存続したらしめている。私の名前は水無川無月。それが判ると、一気に形ある記憶が押し寄せてきた。塩崎さんの工房に出かけた事、一度帰宅して、スクーターで近くのコンビニに行き、カロリーメイト一箱と88円のコーヒー牛乳を買った事。アパートに帰ってから、返却期限が迫った本を読みながらカロリーメイトを食べて、コーヒー牛乳を飲んだ事。食後にコップに少しだけ注いだジンを一気に喉に流し込んでむせた事。そして、そこから先の映像がぷつぷつと消えている。だから、ああ、つまり、

「これは夢だ、ということかな」

言葉は音にならずに、純粋な意味となって世界に木霊した。それでああやっぱり夢だ、という確信が湧いた。この世界は何処までもフラットだ、奥行きが無い白の世界、何も無い世界。一方で、起きている時の想像の世界、眼を閉じたときの世界は反対に黒い世界、無限の奥行きがあつて、何ものをも創造し得る世界。ここは、まだ言葉も自意識も持っていなかった幼い頃から繰り返し見る夢、いや繰り返し来る世界だ。本当に何も無い世界には、何かが芽生える可能性さえ無い。ここにいる私はいつしかこう思うようになった。これが私の夢ならば、私は何も必要としない。私は誰も必要としない。私の中の唯一の理想とは、“何も無い”という事ではないか。この繰り返し見る夢は、私の根源的な願望が投影された世界、心象風景なのではないか、と。しかし、今回の夢はこれまでに繰り返された物とは、異なっていた。たった一点の違いは、しかし0と1を隔てる差のように、小さくても本質的な差であつた。奥行きが無いはずの白い視界の遙か遠くに、白い地平と天上とが交わる境界線上に、何かが立っていた。それは、はっきりとしたかたちを持たず、ピントが合わないようにぼやけている。ただそれは、なんとなく人間のような形に見えた。それが何かは判らないが、それが何故か、とても重要な、また自分にとって決定的なものであると判った。私が存在する以上、それもまた対になって存在すると、そんな考えがどこからか浮かんできた。だから私は、その遥かな一点に向かって、全力で駆けだした。そうしない訳には、何故だかいかかなかつた。通り過ぎるモノの無い風景の中、切る風の無い世界を、全力で駆けた。見える風景は変化せず、ほほを冷やす風もないから、まるで同じ場所で足ふみをしている様にも思える。実際、遠くのもの見え方には変化が無い。この世界の中では、近づくという事が出来ないのではとも思えてくる。ここは時間が無い世界であるが故に、どれくらい走り続けているかは判らない。また、距離の無い世界であるが故に、どのくらい近づいたのかも判らない。それでも、その遠くにある何かは既にしっかりと、私との絆を持っている様に思われた。だからそこへ行かねばならない。それを手にしなければならぬ。その感情は、人生の意味のように重く、動かし難かつた。少しずつ世界が暗くなってゆく。目覚めが近い。焦りが脳を焼き始める。早く、早く、もっと近く。もう殆んど何も見えない。身体の「現実」の身体感覚が戻りかけている。届かない遠くに、最後に右手をめいっぱい伸ばした。そして。そして私はベッドの上で眼が覚めた。ふかふかの布団の中で、ゆるやかな気持ちで天上を見る。天井の木目がシャチのように見える。何か夢を見ていたような気がするが、覚えていない。毛布と掛け布団の重みと温もりを押し上げて、ベッドから這い出る。今日も一日が始まる。

\* \* \*

焼きたてのトーストにオレンジのアプリコットジャムをたっぷり、コーヒーにはクリームを少し、青々としたレタスサラダには自家製バジルソースと粉チーズ。いつもより少し多めの朝食を楽しむ。今日は週末の金曜日で、楽しみにしていたクラシックのコンサートに行く日だ。そのせいで朝から、体も心もずいぶん軽やかだ。演目は近代フランスの作曲家を中心に、何と言っても私の大好きなエリックサティの曲、三つのサラバンド、ノクテュルヌ、夢見る魚、梨の為の三つの小品、そして何と云っても三つのジムノペディが生で聴ける。サティの故郷オンフルールからピアニストが来日する、逃したら一生にそうは無いラッキychanceなのだ。クラ

シックミュージックは私の数少ない趣味の一つで、制作に向かうときにはだいたいいつもイヤホンで流している。私の商売道具、デザインナイフ、2液性ウレタンキャストと共にサティピアノ全集5枚組CDは生きていくのに欠かせない。ささやかでいて、故にリッチな朝。少し苦いコーヒーを舌先でころがしながら、朝食をいつもより時間をかけて味わい終えると、支度をして街へ出た。一応は一人の社会人として、どんなに浮かれたい日でも、日の出ている内は、ちゃんと仕事をしなければならない。いつものようになじみのギャラリーをめぐり歩き、作品の注文が無いかチェックして回る。三つの喫茶ギャラリーを回って、一件の仕事を取り付けた。これで半年分の生活費が賄える。古びた感じのルビーの眼をしたクラシックドールを作って欲しいという内容で、なじみのある縁の太い顧客からの注文だった。有難いことである。私の場合、人形は造形のレパートリーの中でも最大の収入源となっている。必ず注文を受けてからオーダーメイドで制作し、どんな部品が必要でも外注には出さない。その代り最高の完成度を保証する。一体で数百万の仕事となる。この国の工芸協会には入会していないため、口コミでの細々とした情報網、知る人にしか辿れないルートで、極々稀に制作の依頼があるだけなのだけれども、その完成度は右に出る者を許可しない。故にリピーターが付き、懐に余裕のあるコレクター相手に商売が成り立っている。一般にドールと呼ばれるジャンルの芸術は19世紀のヨーロッパで完成された。球体を関節に用いた裸体の本体にグラスアイをはめ込みウィッグという人工の髪を被せ、布の衣装を着せるのが一般的な様式となっている。これにメイクを施したり、オリジナルの小物やアクセサリを身につけたりさせるとさらに完成度が上がり高価になる。それに対して自分の作る人形が変わっている点は、布の衣装を使わずに、衣装をプラスチックの皺で質感表現し、関節による皺の中に、ヒンジ状の関節を隠して可動させることだ。様式的には日本で発達したフィギュアの技法との折衷と言える。ただ、西洋のドールや日本のフィギュアと明らかに異なる独自の点は、可動によるポーズ付けの自由度が突出して優秀だという点だ。一般家庭の展示棚に収まる一般的なサイズで、小指の先まで可動するという点だけでも類を見ない精密さと言える。多くの人形作家が、その外観のリアルさで人形を人間に近づけようとするのに対し、自分の場合はまるで生きている様に体が動くという点で人形に魂を吹き込んでいる。事実、舞台俳優が指先まで神経を込めて全身で感情を表現するのと、全く同じレベルのポーズ演出が出来る。顧客から「本当に生き生きしている」と言われる点はそこである。そのような方向性の作品であるから、結果、部品の数、微細さは、気が遠のく程になり、制作は困難を極める。そのため注文は一度に1体までしか掛け持ちしないという風に、自分でルールを決めている。仕事の掛け持ちは苦手だ。出来れば眼の前の一つの事に没頭したいと思っているし、実際そうになっている事で、一体一体が妥協の無い仕上がりになっている。気が散らない事が何よりも大事だ。今日運よく一つの依頼を取り付けた事で、これ以上の散策はしないで、工房を兼ねる自宅のアパートに引き返す。帰ってきて玄関を通り、リビング兼工房の時計に目をやると、もう11時を回っていた。作業にかかると最低でも3週間は文字通り“こもる”ことになるので、午前中の半端な時間を利用して、その間の食糧を買いに出ることにした。まず電話で、制作中の主食となるカロリーメイトを業務スーパーで3カートン注文する。期間中はほとんどこれ以外口にしない。また、食事は朝夕の二食に減る。さて

と、と首をばきばきと鳴らし、外へ出る。白い自転車の鍵を解除して、またがり、注文をした業務スーパーに向かいゆるゆると漕ぎ出す。そして暫くして、財布を持っていない事に気が付いて、引き返した。時刻は12時を回った。

\* \* \*

山根閑は、何もしていなかった。30男の平日昼下がりとしては、いささか異常に、問題がある生活態度ではあるが、実のところ、これが彼の“仕事”の姿勢なのである。彼が初めて、自分の「閑」という名前の意味に興味を抱いたのは小学生の時だった。その時に、道徳か何かの授業で、自分の名前の由来を親に聞いてくるというのがあった。そしてその由来が「長閑」、つまり両親曰く、「何もしないで楽に生きる」と知った時、彼の生き方に一本の道が出来た。いや、出来てしまった。つまるところ、名づけるまでもなく、彼は子供にして怠け者だったということだった。それから彼は、実に積極的に、いかに怠けて生きるかを考え出した。あらゆる進路を考えて、調べ尽くした。結果だけ見れば、学生時代の彼は、周囲の誰よりも進路に対して真剣に取り組んでいた。そのことが、彼をその本質に反して、真剣で真面目な優等生として、周囲に認知させていたように思う。かくして高校3年の夏、彼はとうとう詩人という生き方に行きついた。彼のイメージの中での詩人は、仙人に近いニュアンスをもっていた。つまりは、何もせず、静かに周囲を感じ取り、それを素直に書きあげるといふ、つまるところは究極の受け身の芸術なのである。故に山根閑はのどかの名の通りに、何もせず、そして時として作文し、それをEメールで出版社に送る、そしてまた何もなくなる、という隠居のような生活態度を貫いている。そんな彼だが、外見はその仙人的な理想像からは対極を成している。第一に、肩まで伸ばした茶髪のロン毛である。そして顔の堀は深く、表情は、蚤で掘ったかのように深く消えない皺を寄せている。背は高く肩幅も広い。襟を立てた、よれた黒褐色の革ジャンを羽織り、だぶついたジーパンは膝が大きく破けている。ヤクザの親玉か、西部劇の悪役か、といった風貌である。無造作にトンプソン銃を取り出したりすれば、さぞ絵になるだろう、決して美しくはないが。煙草も吸う。決して100円ライターなどは使わない。使い込まれたジッポを片手で操って火を付ける。そうした細部まで統一された「悪い男」のイメージを、本人は「実に渋いだろ」と言うが、あまり同意される事は無い。そんな彼の性格や実体はというと、作り上げられた厳つい男のイメージを真正面から裏切る。彼と長い時間を過ごせばたちまちにその実態が露見する。まず彼は、力仕事では全く頼りにならない。体が大きいだけで筋肉が無い。まあ詩人なので当然ではある。服を脱がせば貧相な体つきにがっかりさせられる。例えるならベニヤの城、だろうか。それに家庭的だ。趣味は料理である。お好み焼きを特に好む。鍋料理も得意である。裁縫もする。甘いものが好きだ。つまるところ、彼は見かけ倒しなのである。しかしまあ、つねづね他人から距離を取り（臆病なだけである）、黙り込んでいるので、彼の意外な実態に気付く人間は、幸いにして少ない。そして友人も少ない。長椅子で眼を閉じていた彼のポケットで、ケータイが着信を告げる。黒電話のじりじりという音。小さなケータイを尻ポケットから摘み出し、慣れた手つきで振って開く。四角い眼鏡のレンズに、映り込んだ文字列が流れてゆく。そしてケータイを振って閉じて、ポケットに仕舞い、反対の手で草の上のリュックサックを掴み、億劫そうに立ち上がり背負う。人気

の無い草原を後にしてゆっくりとした足取りで向かう先には、灰色のビルディングが連なる都市がある。木陰に長椅子を残し、彼は去っていく。

\* \* \*

ケータイが着信を告げたので三浦由紀は慌てて電話に出た。客のがやがやとした話し声と店内BGMがうるさくて、耳にケータイを密着させて、隙間を手で塞ぐ。三浦の横には吉岡辰也がショッピングカートを止めて彼女を見ている。今、三浦と、その同期の同僚、かつ彼氏である吉岡は、会社の近所にあるスーパーマーケットで、鍋の材料の買い出しをしている最中だった。時刻は日の傾きかけた午後の4時を回っていた。本来なら、まだオフィスのデスクに向かい合っている時刻なのだが、今日は社長である藤原理子の気まぐれにて、夕食に鍋パーティを開く事になった次第だった。仕事を早く切り上げてその準備をしている最中である。普段から重要なパシリ要員であるところの吉岡と、そのアシスタントとして三浦が揃って買い出しに出されていた。今頃、今日は入社してこなかった閑さんにもメールで招集がかかっていることだろう。久々に全員が揃う事になる。このような「集合」は月に一度は必ずある。クリエイタ集団である当社の社員は、普段は基本的に、各自が各自のノルマに向かって、自宅や貸しアトリエに分散して活動している事が多い。オフィスには一応全員分のデスクがあるが、グループワークやミーティングのある日以外は、ぴったり席が埋まることはまず無い。だからこのようなイベントで、定期的に仲間意識を再確認する必要があると、きっと理子社長は考えているのだろう。まあ、単にお祭り騒ぎをして旨いものを食べ、お酒を飲みたいだけなのかもしれないが。私はイベントが好きだ。それに他の専門分野の仲間と会話する事は、必要な刺激だと思っている。それに、自分の制作に対して、高度なアドバイスや意見が貰える場でもある。まあ、そういう真面目な話は置いとくにしても、鍋番長である閑さんの手料理をお腹いっぱい食べられるというだけでも、十二分に価値のあるイベントではある。吉岡は、私がそんな事を考えている間に、電話を片手にさまざまな野菜をカートに放っている。相手はきっと、理子さんからメールを受けた山根さんだ。電話越しに今日の鍋に必要な材料を指示しているのだろう。前にもこれと同じシチュエーションがあったのでそう思って見ていた。吉岡はケータイを片に挟んでメモを取っている。きっとその場に無い品物のリストアップだろう。通話が終わったらしく、吉岡はケータイを片手で閉じてズボンの後ろポケットにしまう。毎回見ていると思うのだが、どうして男の人は大切な物を平気で後ろのポケットに入れておけるのだろう。誰かが通りざまにさっと抜き取っていきそう、私は他人事ながら不安になる。「みう、ちょっと」

吉岡があたしを呼ぶ。手を招き猫のようにひらひらさせて。

「食い物の追加、山根さんから。主に海鮮系だけど調味料の類も買い足したいらしい。んで俺はあっち、みうはそっちで調味料を揃えて」

そう言って、メモを半分当たりで二つに破って、その下の片方を渡してくる。

「それと、理子さんの立山とジンもお願い」

そう言うてくる。私はとっさに怪訝な顔になる。ジン？誰が飲むのだろうか。これまでに何回かこのような夕食会をやったが、だいたい誰がどんなお酒を飲むのかは決まっていた。理子さん

はホットの日本酒で銘柄は立山。学生時代から飲み会と言ったら立山と決まっているとっていた。山根さんはビール、吉岡はオレンジジュースかジンジャーエール。私は白ワインだ。吉田家一家が加わる時にはウーロン茶も必要だ。これまでアルコールの種類は、料理が変わっても一度も変わった事が無かった。だからメンバー分のお酒はオフィスを出た薄暗い廊下にある冷蔵庫に、あらかじめ一定量ストックされている。ただ、飲み会毎に、ざるの理子さん用に新しい日本酒を一本買い足すのがパターン化されている。毎度変わらない買い物、だからジンという注文に思わず不審を抱いてしまったのだ。疑問が顔出てしまっていたらしい。意を汲んだ吉岡が、ん？とって説明してくれた。曰く、今日はスペシャルなゲストが来るというので、その彼かあるいは彼女の為に、ということらしかった。それにしてもジンとは、相当強いお酒だ。また、あらかじめ好きなお酒の種類が判っているという事から、案外に近い人が来るのかもだね、と思う。吉岡からリストの半分を受け取って、調味料の小瓶が並ぶコーナーに向かう。走り書きされたメモに目をやると、バジル、粉末ガーリック、みりんの小瓶、そしてバニラスティックにパプリカとある。一体何を作るレシピか、全く理解の範疇を超えている。一体どういう鍋になるのやら、答えて欲しい山根さん。まあ、こと料理に関しては彼をそのまま信じ込んでも被害は無いのだろうけれども。そう思い、とりあえずメモにある品々をカゴに入れてゆく。唯一、バニラスティックだけは店員に尋ねて見つけてもらった。吉岡を捜すと、まだ魚コーナーに立っているのが見えた。両手にサザエを持って大きさを吟味している。バニラスティックにサザエ、どんな鍋を計画しているのやら、不安7割、好奇心3割のため息が出た。

\* \* \*

暗い部屋だ。一寸先も見えないのは、窓が段ボールとガムテープで閉ざされているからだ。完全な闇というのは、もはや人工空間にしか無いように思える。街灯の無い砂漠、雲が月を隠す夜であっても太陽の光は僅かながら夜の輪郭を照らし出している。闇は、閉ざされているという感覚を起こさせる。その通り、この闇の住人は殆んどこの部屋に閉ざされて生活している。その闇に音が一つ小さな明かりと共に現れた。ケータイが振動している。緑の点滅が闇に浮かび、メールの着信を示している。ゴソツと動くものがあり、衣擦れを伴ってケータイが取られる。何者かがケータイを開くと、再び闇は静寂を取り戻す。ディスプレイの四角い発光に照らされて、線の細いシルエットがおぼろげに照らし出される。スクロールされる文字列が白く反射した眼鏡の上を流れてゆく。いくばくかの沈黙の後、慣れないぎこちない手つきでメールのレスが返される。役目を終えたケータイが閉じられ、部屋は再び闇と静寂に閉ざされた。

\* \* \*

吉岡と三浦がオフィスに戻ってくると、理子さんがちょうどケータイを閉じたところだった。彼女の木製のデスクは西側の窓を背にしており、彼女の鋭利なシルエットがオレンジ色の夕日に切り取られて色影絵のようだ。この小さなオフィスには他に北と南に大窓があり、そのそれぞれの前に四つのデスクを集めた島がそれぞれある。つまり9人部屋だ。机以外の備品は無い。今はセピアに染められている灰色の部屋には、キャビネットやロッカー、そして時計すら無い。それをシンプルだと言うか、淋しいというかは人それぞれだろうが、しかし、シンプルさとは、淋し

さの持つ美の側面を指して言うのではあるまいか。そんなことをふっと考えるのはやっぱり夕日の影響下にいるせいで、センチメンタルになっているからだろうか。らしくない。吉岡は自分のデスクに買い物が詰まった両手のビニール袋を置いてから、理子さんに話しかける。

「帰りました。今日のメンバーは何人ですか、当然山根さんは来ますし、塩崎さんも来るのでしょうか。それに、先程言っていたゲストって誰なんですか」

凝り固まった両腕の筋肉を揉み解しながら吉岡は社長用デスクに向かう。椅子に深く腰掛けている理子さんは、「社長」と書かれた黒い三角コーンのオブジェをいじくりながら答える。

「今日は本当のフルメンバ、つまりまだ君の会った事の無い大先輩にも召集をかけた。そろそろ顔合わせする頃だと思って、ね。三浦は先日、私からの所用で会っているな。まあ全員集まったところでたかだか9人だけれども。社長の私、新人の君と三浦、山根閑と、古株の塩崎」

塩崎と聞いて少しだけ緊張を覚えた。数度仕事で会っただけだが、無口でいかにも職人肌のあの人は、あまり得意ではない。あの人の眼で見られると、自分がいかに利他的で楽観的に生きているかを正されるような気持ちになるのだ。そんな臆病な内心を無視して理子さんは指を折りながら数え上げる。

「それと吉田家の3人、麻衣さんにサブロウさんに叶ちゃん」

吉田家はこの建物の道路を挟んで向かいの家に住んでいる家族で、芸術系の家系だ。エプロンの似合うポニーテールの吉田麻衣さんは家庭的な元美大教授。長女の叶ちゃんは今年、無事美大に合格した少し恥ずかしがりな少女、夫のサブロウ氏だけは白衣の下にアロハシャツを着込んだプログラマで留学経験あり、今も一年の大半をアメリカの大企業で働く凄腕だ。性格は変態だが、3人は職務要員というよりもアルバイトに近い。仕事の忙しいときの助人であり、差し入れを持ってきてくれたり、どちらかという、生活が乱れがちな我々メンバの生活面での命綱だ。とはいってもその働きぶりは決して平凡ではなく、というかかなり器用で恐ろしく忍耐強い。まだ10代の叶ちゃんは若いからこそその鋭いアイデアを隠し持っているし、サブロウ氏に至っては、コンピュータサイエンスのある分野ではパイオニアだったりする。エンジニアとして同じ高みにいる塩崎氏とは気が合うらしく、会う度に素人の自分には呪文にしか聞こえない専門的な会話に花が咲く。そして最後のメンバ。

「三浦はついこの前会っているから、吉岡だけが初対面になるか。スペシャルゲストは我らが縁の下の大黒柱、いわゆる水無川無月だ」

大黒柱は縁の下に無いのでは、いや、貫通してるからアリか。どちらにしても誤った云い回しだが、意味は一応通じている。水無川、その名には少し覚えがある。この前の仕事で理子さんが切羽詰まって七転八倒した揚句、こんなときに水無川が居てくれれば、と天を仰いで愚痴っていたような。確か、期限の差し迫ったモデルの外注に追われていた時の事だった。それに、自分の向かいのデスクが入社以来ずっと空席になっている謎を理子さんに尋ねた際には、「ああ、そこは特等席だ」とだけ言っていたような。どうやらその空席の主が水無川無月という人らしい。

「水無川はこの弱小会社の収入を陰で支える特級の腕利きで、私が惚れ込んでスカウトした史上最高の人形師だ。工作全般において、ハンパない。敬意をもって先輩と呼ぶように」

ただね、と理子さんは陰りのある表情でつぶけて言う、

「いろいろとあって大怪我した後長期入院していた。退院後も精神面での傷害が酷く残って、ついこの前まで私の方から休業を言って休ませていた。吉岡と三浦の入社とは入れ違いになる。それでこのまえ所用を言い訳に三浦の様子を見に行かせたら、どうやらそろそろ大丈夫そうだと判ったから、今日は彼の復帰祝いパーティも兼ねている」

そう言って、暗い話題を振り払うように、にやりとふざけた顔になって、ひひひひ、という気味の悪い笑いまでつけて言い放った。

「言うておこな、吉岡。あまりの可憐さに惚れるなよ」

理子さんは意味ありげに、ちらりと三浦を見る。自分も合わせて三浦を見る。そして理子さんに視線を戻して言う。

「ないですよ。自分はみうを愛しています」

三浦は赤くなって顔を逸らしてしまった。理子さんかというと、アツイアツイといって、手を団扇のようにしてひらひらさせておどけている。全く。さらに理子さんが語るによれば、その水無川無月なる人物は、理子さんが会社を立てようとしていた時に偶然に出会って、半ば強引に1番目の社員に仕立て上げたらしい。そうして二人だけの会社がスタートした。そしてまた、理子さんの読み通り、水無川さんはその稀代の造形力で、出来たての弱小会社の進むべき道を切り開き、後に常連となる顧客をかき集めた。それを例えるなら、箱としての会社を理子さんが創り、その中身を水無川さんが創った、ということになる。事実、当時の実務はほぼ水無川という才能を当てにしているの依頼で、制作は実質、彼一人に集中していたという。それはつまり、出来たての会社一つを、実質一人で支えていたという事になるまいか。そのことから、水無川無月のポテンシャルの高さを推測できる。お金と時間を持て余した趣味人に、最高のワンアードオンリー作品を提供する、というのが、この弱小会社の初期の営業であった。そのために制作のそれぞれの分野のエキスパートが、理子さんの眼で集められて、この会社は成り立っている。すなわち、発想、デザイン、設計、強度計算、試作、工作という一連の創造過程を、最高の人材で分担しあう場であるからこそ、いかなる追従を許可しない完成度の作品を、顧客に送り出せている、そしてこの9人しかいない小さな会社が存続できているのだ。それを先の話と絡めて逆算すると、その全行程を、一人で、しかも最高の仕上がりでやり続けることができた才能、それが、理子さんと共にこの会社の創成期を共に過ごした水無川無月という人物ということになる。確かに、それなら新人たる自分が必ず会うべきというのも頷ける。しかし、その偉大な先輩との初見が、鍋パーティというのは、いささか間抜けではあるまいか。また、それ程の人物の近くに自分がいて、入社してすぐにでも会えなかった事、彼を知らずに過ごした、もしかすると彼の影響を受けてもっと成長できたかもしれないこれまでの時間が悔やまれた。自分を省みて、ただの美大出身者であるところの吉岡は、自分は平凡であると感じている。モノを創り出す事への熱意は強い、とは自覚しているものの、他を探せばもっと執拗に創造し、そして腕の立つ人間は捨てる余裕があるほどに多い事も感じている。そこには、自分はまだ若いという言い訳は通用しない。少なくとも自分からそういう言い訳はしないという意地が吉岡にはある。それだから、自分が非凡

ではない事に、いつも危機感を感じている。だから、学べる機会があれば決して臆することが無いように心構えを持っているし、自分より遥かに高みにいる仲間達の中で己を鍛えられる今の自分の居場所を、有難いと思っている。そんな事を以前、理子さんに語ったところ、「そういうキミだから、私は君がここにいることの価値を見出したんだよ。つまり、性能のよいパーツを集めるだけでは、いつか必ず他に追い抜かれる。性能の良さにジェラシイを感じている他者の視線がすぐ見える隣にあつてこそ、全員が油断なく自己の性能を磨き、最高のモチベーションを保っている事が出来る。それが君の価値だ。そして、君みたいな人格は、そうなかなか見つかるものでもない。自信を持ってとは言わない、しかし君は君のここでの必要性をもっと誇りにしてもいいんじゃないか」確かそんな事を言われたような。その言葉に、自信とは言わないまでも、何か心を温かくするもの得た。有難い話だ。回想の終わりと、理子さんの合図は同時だった。「さあ、じゃあ今日の仕事はここまで。鍋の仕込みは、おい、いつの間に居たんだ、山根、お前に一任する。吉岡は野菜を切つて。三浦は私と追加のお酒を買いに出る。これだけじゃ足りん」

行動開始の合図に、理子さんはパンと手を打つ。それで各々が動き始める。それから数十分は各々が黙々と準備をした。吉岡はネギなどを切つて、大根の皮を剥いたりした。山根さんはデスクを中央に集め大きな島を作り、余計なデスクを壁側に寄せた。中央のデスクには既にカセットコンロが置かれ、その上にはもう土鍋がセッティングされており、ぐつぐつと蓋の隙間から湯気を吐いて、煮たっている。彼はいつも仕事が早い。黙々と行動して、みんなが気付く頃にはもう出来上がっていて涼しげな顔をしているのが常である。今は、湯の中にだしの素やら調理酒やらを少しずつ入れて、味を作っている。もう日が落ちて窓の外は真っ暗で、いつの間にか蛍光灯の明かりに切り替わっている。外の暗がりには、昼間は存在を感じない無色の気体だが、夜になると、質量を持った闇という物質に化ける。買い出しに行った2人はまだ帰ってこない。味付けを終えた鍋に、切った具を入れたら、する事が無くなったので、山根さんと二人で黙って何とはなしに煮立った鍋を見つめていると、夜も意外と騒がしい事に気づく。車の通り過ぎる音は遠ざかってもずっと聞こえるし、民家からの雑音は、集合し、混合され、人の営みの気配として、想像を掻き立てる。椅子の上で姿勢を変える度に聞こえる衣擦れとパイプ椅子のきしみ、自分の立てる音と閑さんの立てる音よりも、鍋の音の方がずっと大きい。そうして待っている内に、二人が帰ってきた。二人とも、お酒の缶でぎっしりと詰まったビニール袋を両手に提げている。それらを冷蔵庫にあらかじめ冷やしてあった分と入れ替えて、並べる。冷えた日本酒の瓶や、ビールの缶、ペットボトルのジュースと紙コップなどが、鍋を囲んでずらりと並ぶ。湯気を上げる鍋からは、だしと、さまざまな具のまじりあつて煮立った好い匂いが立ち昇り、部屋をいっぱいになっている。鍋を囲んで座る4人は、黙ってこの心地よい静けさを楽しんでいるようだ。窓ガラスが湯気でけぶっている。理子さんが腕時計で時刻を確認して言う。「8時30分だ。そろそろ水無川も来る頃だろう。9時にと言っておいたが、あいつは前もって行動するからな。」杯にとくとくと立山を注ぐ理子さんは、もう待ちきれないといった様子だ。いや、待ち切れなかったのだろう、もうちびちびとやりだしている。いつもはきりっとクールな理子さんだが、気が緩む時は子供のようなふにやふにやした笑顔に替わる。そんな理子さんを見て、自分たちも飲み物の用意を

する。閑さんがぶしゅっと缶ビールのプルを切り、三浦がワインのコルクをぽん、と抜く。ジンジャエールのボトルをそうっと捻ると、しゅ、というかすかな音と共に、中で琥珀色の液体が泡立つ。準備万端といったところか。みんながなんとなく顔を見合って照れ笑いが起こる。ますますいい具合に香りを吹き出す鍋に、閑さんが最後の具を投入する。そして、各々が舐めるように自分の飲み物をすすって待っていると、入口の方から誰かの入ってくる物音がした。かつん、かつんと、金属の階段を上る足音が近づいてくる。そしてオフィスのドアのすりガラスのガラス窓に、背の低い小柄なシルエットが映る。ステンレスのドアノブが静かに回る。ドアが開いてゆく。最初に見えたのはドアノブにかかった白くて細い指先、現れた人物は、折れそうに危うい華奢な身体。開いたドアから吹き抜ける冷たい風に、白くて柔らかい髪がなびく。白いセーターと黒のパンツのコントラスト。飾り気のない白いシューズ。ゆっくりとドアを閉める動きはしなやかで、柔らかい上着の布地が蛍光灯の弱い明かりの下で僅かに発光して見える。入口に立ってオフィスを見渡す顔には鋭いフレームの眼鏡が乗っていて、懐かしさと戸惑いをみせる表情とはミスマッチ。汚れた事の無いかなのような無垢の美しさを湛えて、注目の中、背後で手を組み直しながら、水無川無月は帰還した。

「みなさん...お久しぶりです。そして」

眼が合う。透き通った瞳とはこういうものか。優しい視線を向けられた途端、吉岡は例えようの無い甘い衝撃に硬直した。鈴のような声で吉岡さん、と名を呼ばれる。

「初めましてですね。水無川、無月です」

ふわりと歩み寄る足並みは軽い。揺れる胸元に何かが光る。金属製のカプセルを首にかけている。本能が危険を告げている。彼を目にした瞬間から頭の中でサイレンが鳴りやまない。今の自分はヤバイ。確実に何かがヒットした。思考は空転し、体は硬直して動かない。指を中途半端に開いたまま棒立ちになっている。何か言おうとも、口はパクパクするばかりだ。いつの間にか水無川無月さんが眼の前、触れあいそうな距離に立っている。甘い香りが鼻をかすめる。くらり、とした。そして澄んだ瞳を弓のように引いて、僅かに小首をかしげるようにしてささやく。

「よろしくね、吉岡君」

吉岡は景色が急速に遠くなるのを感じ、気を失った。

\* \* \*

夢を見ている。ここは日陰の湿地。マングローブの絡み合う足が無限の隙間を作っている。その遠くの方の隙間を、小さな白い何かがさっと通り過ぎた。何だろうと思う間の無く見失った。その何かに興味が湧いた。とても密やかな気配がまだ瞳の中に残っていて、それがとても気になる。追いかけていたいと思い、一步を踏み出すと、ずぼっと音を立てて一気に膝までが泥に沈んだ。身動きが取れなくなった。泥は暖かい。巨大な口に唾えられているように生々しい。どうしようもないので身動きするのを諦める。自然と、さっき見た白いものについて考える。幽霊？いいやもっと硬質でシャープだった。ゆらゆらと浮いているというより、目に留まらない速さで視界から逃れるような。と、突然、背後からモーター音が急接近してきた。ビクっとして上体だけをどうにか振って振り返る。そこに白い、人の形をした、何かが、いた。右手を差し伸べている。そ

してその右手は、いくつものビスと、分割されたフレームと、関節とで出来ていた。手自体が心臓のように、モーター音とその振動で生きているようだ。幽霊でもなく、人間でも無く、夢の中だというのにはっきりと、異常な緻密さで出来た機械の人形がそこにいた。白亜の月が浮かぶ夜の闇を背にして、赤紫に発光するグラスアイが、炎のように揺らめいている。あなたが落としたのはこの銀のナイフではありませんか。右手にシンプルな造形のナイフを掲げて私は人形に問う。答えは無い。もしかしたらこっちの金のナイフではありませんか？私は左手に唐草彫刻の金のナイフを掲げて再び問う。人形は首を振る。振った動きで、赤紫の瞳が闇に残像を描く。人形は両の手に千のナイフを展開させる。腕を構成していたパーツがそれぞれに開き、内部からアームが伸び、無数のナイフを支持している。それらを手品のように、一瞬の動作で仕舞い、再び腕に戻った右手で、私を泥から引き上げる。夜の闇にひやりと冷やされた金属の指が、私の手のひらに吸いつく。そして白い人形は、瞳の残光を引いて森の闇にフェードアウトして消えていった。気が付けば、吉岡は三つの椅子を並べた即席のソファで横になっていた。蛍光灯が眩しい。思わず右手を顔にかざす。現実の風景と肉体感覚が帰っている。ぼんやりとした頭で、ああ、起きたのだな、と思う。ぼやけた視線をぐるりとめぐるすと、少し離れた所に、鍋を囲む一団を発見した。ときおり笑い、食し、そして飲んでいる。輪の中央からは白い湯気が昇っている。そしてその一団の中に、見慣れない白髪が目にとまる。服も白い。ああ、あれは、と記憶を辿る。水無川無月さんだ。そうだ、今日初めて会った先輩、そして、……そして？ああ、そうか、気を失った。気を失ったのは初めてだ。あの人を目にして、何故か自分は気を失った。何故？いや、理由はごまかせない。自分の気持ちはごまかせない。ぼんやりとした頭でもそう判るほどに、それは強烈な感情。どうやら恋に落ちたらしい。ぼんやりとした頭で考える。恋に落ちて、そのショックで、意識まで落ちたらしい。理子さんの冗談は現実になったというわけだ。何たる事、こんなオーバーな話はきっとドラマでも無い。まさか鼻血まででてはいないかと、顔に手をやる。出てない。そこまでの醜態は杞憂だったようだ。こうも簡単に、まさに落とし穴に落ちるがごときあっけなさで、すっと落ちてしまった。次いで、そんなことを考えていると、鍋の一団から、みうが顔を出して、自分が起きた事に気が付いたようだ。よっ、と手を上げる。自分もうろんに手を上げてそれに応える。それを見てみんなも気が付いたようで各々で声をかけてくる。

「ああ、気づいたか」

「良かった、急に倒れてしまってビックリでした」

「ハンペン食うか」

「大丈夫、ですか」

ちなみに順番に、理子さん、水無川さん、閑さん、吉田の麻美さんだ。いつの間にか吉田家の3人も来ている。そして塩崎さんもおり、何も言わずに黙々と食べている。白髪の水無川さんも、心配そうにこっちを見ている。まあ、自己紹介していきなり気絶されれば、気を遣うなど言うほうが無理だ。少し、恥ずかしい。顔も赤くなっているかもしれない、なんてを心配する。手を上げて、心配げにしている水無川先輩に大丈夫のサインを送る。それから、よいしょ、と即席

ソファから体を持ち上げて、鍋を囲む一団に同流する。みうと理子さんが間を作ってくれたので、そこにパイプ椅子を並べて座る。鍋の具はだいたい半分くらいに減っている。練り物は特に少ない。腕時計を確認すると、短針がぴったり9時を指している。正面で向きあう形となった水無川先輩と自然に目が合う。

「びっくりしました」

水無川先輩はそうやってハンペンをすくう。

「自分もです。初めて気を失いました」

そう言って自分も鍋に箸を伸ばす。ちくわは何処だ。

「明日は休んで病院へ行くといい」

冷酒を飲みながら理子さんが言う。 なにはともあれ、お腹が空いては脳も空転するばかりなので早く食べよう。ちくわは残っていないようだ。慈悲も容赦もありやしない。大根とハンペンとニンジンを食べる。だしが旨い。3度鍋に手を伸ばしたあたりで、ようやく人心地がついた。体が内側からほかほかしてくる。みうが注いでくれるジンジャーエールをすする。本格的なジンジャーエールなので辛くて苦味がある。けれども自然ともう一口、もう一口と口が求めてしまうから不思議だ。鍋に具はもうほとんど残っていない。閑さんが静かに立ち上がり、タッパーに入った冷や飯を持って戻ってくる。おじやだ。米にだしが染み込んで柔らかくなる間に、水無川先輩に尋ねてみる。アルコールを飲んでないのに、場の空気に酔わされたのか、初対面なのにすこし大胆になっている。

「先輩の分野は何ですか」

ここで分野といえば、芸術のどの分野が得意か、という意味である。ちなみに社長の藤沢理子さんはトータルコーディネイト、山根長閑さんは作詩、塩崎豊さんはデザインと連携したエンジニアリング。みうはグラフィックデザインとイラストレーション、吉田サブロウ氏はプログラマ、その妻、麻美さんは雑貨、そして自分、吉岡拓也がモニュメント造形である。各自が、社長たる理子さんの眼で引き抜かれてきた各分野のエキスパートだが、実体は一つの依頼に対し、適任の一人がリーダーとなり、全員が分野を超えて連携し制作にあたるという仕事のスタイルだ。例えば、ある中年女性が新しくセレクトショップを開きたいと、依頼を持ちかけて来たとする。するとこのジャンルに最も専門の深い吉田麻美さんがプロジェクトリーダーとなり、理子さんがその監督となる。店に置くものの選定を麻美さん、また新ブランドの開発を麻美さんと塩崎さん。広告のデザインをみう、そしてそこに入るキャッチコピーやロゴのデザインを閑さん。店頭のコニュメントや立体看板の制作を自分が引き受け、技術面では塩崎さんがサポートする。そしてプロジェクト全体の管理や統一感の整理を理子さんが客観的に判断し、必要な指示を出す。それぞれがサポートしあいながら、プロジェクトを進めてゆく。そのためにメンバーはお互いの知識や技術を良く理解し合い、共に食べ、共に遊び、時には徹夜の作業の後、オフィスで共に眠る関係となる。だから吉岡は、例外的に仲間の輪に加わっていないのにも関わらず、最重要人物と呼ばれる水無川先輩の事をよく知っておきたいと思って尋ねたのだ。水無川先輩は、慎重に言葉を選ぶ間を持って答える。

「私は主にプロジェクトコンセプトをクライアントに示すキーオブジェクトの立体造形、つまり初期のプレゼンテーション用の立体模型の製作をしています。つまり、クライアントにインパクトを与え、技術力を示して心を掴む。信頼関係を築く仕事です。創るオブジェはコンセプトをDOLL.....つまり人形の形で表現します。だからジャンルのには一番吉岡さんと近いと思います。判りにくかったらそう、例えば東京という街を作る時に、最初に東京タワーを作るような仕事ですね」

東京タワーは今も無い、親達の代にあった首都のシンボルだ。その後にスカイツリーというタワーも出来たが、これも今は教科書の中のものだ。私たちの住む東京はずっと、ずっと、工事中の街だ。新しい建物は、古い建物を覆うように増築され、新しく出来た建物の奥には、隠れるように半ば遺跡と化した昔の施設がそのまま取り残されている。地下鉄のトンネルは無数に交差するように、どんどん深くに掘り進められ、地下にアリの巣のような大空洞と無数の廃駅を生み出した。都市の中央部は、世界最高峰を競い合う各国の大企業によって、いつまでも、いつまでも完成しない超高層タワーの建設が続いている。もう誰もこの街の全貌を把握できなくなった。地図には、ここ数年に出来た街並みだけが、氷山の一角を撫でるように描かれているだけだ。世界最先端の都市は、同時に現代に残された未知の大遺跡でもあるのだ。真夜中の東京を、懐中電灯を持って歩くのは好きだ。気が付けば見た事の無い路地に迷い込んでいて、時間に放置された古都の中には、はっとするような奇妙で美しい道具が転がっていたりする。何に使うのか、どういう仕組みなのか、そんな事を想像しながら、部屋に持って帰ってじっくり分解する時間は楽しい。そんなことを水無川先輩に話したら、

「僕も子供のころはよく迷子になって、忘れられていた昔の機械を見つけては部屋で分解していました。動きそうで動かない部品が、全く別の所をいじっている時に偶然開いたりして、そしてその奥に、また見た事の無い機械の集合があったりして、そんな不思議な機械の面白さ、そして機能を失ってもなお、こんなにも人を魅了する謎めいた機械に、かなり影響を受けました。僕の創る人形が、複雑さを特徴としているのもその影響が強いからでしょう」

同じ体験を共有して話が弾んだ事で、自分と先輩との距離が一足飛びに縮まったようだ。いつのまにか会話に無駄な遠慮が消え、先輩も「ワタシ」から「ボク」に変わって、地が出たようだった。それがうれしい。

「もふ、ふおれふあもふ、ふごいんだふあらふああ」

理子さんが口をリスのようにもごもごさせながら言う。箸でこっちをびしっと指して、

「んぐ。クライアントが来る、そして一週間後に水無川がオブジェを作ってきてソレをクライアントが見る。確実に驚嘆して契約成立。信頼を驚掴みにするというわけだ」

つまり、

「クライアントの持っているイメージから外れること無く、しかもイメージしていた以上の物をはっきりとした形にして魅せる。言うのは楽だけれども、これを出来る人材なんてもう絶滅的に貴重だ。しかも仕事が早い。少なくとも私は彼に追随出来る才能なんて見たことがない。たまたま何処かのギャラリーに埋もれていた彼の人形を見たときのショックは忘れられない。幸運な出

会いだっ」

そんな大げさな、という風に水無川先輩は手を振って小さくなる。照れをごまかすように、取り皿の冷めたハンペンを刺し、小さな口ではむ。

「立体造形ということはやっぱり自分と分野は近いんですね、今度作品とか、作っているところとか見学したいなあ」すると、だん、と閑さんが缶ビールを音を立ててデスクに叩きつけて言う。

「新人、分野は近くとも水無川大先輩に比べるとお前の工作なんざ泥人形のようなものだ。レベルの違いじゃなくて、クラスの違いだ。見たいのなら言うておく。決して自分と比べるな。自信なんてぼこぼこのズタズタになって軽く一カ月は仕事に手がつかなくなる」

そう言って酔いの回った怖い目で睨んでくる。

「それ山根の実体談だから。自信が無くなった、旅に出ると言うて実際は半年もアパートに引きこもっていたような気がするが」

理子さんがしれっと残酷に言い放って、閑さんは、ぐう、と言ったきり動かなくなった。と、急にチャイムが鳴った。来客を告げる電子音のチャイムに一同が沈黙する。時刻は夜の11時を回っている。その上、このオフィスへの来客は月に数度有るか無いかぐらいだ。和んでいた空気が消える。それは明らかに不審だった。唯一、残りわずかとなった鍋だけが空気を読めずにことごとと陽気な音を立てている。すくっと理子さんが立ち上がる。一同が注目する中、部屋のドアを開けて、階段を下りてゆく。ヒールが金属の階段を鳴らす音がはっきりと聞こえる。まだ誰も口を開かない。一分ぐらいして再び階段を上る音が聞こえてくる。しかし足音は一人分だ。閑さんと顔を見合わせる。一体なんだか、という表情。やがて理子さんが現れる。一人だ。いや、良く見ると右手に白い紙切れ、ちょうど名刺ぐらいの紙片を持っている。それともう一つ、手の内に小さく光るもの。真鍮製と見られるあれは、いや、しかし、どう見たって、.....薬莖を一つ持っている。表情は見た事の無いシリアスさで、怖いぐらいに無表情だ。しん、としている。やがてみうが理子さん、と声をかけて、理子さんは、ああ、とだけ返事して自分のパイプ椅子に座った。数分前までのくつろいだ雰囲気は、夢だったかのように跡形もない。理子さんは黙ったままで、眼が左上を泳いでいる。何かを高速で考えている。閑さんが残った大根を一つ取る。その他の皆はどうしたらいいか判らず、ただ理子さんの説明を待って黙っている。5分が経過しただろう頃、理子さんが口を開いた。水無川、と。背筋を冷やすようなぞっとする声色でそれだけを告げた。眼はこれ以上ない真剣さで水無川先輩を見ている。先輩も、沈黙と頷きを持ってそれに応える。二人の間に理解が生まれたようだ。自分はというと全く何も判らないので、ただ理子さんの方を向いて、ただ待っている。理子さんも、皆が事態の説明を待っている事を判って、少し躊躇した後、ゆっくりと手に持った紙片を、表に向けてみんなに見えるように差し出す。ちょうど円陣の中央、鍋の上に。それを一同が覗きこむ。その紙片にはたった一行、黒字で「WEAPONS」と印刷されていた。それだけだった。だがその場の全員がそれを見て何を思い浮かべたかは明確だった。Weaponsという単語、兵器の複数形。しかしそれはもう一つ、もっと強烈な意味を持っている。現代を生きる誰もが一度は耳にする固有名詞としてのweaponsという言葉。それは本来の

兵器という意味を遥かに超えた巨大な死のイメージと共にある。それは、ほんの数年前、恐怖と共に世界史の教科書に書き加えられた有名なテロとイメージを共にする。ウェポンズというのはそのテロを行ったテロリストのグループ名だとされる。それは、事態の不可解な部分の多さでは過去最大のテロと言われ、今でも謎に包まれている。判っているのは、恐らくわずか数名のグループであること、そして短時間でアメリカ軍をおよそ千二百人殺戮したということだ。事件当時メディアが伝えたのは、混乱した現地からの伝聞の情報と死者の数、それだけだ。戦場の通信機器はテロリストによって掌握され、すべてが終わった後の結果だけがメディアで報じられた。その半日の間に具体的に何が起きたのかは、誰にもわからない。だから余計にショッキングな想像が膨張して、世界中の人々の心に強烈なイメージを刻み込んだのだろう。その名を聞くだけでイメージしてしまう程に。ゴミのように重なり合った死体の野原。血によって何処までも遠く赤く染まった大地、巨大な墓標のように大地に突き立った、ひしゃげた戦闘機の残骸、いつまでも晴れない爆煙の曇り空。アメリカとサウジアラビアが緊張状態にあった頃、そしてついに、ニュースがアメリカ軍の進軍を告げ、最悪の事態を誰もが予感した直後に、それは起こった。世界中が注目する中、現地から報道の一切が突然何らかのトラブルで途絶えた。そしてまた突然に、報道は復活した。その空白は約半日、回復した報道が最初に告げたのは進軍したアメリカ軍の全滅、詳細は不明。戦争はたった半日をもってして終わりを迎えた。同時にある根拠の無い噂がどこからか流れ出した。ウェポンズと言う名のテロリストの介入。その噂は電撃的に世界中に広まった。わずか数名から成るテロリストが、サウジアラビア国境上にて、アメリカ軍の初戦力、歩兵、戦車、戦闘機、軍艦それらのおおよそ全てを半日で殲滅した。その事件はウイルスの様に世界中に噂の種をまき、今では新しい史実となって多くの物語を生み、そして今に至っている。無反省な想像の尾ひれが付いて、半ば事実から派生した物語として独り歩きを始めた豊富な推測のバリエーションの中で、自分が聞いたものによると、それは3人組だという。一人は白服の青年で黒い箱を背負っている。一人は白い機械人形で、背中に黒い箱が付いている。一人は黒服の女性で、白い箱を背負って、口には煙草、片手に大きめの端末を持っている。アメリカが開戦を宣言してすぐに、全てのレーダー、カメラ、レコーダーに強烈なノイズが走り、何も機能しなくなった。これは確かに残っている事実である。混乱のままにそれでも進軍しようとした戦場のアメリカ軍兵士と戦車の前に、ひょっこりと3人が現れたという。白の二人が一気に間を詰めてきた。敵兵とみなされた二人に数百の弾丸が集中したが、先行した白の機械人形が機体の各所から展開させたパネルによって、それらすべては防がれた。瞬く間にアメリカ軍歩兵の最前線に到達した二人はそこで左右に分かれた。白の青年は前線を真横に走り抜ける。そして走り抜けながら接する全員の首を切っていった。そのままの勢いで歩兵の中をジグザグに走り抜けながら手当たり次第に首を切る。全ての流れ弾と噴き上がる血しぶきを回避し、真っ白な服を血で汚すことなく舞うような軽やかさで走り続けた。一方、白い機械人形は、全身から現れる数十もの砲身を空に向けて不動、頭上を通過する戦闘機を撃ち落とし、戦車を爆破し、遥か遠く、護衛艦から放たれたミサイルを一つずつ狙撃し爆破し、逃げ惑う歩兵を弾幕でなぎ倒す様に飛散する血飛沫に変えていった。一歩も動かず、全てを殺し、破壊した。三人の中で一番多くの人を殺した。黒服の

女性はその後方、背負っていた白い装置を脇に置き、前線で展開される殺戮に目を向けることもなく、片手で端末を高速で操作していた。彼女は護衛艦のシステムをジャックし、その場の全ての情報機器にダミーのデータを滑り込ませた。戦闘機は制御を失って墜落し、報道をジャミングした。彼女によって、半日の記録はひとつとして残っていない。全てが終わった午後4時半ごろ、回復したアメリカ軍のカメラが本国に伝えたのは、完全に終わった光景だった。それと同時に一通の謎のメールがペンタゴンに届いていた。そこにはほんの一行、「weapons.」とあった。これも残っている記録であり、これによってウェポンズという名称が犯行者名だと推測された。吉岡の黙想は小さな音で破られた。想像に浸っていた意識は一瞬で小さなオフィスに戻っていた。理子さんが立ち上がっている。椅子の音が皆を現実の世界に引き戻したのだった。誰もがたつた今空想から帰ってきたという顔をしている。理子さんは小さく顔を動かして、水無川先輩の方を向く。先輩は首を振って応える。分からないのサイン。事態についていけないのは、自分一人ではないらしい。みうや閑さんも怪訝な顔をしている。理子さんと水無川先輩も分からないという顔をしているが、この二人だけは、分からないの質が違うように見えた。それからはほとんど誰も、鍋に手を付けなかった。各々がちびり、ちびりとコップを傾け、気が付けばカセットコンロの火も消えている。ガスが無くなったのだ。土鍋の中に、冷たくなった大根やニンジンが残っている。おじやはふやけて溶けかかっている。そうして10分は過ぎただろうか、突然、理子さんが大声で笑い出した。「あああ、もう。なんでそう白けた顔をする、大の大人が。ばかばかしいね。何の根拠もない、意味も分からない。何も気にする事は無い、一笑に伏すだけで十分だ。それとも、いいだろう、例えばだ。居たとしよう、ここで鍋をしている中にウェポンズに関係する者が居ると仮定しようか。だからどうしたと言いたいね。私たちは最強のチームだ。たとえ話をよう。かつて戦国時代、名刀を鍛える刀鍛冶がいたとする。そして時代が変わり、刀が不要な時代が訪れた。かつて名刀を打っていた技術を生かして、刀鍛冶は工芸家になり変った。すると今度は天下一の刀鍛冶は天下一の工芸家として生まれ変わった。何が変わろうと、過去がどうであろうと、身に染みついた技だけは不動だと証明された。何をするかは変わっても、魂のポテンシャルは変わらない、決してだ。そしてそれがすべてだ。この場で改めて問うが、私たちは最高の作り手か」

全員がためらいなく頷いた。その表情に、さっきまでの委縮した気まずさは無い。

「だろう。それが今の全てだ。ウェポンズがなんだ。1000人殺すのと、たった一人を心から感動させるのでは、どちらが難しいか、みんな分かっているはずだろう？なら、ウェポンズがなんだ、私たちはそれを超える最強のチームだ。今回の件が、誰の、何のつもりかは分からないが、そんなことは関係ない。今の私たちは、今の私たち以外の何でもない。」

そこまで一気に喋って、立山をグイッと煽った。例え話はよく分からなかったけれども、理子さんの演説の効果はてきめんだった。気まずい空気は泡を食って逃げていった。皆の表情に既に不審と不安は無く、元どりの自信と活気が戻っている。閑さんが予備のガスボンベを出してきて、冷えた鍋を温め直し始めた。場の活気活気が再び盛り上がってきた。再び狭いオフィスのそこここで小さな談笑が咲いた。吉田家の受験とか、塩崎さんとサブロウさんのトラス構造とラー

メン構造についての議論とか。各々が普段抱えている想いを酒の勢いで語り、日々の鬱憤をみんなで笑い飛ばして、いつしか鍋も空になる。

「今日はこれでお終いだ。片付けは明日。各人夜道に気を付けて帰る様に。解散」

理子さんが号令をかけ、皆が荷物をまとめて帰りだす。おつかれさまでした～と言って、吉田家の親子がドアの向こうに消える。じゃあまた、と言って塩崎さんが手を挙げる。閑さんと理子さんがそれに手を挙げて応え、塩崎さんも居なくなる。自分もデスクの椅子の背にかけてあったウインドブレイカーをしっかりと着込み、リュックサックを背負って帰り支度を終える。ケータイで時刻を確認すると日付が変わっていた。残っているみう、閑さん、理子さん、水無川先輩にあいさつをして部屋を出た。通りに出ると冷えた空気がほてった頬をなでてゆき、シャワーのように心地よい。そして思い出して思う。理子さんはやっぱり凄い。一度壊れた場の空気を完全に作り直し、勇気を駆り立てる。さすがはリーダーだ。ただ今日の事で気になった事もある。謎の訪問者と手紙、それに、理子さんの本当に自分たちの中にテロリストがいるかのような話しぶり。まさか、とは思う。しかし、とも思う。だけれども、どちらにしろ、どちらであっても、やっぱり理子さんの言う通り、過去の事実がどうあれ、自分たちは最高のチームだ。それを大事にする事が全てではないか。いくつもの街灯がこっちにおいでと、点々と夜道を照らしている。闇に塗りこめられるように吉岡は帰ってゆき、やがて今日が終わる。

\* \* \*

すごいと言われる事をしたい。それが最初の純粋な動機だった。図工の教室でクラスメイトがざわざわと集まってきた、なにこれすごい、とか言われて特別な眼で見られるのが好きだった。きっとその感じがずっと続いていて、日々を生きる動機になっていたのだと思う。ひたすら技術を求める日々だった。モデルグラフィック紙や模型のコミュニティサイトは毎日のようにチェックして、“スゴイ”と思えるモノや者を見つけてしまうと、自分もそのレベルに達しなければと焦った。もっとすごいやつもある、ということが苦しくて納得出来なかった。大学卒業、そして社会人となり、気になる人の眼は日本中、世界中、そして史上中になった。時々、自分が自分を見る視線こそが大事なのだ自分に言い聞かせ、騒ぎ出すジェラシイを鎮めようとした。でも新たに、もっとすごいものを見ると、すぐにジェラシイに飲み込まれ、焦った。そんな日々は、追いかける程に巨大になってゆく理想と、未だ小さく成長の遅い、そして今にも壊れそうな自尊心で武装した自分とを秤にかけて、決して楽しいものではない。しかし、それしか知らない私はひたすらに走り続け、疲れていった。当然、と言える結果として、25の夏、心が折れた。眼の前には昇りきれない壁とその向こうの届かない理想、そして自分の中には死しかなかった。私はアパートに一人きりで、もう“すごい”と言ってくれる人間は、ずっと周りにいなかった。そんな時に会ったのが理子さんだった。彼女は私の作品の前を通り過ぎようとして、はっと硬直し、真剣な顔で、本当に穴が空いてしまいそうな程私の作品を凝視して、そして、周囲の人が驚くほどの大声で、

「スゲエよこれ！」

と叫んだのだ。それが彼女との出会い。本当に涙が出そうになった。だから彼女はたぶ

ん、命の恩人だ。親しくなった彼女は、私に人の手を借りる事の大切さを教えた。それまでは、“人に見せるための自分”を高めるため、自分と言う作品のために、全てを自分でやると決めていた。だが彼女と会って、自分の理想を語ると、それは共感のイメージとなって、共通の目標になった。それから、助けてくれる人の手や、今まで見向きもしなかった情報を取り入れる事で、もうだめだ行き詰っていた製作が、堰をしていた杭が抜けたような勢いで、一気に動きだした。もはや自分一人の作品ではなく、それは共同幻想としてチームのライフワークになった。そこでの自分が幻想したイメージの強さは、仲間に、そこに加わる事での自信と誇りをも与えるものとなり、その事が自分にとっても自信となった。一人で作るのではない、人の手も借りる。でもその元のイメージは自分の心に浮かんだ史上唯一のオリジナルだ。その事が分かると、一人で作る事に拘っていた時の壁が、濡れた紙のようにたやすく破られたのだった。かくして私は、理子さんの会社の一人目の社員となった。入社試験は面接で、自分の心の中にある本当に形にしたい物について、いくらでも語るという内容だった。人と話す機会が極端に少なく会話が苦手だったのにも関わらず、半日も話し込んだ。そして、私の作りたい物が、決して趣味的な物ではなく、また仕事として作る物でもないということ、初めて他人に理解してもらえたのがこの時だった。山根閑さんとの出会いは、この面接での会話を理子さんがICレコーダーで密かに録音していて、それを聞かせた事だった。興味を持ってくれた山根さんはこのすぐ後、会社の2番目の社員になった。詩人を自称する山根さんが私に教えてくれたのは、記述設計という手法だった。

「詩でもそうだ。一番最初に心にあるのは形のイメージさ。しかし、それをすぐに絵に描ける人はほとんどいない。そういう時は、まずそれをなるべく細かく、説明書のように言葉にしてみる。それが記述設計だ。言葉はとてつアジイさ。だからなんとなくのイメージであってもそれを描きだす事が出来る。そして言葉にしたものを今度は読み返してイメージする。そして、それがイメージをよりくっきりした形にしてくれる。そして見えてきたディテールを再び文章に書き加えたり、書き直したりする。そうしたものが最初のスケッチの素になり、また、そうして記述された文章それ自体がまた、作品としての価値をもつ。有名な記述設計の例は、マルセル・デュシャンのグリーンボックスだな。これは“彼女の独身者によって裸にされた花嫁、さえも”、通称“大ガラス”という作品についてのメモを一まとめにしたもので、作品本体と同様の価値が認められている、記述設計の有名な例さ。興味があれば参考にしたらいいよ」

三人目の社員となった吉田サブロー氏は、腕利きのプログラマーで、アップグレードという概念を私たち3人に説いてくれた。

「コンピュータのソフトは、ほとんどの場合、最初から完成形で世に出る事は無いんだ。まずはプロトタイプ、つまりだいたいの機能を一応使えるお試し版のようなものを世に出す。そこで一息がつける。最初から完成形を作ろうとしてもしんどい。少しずつ目に見える成果を積み上げてモチベーションを保つのがコツ。プログラマーはその後、一度完成させたプログラムを冷静に見直し、自分で使ってみたり、ユーザーの反応を見たりしながら、もっと便利にするために改良したり、新要素を追加したりする。あと、後からひらめいたアイデアを取り込むことも多いね。そういった後から変えた部分は、最初のプロトタイプを買った人にもちゃんと使えるようにしてあつ

て、インターネットを通じて、追加要素をダウンロードして、ソフトを最新の状態にできるようになっているんだ。これをアップグレードというんだけど、こうやって機能を向上させてはそれを公表し、バージョンアップを通じて進化させてゆく。そうしてようやく、最初の理想にだいたい近いくらいにする。そしてここからが大事なんだけど、そこから先、もっと使いやすく、美しく、機能的なものをプログラマは追及し、最初の発想を超えてゆく。そうやって一つのソフトはver2.0、ver.3.0というふうにレベルを高めてゆく。ユーザーは、持っているものに、新しくなった部分だけを手に入れて使えばいい。新しいものをまるまる買わなくてもいいということだね。そして、この方法だと、ソフトを作る側も作る側も気楽だ。無駄も無い。大切なのは、誰も最初からver3.0の機能を持ったモノを作れないということだね。人は生きている限り日々何か進化している。その時間の蓄積があつて初めて、ものは理想に近づける。悔いの無い場所に立ってられる。僕のこのMP3プレイヤーだって、その前にMDプレイヤーがあつたからこそ出来た進化であつて、その前にはCDプレイヤーがあつたし、その前にはカセットテープ、そのさらに前にはレコード盤が最新の技術だった。ほら、意味の無いものなんてなにもないよね、そしてちゃんと“音楽を自由に聞く”という理想に少しずつ近づいてきている。何事も時間と言うプロセスがあつてはじめて成り立っているね。だから最初は、本当に手の届く所から作り始めるということだね」

4人目の仲間になった希代のメカニック、工房の奥底に隠れ住む職人、塩崎豊さんとの出会いからは、自信の持ち方について大切な事を教わった。ものをつくりだす為に必要なものは、技術よりも、自信なのだとは思っている。不安を抱えて前へ進めるほど私は強くない。それはきっと塩崎さんも同じ。

「モノを作るには、必ず図面がいるな。そして図面を描くには、また必ず落書きや空想がいるな。その落書きや空想をするには、遊び心と、なんでもちよつとやってみる好奇心がいる。そして、なんでもちよつとやってみるのには意外と勇気があるもんだ。なんでそのちよつとが出来ないかという、失敗した時のプライドが邪魔をしてるんだな。だから、高いプライドや、一気に高い所を目指す下心を、意識して捨てなきゃならん。俺の場合は、そうしたら自然と手が動くようになるわな。本当の職人てのものは手に脳がある。頭がいろいろ考えるよりもずっと利口に手が考えてくれる。頭はそれをちよいと整理するのに使うぐらいでええ」

このようにして、私は理子さんと出会う事で、山根さんやサプロウさん、塩崎さんと出会った。この出会いが無ければ、きっといつまでもひとり、机に向かって白紙を前に動けずにいただろう。有難い出会いだった。そしてまた、新しく入ってきた三浦さんと吉岡君。彼らは他のメンバに比べると突出した技術を持っていない。しかしだからこそ、自分の作る物に対して、素直にすごいと言ってくれる。これは一人で黙々とやってきた頃には全くなかった事で、実は一番励みになる事だ。自信の源。これが製作のどんなノウハウよりも実利のある事だと最近になって気付いた。そもそも私がモノづくりに根を下ろしたきっかけは、自分の作品を、誰かが褒めてくれる、喜んでくれる事が嬉しかったことではなかったか。新人の2人と一緒にいることで、忘れかけていた自分のモノづくりの動機、創作の本質をいつでも思い出す事が出来る。それがこの場所での何よりの財産となった。かく様にして私は、仲間達の助力によって、これまでにさんざん苦

しんでも完成に至らなかった、本当に作りたかった傑作を仕上げることに成功した。私の存在意味を全て注ぎ込んだ渾身の一体。史上最高の人形、といっても過言ではない。それだけのディテールとギミックが結晶していた。一生鑑賞されても飽きさせないだけのポテンシャルを持たせられたと思う。小さなギャラリを貸し切って、その一体の為だけの個展を行った。当然の流れとして噂は広がり、東京の有名な美術館から展示会の依頼が来た。ミュージアムショップには、展示品からパーツを一つ一つ複製した、寸分違わぬプラモデルを置いた。10体だけの限定生産で、一体でポルシェが買えるくらいの値段がする。三日で完売した。このときになって初めて、作品がメディアに取り上げられた。自信に見合うだけの反応が返ってきて嬉しかった。その一連の急激な流れの中で、その人形への幻想はだんだんと理性の範囲外へと広がっていった。そしてその誇大幻想はある臨界を迎え、私を粉々に吹き飛ばした。

\* \* \*

夢を見た。かつての、あるいは空想の夢だ。異国の赤土の平野に、私は煙草を啜って立っていた。遠くには、せわしく駆ける白い人影が二つ。それぞれに黒い箱を背負っている。視界のピントがずれている。知っている光景だ。だから次にどういう動きになるのかも知っている。白色の二人は背中合わせになり、己が黒箱を左右に掲げる。左右には数千の兵士。箱が変形して開く。白青年の箱は12のプレートに分解し、その間にいくつもの砲口を覗かせる。白い人形は、全身のパネルを開き、自身を無数の砲口を掲げる異形の砲台と化す。弾丸数十万発が一瞬で火を噴き、大きな地鳴りとなって乾燥した空気を震わす。立っているのは二人のみ。風が無いために、周囲には消えない硝煙の煙幕が立ち込めている。現代の戦場には欠かせないミサイル兵器は無い。私は二人の大量虐殺から目を逸らすことなく、手に持った携帯端末をブラインドタッチする。これで空母にハッキングし、ミサイル兵器を無効化している。煙草の灰を落とす。大きく紫煙を吸い、長くため息として吐き出す。私は何をやっているのだろうと思う。若かった頃に焦る様にして磨いた技術を、大人になった私は全く別の事に使ってはいまいか。ずっと迷っている。だからこんな場所に来てしまった。これは夢だ。そう、私は夢を見ている。これはかつての私か。あるいは悪夢の中に見た私か。夢だから分からない。口がひどく渴いている。まどろみの中、どこからかニワトリの時告げの声を電子化した目覚まし時計が、朝の始まりを告げている。ノイズが混じったTVのように、夢がちりぢりに散ってゆく。僅かに開いた両目に映るのは見慣れた私の私室で、私は暖かな布団の中だと気付く。夢が終わり、今日が始まる。まだアラームが鳴っている。藤原理子はベットサイドテーブルに手を伸ばし、目覚まし時計を乱暴に止めて、そこにあった眼鏡を取る。冬の布団はなんて居心地がいいのだろう。気持ちいい。ずっとこうしていたい。でも、早く起きればその分、早く彼らに会える。そう思って、のそりと布団から這い出る。朝の部屋は冷たい。さっさとスーツに着替えて、昨日買っておいたコンビニの焼きそばパンを鞆のポケットに差す。家を出て、霜の降りた凍える街、しんとした大気の中を、会社に向かって早足で進む。裏路地につづく建物の隙間を通過して、隠れた会社の入口へ進む。ドアを開け、薄暗い鉄の階段を上る。ドアを開けおはようとあいさつをする。静寂。誰一人としていない。ふと思いついてケータイのスケジュール表を開き、思わず頭を抱えてうずくまる。祝日だっ

った。

\* \* \*

様々な人が行きかう中央緑地公園のベンチには、カジュアルな着こなしの若者たちが並んで座っている。そんな中、スーツをしっかりと着込んだ女性が一人だけいる。当人も場違いを自覚しているのか、すこしばかりそわそわしているようにも見える。漆黒のビジネススーツに糊のぱりっときいた黒のワイシャツ、白のネクタイ。髪は後ろでアップにまとめて軽い化粧が肌の白さを上品に引き立てている。長閑な祝日の公園から3ミリ程浮いているこの女性は理子さんだ。スケジュール管理に自信があるはずの彼女が、祝日を度忘れして無人の職場に出勤したのが約一時間前。不意に転がり込んできた休日の時間を何に使おうかと考えながら、彼女がなんとなく足を運んだのがこの公園だった。伸び放題の松の枝に群がる雀を見ながら思う。今朝、何か重要な夢を見ていたような気がする。もう、夢の後味ぐらいいか記憶には残っていないが、何とか思い出したいと思った。幸い、時間ならたつぷりとある。夢は、小説と同じく、フィクションでありながら現実での出来事との接点を多く持っている。だから思い出したいと思うなら、自分の身の周りにその原作となる出来事があると思う。この場合、辿るべきは、

「昨夜、か」

不意打ちの休日と言うのもなかなか乙な物だと思う。仕事以外に、いや、仕事以外の方が、やりたい事、大切な事は山積みだ。それは宝の山の様でもある。仕事で心は満たせないというのが藤原理子の持論だ。だから仕事から解放される休日には、あらかじめしっかりとスケジュールを決めて、有効にやりたい放題している。事実、スケジュールを管理する彼女の手帖の土日祝日の欄には、一か月先まで、小さな記入マスいっぱいに行きたい事が書き込まれている。まるで少女の日記帳のようだと思うので、誰にも見せた事は無いが。だから今日みたいな予定にない休日というのは、花壇の手入れで庭を掘っていたらうっかり宝石が出てきたというようなものだ。価値があり、しかし持て余す。思考がルールから大きく外れて走っている。線路から外れて自由に走る列車というのも悪くは無い。どこまでもいけると思える。ほら、また思考が脱線している。今朝の夢についてはもうあまり考えていない。こういう時の方が逆に、ふっと忘れていた事を思い出しやすいので放っておいている。どこまでもいこう。どこまでもいけるのだ。指先が感じる公園のベンチは少し湿っている。別にスーツが濡れたって気にする訳でもないが、なんとなく立って歩くことにした。視界が高くなり、公園の印象を少しだけ変える。否、変わったのは自分か。大人になってから訪れた、昔遊んだ公園を思い出す。今日は自由だから、本当にどこまでもゆけるのだ。歩きながら、昨夜の事を思い出す。久しぶりに水無川無月に会った。相変わらず、強すぎて折れそうな感じ、何も変わっていない。彼が入院していた頃は、こちらからぼつぼつと会いに行った。言ってもお互いに殆んど会話がなかったが、居心地は悪くなかった。週に一度は会いに行っていたらどうか。退院してすぐ、彼は自宅に籠る様になる。だからメールでやりとりする以外殆んど顔を合わせる機会が無くなっていた。何を思っているか分からないのは心配だった。ただでさえ、どこか危うい精神の均衡を持っている上に、あの大事件で肉体はめちゃくちゃに破壊されての長期入院だ。心が無事だとは思えなかった。そして、そんな事になった彼を放っ

て置けるほど、私と彼は浅い仲ではないのだ。だから久しぶりに会えた彼が、案外元気そうだったので少しほっとした。勝手な想像だが、もう少し、不健康になっていると思っていたのだ。痩せてもいなかったし。ただ、ほかのみんなは気づいていない様だったが、会話の隙間や、鍋の湯気の向こうで、ふっと遠い目、何かを考えている目になる事があった。それが少し気掛かりだ。大きな喪失の後には、よく魚が腐ったような、と言われる目になったりするものだが、彼の場合はそれとは少し違っていた。どうしても手放せないものを見つめる、射抜くような強い視線を氷にして固めたような。どうしようもない、けれど、どうにかしたいというような、諦観と切望とが交錯して、どうしようもなくなったというような視線。そんな感じだった。考えすぎか。必要以上に水無川の事を心配してはいないか、と自問する。彼は大人だ、私なんかよりずっと。年齢の事ではない。いろんな感情を経験して、それを消化してきたはずだ。けれどどうしてか、彼の人格の危うさを放っておけなくなる。上司としてだけではない。もしかしたら、本当にもしかしたらだけでも、私は彼に恋愛感情のようなものを持っているのかもしれない。考えて、しかしすぐに苦笑と共に否定する。彼は、人間を見ていない。ずっと、自分の頭の中を覗いて、想像の中で生きている。私もそれに近い。同類だからそれが分かる。だからもしお互いが好き合ったにしても、そこから愛には発展しない。それよりももっと大事な事をいつも考えているから。だからそんな想定はありえない。今日の私は少し浮ついてはいないか。恋、だなんて。したこともないくせに。殺風景な桜並木の並ぶ遊歩道をぐるぐる歩きまわる。いろいろな事を想像しながら何周も何周も同じ風景の中を歩く。何処へも辿りつけない閉じた思考のループに似ている。冷やかな風が頬をかすった。急に、強烈な淋しさが襲ってきた。どこまでもいけるはずなのに、今日の私はどこにもいけないらしい。視界が歪んだと思ったら、すこし涙ぐんでいた。慌ててスーツの袖で涙を拭う。そうだ、山根の所へ行ってみよう。休日はいつでも、趣味半分本気半分で喫茶のまねごとをしている山根である。ぬるいコーヒーが飲みたい。お腹も減っている。どこかへはいける、例えば、逃げ込める場所なんかへ。目的地を決めて公園を出る。正午にはまだ30分ある。ケータイを開き、メールで山根に今から行くご連絡を入れた。

\* \* \*

カウベルが鳴って、良く馴染んだ木戸が音を立てて開く。薄暗く、木炭暖炉の灰と樹木の匂いが最初の一瞬だけ鼻をくすぐる。あと、珈琲豆の香りも。それだけで体から緊張が抜ける。店に入ってすぐの所にひっそり置かれた小さな黒板には、「長閑屋。珈琲300円おかわり自由」とある。古い木張りの内装は保温効果を兼ねており、暖炉に火を入れてなくても店内はほんのり暖かい。理子はスーツの上着を脱いで、一番奥の日の当たらない席に行き、木の椅子を引いて座る。スーツは椅子の背もたれへ掛けた。そのときに、以前東京のミュージアムで見た、中国のデットストックチェアに似ていると思った。長年使い込まれて艶が出た手触りとか。カウンターの奥から山根閑がやってきた。

「いらっしやい、と、ああ何だ、理子さんか」

珈琲を入れたマグを持って、のっそりとやってくる。業務中だろうが私服である。客が知人のみと言う事もあるが、曰く、この方が客としても気安くていいというデザインらしい。前にそう

言っていた。山根は理子の対面の席に座り、するりと世間話を始める。

「理子さん最近は何か作ってるんですか」

前置きなく自然に聞きたい事を飾らず言えるのは、さすが詩人である。ちなみに山根が今、塩崎氏の影響でラジコン飛行機に夢中だという事を、理子は知っていた。というより仲間達の動向は常に把握している。曲がりなりにも社長である。例外は水無川だけだ。ラジコン飛行機と言っても、キットを買って飛ばすのではなく、自作である。本物の設計図をどこからか手に入れて、木材から骨格の骨組みを切りだして、本物通りに組み立てる。エンジンも、塩崎さんと一緒に、アルミの塊から削り出している。本物の原理通りに、ガソリンを燃焼させて飛ばす。かなりの手間と時間が掛かるが、もちろん仕事ではない。半年近くをかけて完成したものを何回か飛ばして遊んだら、ネットオークションで売って、次の機体の材料費にする。もったいないとみんなは言うが、ゆっくり作っている時間の方が楽しいので、完成した物はあっても無くても気にしないらしい。理子さんは言う。

「私は何も作って無いよ。欲しいもののレベルが上がっていくと、物を買う機会が殆んどなくなってね。それで自作をするにしても、工作すること自体が楽しい、という意識のレベルを超えてからは、何を作ろうか、何を作ったら満足か、と考えると、結局何も作り始められない。だからこうしてここに来て珈琲でも飲んでというわけ」

山根は同意の笑みを返す。四角い眼鏡が光の加減で白く反射しているので表情は見えない。

「だけれど、何か作りたい気持ちはあって焦ってる、でしょう？」

全くその通りの事を山根は指摘してくる。同じ高みに居る工作人同士の会話だった。

「その通り。だから実は少しイライラしている。会社での仕事も別に退屈という訳ではない。クライアントの要求も高い。工作としてはかなり高いハードルに挑んでいる。けれど」

けれど、の先を山根が次ぐ。

「けれど、自分が創りたい物じゃない。だからレベルの高い工作をしていても、満足感が足りない」

全くその通りだ。二人で頷いて珈琲をすする。あまりおいしくは無いが、理子用にやや温めにしてある。彼女は猫舌だ。黙々と、二人で珈琲をすする時間だけが流れてゆく。時計の針もゆっくりと時間を刻む。珈琲を飲み終わると、山根は奥のキッチンからバニラアイスを出してきて、それを二人で食べた。「昨夜の」切りだしたのは理子からだった。

「アレって結局何だったんだと思う？」

「アレとは」

はぐらかすなよ、という意味で理子が睨むと、山根は両手を挙げギブアップのポーズをとる。

「まあ多分、理子さんが思っている通りの事を、俺も思っていると思う」

思うが多いな、と思う。理子は先を続ける。

「悪戯ではない、というか素人の悪戯で嗅ぎつけられる程、私の情報カモフラージュは甘くはない。まず本気の相手だろうね。少なくとも昔のアメリカ国防総省よりも優秀だ。そして、事態も

相当厄介だと思う。ただ、残る問題は」

「誰が来たのか」

そう、と理子は頷く。ため息と共に椅子に体重を預ける。が、この椅子はオフィスの理子の椅子のようにリクライニングはしない。ただ硬いだけだ。

「まあどうなるにしても、悪いが今回は出来る事は何も無い。もう水無川は昔の様にはならない。私がさせない。それに」

それに、

「Azはもうない。かつてのような無茶は通じない。もう一度彼女を作る事も不可能、水無川の協力が要るし、だいいち彼は決して許さないだろう。致命的な古傷を抉るようなものだ。だから」

だから、

「誰がどう動こうとも、もうウェポンズは二度と現れない」

\* \* \*

「バクテリアヨーグルト～おなかの中身をすっきり分解～科学の力で毎日元気！」

本日特売のコーナーに気味の悪い食品が並んでいる。どれも半額のシールが貼ってあり、ワイヤーワゴンに山積みになっている。売れ残りであることは明白だ。

「これってどう思います？」

三浦は水無川に問いかける。二人がいるのはスーパーマーケットの一角で、夕飯の買い出しに出てきたのである。というのも、名古屋の大型美術館から急を要する突然の依頼が舞い込んできて、オールメンバで会社に缶詰することになったからだ。で、いつものパターンとして夕食をパーティ風に盛り上げるべく、近所のスーパーに食材と保存食、徹夜の栄養ドリンクを買いに出たのだった。三浦は比較的手が空いているという理由で、水無川はそんな新人とのスキンシップ(?)との理由で駆り出されたのだった。「うーん。栄養的な性能よりもまず、食べたくなるような魅力をアピールしなきゃだと思います。僕なら買わない」

そうですねーと、灰色のどろりとした液体を前に三浦は頷く。一緒に買い物に出て、親しみやすく、いい先輩だなーと水無川について思い始めている三浦だった。まじめだけど自然体で親しみやすい所が自分好みだ。

「それが分かっているから誰も買わないんでしょうね、これ。日本の消費者の眼も捨てたものじゃないですね」

そうだね、と水無川も頷く。腕時計で見ると、時刻は6時を回ろうとしている。

「タイムサービスを待ってから買って回ろう。それまでの時間を使ってメニューを考えようか」

水無川先輩の言でそういうことになった。こういうシンプルに整理された思考が、三浦は好きだ。デザイナーの教育を受けた影響かもしれない。スマートに、早く、合理的に。 そういった点で、水無川先輩は自分とものの考え方というか理想というか、生き方のベクトルが似ているな、と思い、親しみが湧いてきている。もうかなり打ち解けているのではないか。だから自然と、仕事以外の話題や質問も出てくる。「先輩って音楽は好きですか？私、クラシックが好きで、毎日一時間は聴いているんですよ」

前を歩く水無川先輩は振り返って言う。とてもうれしそうな声で。

「僕もクラシックは聴くよ。サティの『夢見る魚』とかが好き」

サティなら三浦も知っているの少し嬉しくなる。

「私はドビュッシー派です。蝶が舞うようなひらひらしたリズムを聴いていると、まるで宇宙の真空の中で、銀河と一緒に回っているような気分になるんですよ」

僕らも実際に銀河と一緒に宇宙を回ってるんだけどね、物理的に。なんて先輩は言う。

「でもいい表現だね。サティは、そうだね。音を吸う綿のような音楽だね。サイレントな静けさよりもなお静かな音楽を作ったのは、多分サティだけだと思う。それにサティはオーケストラを使わなかった。サティの友人だったドビュッシーはサティの曲をオーケストラに編曲したけどね。だからサティが創る曲は、全て自分が演奏できる曲ピアノの曲なんだ。つまり、全ての音が、自分から生まれた完全に自分だけの世界観を持っているんだ。全ての曲を集めると、サティの内世界になる」

口数の少ない水無川先輩にしては饒舌だ。マニアックな所で趣味が合って、嬉しかったのかも知れない。どこか神秘的だと思っていた先輩が自分に、そういう人間的な所というか、隙を見せてくれた事が三浦には嬉しかった。また距離が近づいた実感がある。そうだ。ドビュッシーとサティは友人どうしだったのではないか。同じ時代、同じ街に生き、互いの作曲を披露しあい時にけなし合い笑い合ったサティとドビュッシー。それにサティが好きな水無川先輩とドビュッシーが好きな私が重なる。それも、少し嬉しいと思った。買い物から帰ると、オフィスを出たときには無かった大きな垂れ幕が、窓のブラインドの上から掛けられていた。そこには大きく太い黒文字で『動きだしそうな星の夜』と書かれていた。展示会のキャッチコピーが決まったようである。部屋の隅の方を見ると、完全燃焼した山根さんが、4つ並べたパイプ椅子の上に横たわって、ぐったりと動かない。詩人としての仕事をやりきったのだろう。お疲れ様、と心の中だけで声をかけた。理子社長の大きなデスクの上にもいくつものコピー用紙が重ねられている。会場のレイアウト、イメージボード、各種専門機器の貸し出し申請書類などなど、仕事はだいぶ進んでいるようだ。ちなみに夕食はハンペン鍋である。これは水無川先輩の好物ということである。白が好きなのかな、と思う。いつも白服で白髪先輩の事を思う。いつも鍋を仕切る山根さんは熟睡しているので、夕食の準備は三浦が進める。手早く鍋に湯を沸かし、切った白菜とハンペンを入れる。即席のだしで味を調える。そうこうしている内に、何処かに行っていた理子さんも帰ってきた。山根さんも起きてきて、みんなで鍋を囲んでつく。理子さんがハンペンを頬張りながら言う。

「今回の展示会場は完全フラットの巨大な会場をパーティションで区切らずにそのまま使おうと思っている」

ずずず、と湯をすすりながら説明を続ける。

「しかし今回は山根が良いキャッチコピーを作ってくれたので、そのイメージの方に会場の設定を近づける方法を取る。具体的には、巨大な会場全体を宇宙に見立てようと思っている」

急に始まった仕事の会議に、一同の箸が止まる。食べながらでいいよ、と断って理子さんが説

明を再開する。

「展示物はこちらが用意する100点の小物、それを闇に浮かぶ遠い星々のように見立てて、会場全体を自由に歩いてもらう。これにより作品へのランダムアクセスが可能になり、無粋な導線が不要になる」

導線とは、客の歩くコースのことで、通常は入口から出口まで案内板に沿って歩くルートが決められている。もっと高度になると、展示品への視線の誘導を計算する事で、観覧者は無意識のうちに意図された目に見えない順路を辿って会場を歩く事になる。展示台の配置や、力のある作品と比較的そうでない作品の配置、無意識に感じる壁の模様、暗示はいたるところで影響し、主催者の意図する鑑賞体験へと来場者を導いてゆく。

「上面積300×300の黒いフレーム型展示台100個を広い会場に適当にばらけさせて設置し、そうだな、星が集まっている所と孤立している所の様に緩急をつけて配置し、展示物の重要度にランク付けをしてもいいな。そして天上からは会場の暗さを邪魔しないグレアレスの集光型のスポットライトを設置し、300×300の面積だけをピンポイントで照らし出し、作品のみを闇に浮かべようと思う」

機器に詳しい吉岡が説明を聞いて補足する。

「通常のスポットライトでは集光が十分ではないので会場を宇宙の様な暗闇に見せる事が出来ません。それに展示台だけをびったり照らすなら四角に光を集光させないといけません。どちらにしても照明器具は自作の必要があると思います」

となると、

「塩崎の所に外注か。俺が明日にでも行ってきます。今夜中に照明器具の条件だけでもまとめてしましましょう」

山根が話を継ぐ。よろしく、と理子さん。

「でも四角形に照らし出すスポットライトを新たに設計するより、展示台自体の形を円柱形にしてしまう方が簡単だ。塩崎の方には直径300の面積だけをびったり照らしだせるスポットライトという条件で注文しよう。早い方がいい、山根は明日頼む」

「肝心の展示物だが、なんと今回は自由にやってくれと言われている。つまり、特定のテーマがあった上の企画ではなく、とにかく持て余している美術館を活性化させたいから何か自由にやってくれというニュアンスだ。そこでだ」

理子さんは視線を水無川に振る。水無川先輩はそれには気づかずハンペンを食べている。間をおいて、視線に気づいた水無川先輩は顔をあげる。ハンペンを唾えたままだ。一同の無言の視線に、え、あ？、と戸惑っている。とりあえずハンペンを飲み込んで、理子さんに視線をやる。聴いていなかったらしい。理子さんはトーンを落としたシリアスな口調で言う。

「私は、今回の展示は全て水無川の作品でいこうと思っている。例のアレ、今回の様な機会はまたとない、も一度出してみないか？一体の人形を100体複製して、100通りのポージング、100通りの変形で展示し、水無川無月と言う鬼才の内宇宙を世に問うてみたいと思っている。すぎると前々から思っていたところだ。アレの真価である変形の半端ない表現力の大きさを、一

つの作品での100通りの展示という方法でアピールしてみたい。宇宙に浮かぶ100の白色の機体。それぞれが全く同一のオブジェでありながら100の相を持って主張し、まるで一つの星のようにそれぞれが重要な意味と多様性を持って存在する。思い切った展示が出来る今回の機会に、私はぜひ水無川無月を世間に押し出したい。こんな小さなオフィスに籠らせておくのは芸術界の罪だ。モナリザをカビ臭い倉に仕舞いこんでおくのと同じぐらいもったいないと思う」

長く喋り終えて無言、一同は箸を止めて、理子さんと水無川先輩の反応をうかがっている。短くはない間をおいて水無川先輩はゆっくりと語り始めた。

「あれは、私のこれまでの人生の全てです。アレを作り終えた時、生まれた意味を全うしたとさえ思いました。しかしその反面、自分の為に作った作品であって、他人の眼を全く意識せずに作った作品でもあります。本来、社会に向けて発信するような性格の作品ではありません」

しかし、と理子さんが水無川先輩の言葉を取って言う。

「しかし鑑賞物としては間違いなく最高傑作の高みにある。加えて、人の手で自由に動かして楽しむという性格は、そのまま商品としての価値もある。もともと模型のテリトリーに属する作品であるから、べらぼうに高価ではあるが、ミュージアムショップで同一の複製品として販売する事も出来る。水無川はアレが他人に向けた作品ではないから展示に適さないというが、私としては、そういやって出来た作品だからこそ、心惹かれる人は大勢いると思う。お前はこう言っていたな、自分の中で最後までゆるぎない価値を持つ物が創りたいと」

間を置いて、ええ、と返事がある。それを確認して理子さんは続ける。

「しかしね、『ゆるぎない感動』が存在しない事は芸術に個性や多様性の余地がある事で証明されてしまっているんだ。しかし、存在しえない理想に少しでも近いものを模造しようとする精神こそ美しく、多くの共感を得るものだと私は思っている。アレはそういう意味で、多くの人がなんとなく抱いている理想の偶像のようなものなんじゃないかと思う。お前の望んだものは、結果として他人にとっても見たいと望むものになったんじゃないか。だから私はアレをもっと多くの人に見てもらえる場所があったらいいと思うんだ」

返事は無い。先輩は取り皿の中のすっかり冷めたハンペンに視線を落したままじっと考え込んでいる。沈黙は数分続いた。そして、でも、と水無川先輩は躊躇いがちの言葉を発する。

「でも、アレを衆目に晒す事の危険性も、理子さんは分かっているでしょう」

理子さんはじっと水無川先輩を見つめている。危険性？私には分からない。視線を巡らすと吉岡も同じような顔をしている。やがて理子さんが言う。

「もちろん分かっている上だ。しかしな、無月。そろそろお前も彼女のことを振り切ってしまった方がいいと思う。今回のことはそのチャンスだと思って提案しているんだ。消えてしまったオリジナルの彼女の存在は恐らく今も世界のどこかにあって、それが危険な事ももちろん分かっている。お前がそれについてまだ罪悪感を背負っている事も分かっている。でももうそろそろ自分を楽にしてやれよ。今のお前を見ていると本当に辛そうだ、きっと長くは持たない。今度こそお前は本当に壊れてしまう。私はそうなってもらいたくない。大切な仲間だ。今回展示するレプリカントAzは彼女の原型だ。しかし、もうそれ自体一つの作品でもある。少なくとも事情を知らない

他人にとってはオリジナルの模型でしかない。そう考え直して、もう一度今回の展示を考えてはくれないか、きっと何かが変われると思う、頼む」

そう言って理子さんは頭を下げた。何度目かの沈黙が訪れる。いつかのように、鍋だけがコトコトと陽気な音を立てている。やがて溜息をついて、水無川先輩が言う。

「判りました。僕も、いつまでも彼女の事を引きずってられないとは分かってます。ただ、先日の事もあります。彼女の原型を持ちだす事は何者かの動きを刺激するかもしれません。十分の警戒の上、レプリカントAZ100体の出展、およびミュージアムショップ用にもう10体の複製を準備します」

ありがとう、そう言って理子さんは顔を上げると水無川先輩に手を差し伸べる。先輩も少し照れながら手を出し、しっかりと握手する。

「ウェポンズの件は当日までに私が何とかしてみる、と格好良い事を言いたいところだが、また力を借りることになるだろう、その時はよろしく頼む。原型があるとはいえ110体分のキャスティングとアッセンブルは大仕事だからそちらを最優先にしてくれ、こっちはなるべく私が手を打つ。もうそろそろ全てを終わりにしたいな、無月」

二人だけで話が進む。しかし私には何の事だか分からない。先日の事もそうだ。それは吉岡も同じだったらしい。声を上げたのは吉岡の方が先だった。

「ちょっと待ってください、危険性って何の事ですか？レプリカントAzとかウェポンズとかなんだか分かりません。それは何の事です、まさか本当にあのウェポンズに関係してなんていないでしょう？仲間なんですから僕らにも解る様に説明してください」

私と同じで何も知らない吉岡は食い下がる様に問う。仲間だから、知っておきたい。それが先輩のときどき見せるあの遠い眼と関係しているかもしれないならなおさらだ。私のような新米に出来る事がなくとも、せめて知って、一緒に悩むくらいのは出来る。そう思い、乞うように理子さんの眼を見つめる。理子さんは大きなため息と共に肩を落として観念したように言う。

「まあ、そろそろ潮時かな。10時、それから全てを話す。ただし聞くからには一切他言無用だ。もしそれが守れないようなら、私もそれなりの対応をしなければならなくなる。聞くからには、それくらいの覚悟をしてくれ。それに、決して楽しい話でもない」そう言って理子さんは、とりあえずここまでと言うようにハンペン鍋の残りをつつきだす。もうほとんど具は残っていない。時刻はじきに8時。少し仮眠する事にして私は部屋を後にした。

\* \* \*

カーテンを閉め切った夜のオフィスに全員が集まっていた。いつもは2つの島に分かれて置かれている計8台のデスクは、中央で合わせるいわゆるミーティングの形態に直されている。そこに全員が円を囲む様に座っている。誰も何も言わない。10時に合わせて再集合した各人が、理子社長が切り出すのをじっと待っている。他方、理子社長は眼を瞑って胸の前で両腕を組んでいる。それは、何かを考えているか、あるいは待っている様に見える。遠くで犬が吠える声だけがやけに響いている。三浦は腕時計を見る。あと30秒で10時になるところだった。そしてカチリと針が10時を指す。約束の時刻だ。皆の視線に応える様に、理子さんが組んだ腕を解いて眼

を開ける。

「さて、一体どこから話そうか。いや、その前に一つ。今から語る物事はとてもデリケートで、危険なものだ。他言しないと確約できない者は、今すぐに帰ってもらいたい」

そう言って、左右を見回す。誰も動かない。

「そうか。ならば語らなくてはなるまいね。結論から言うと、過去、大量殺戮の罪を犯したテロリスト、その主犯の三人のうち二人がこの中に居る。私と水無川が、ウェポンズだ。」

沈黙の濃度が増し、空気は薄くなる。時計の秒針の響きが遅れて聞こえる。犬は哭声を止めている。

「そしてエンジニアの塩崎と、プログラマの吉田サブロウも共犯だ。勘のいい山根はその事を何となくでも気づいていた。少なくとも水無川が人殺しだとは気が付いていた」

山根は黙って頷く。吉岡と三浦はただただ茫然として聞いているしかない。三浦は口を両手で覆ったまま理子さんの顔を見つめている。二人とも語られた内容に対して実感が伴っていないのは明白だ。

「発端となった出来事まで遡ると、始点は私が水無川の作品に初めて出逢った時、つまりこの会社の誕生の瞬間がそれだ。水無川は、全てが揃っている理想の原石を人形というメディアの形で提示した。その時点ではまだ完成には至っていなかったが、とてつもなく複雑で、魅惑的な作品だった。値は確か60000000円だったと思う。大手企業を相手に、一人のクリエイターが勝つには、手間を度外視した一品物に魂を賭けるしか方法は無い。それを本当にやってのけた一人の若者に対し、私はその場で6千万円を対価に彼をスカウトした。そして、二人だけで時間をかけて、この一体の人形の持つかもしれない可能性について語り明かした。その人形はあらゆる機能を内蔵し、あらゆる姿に変化する。それは、自分が一人であり一生が一度である事、つまり多くの可能性の選択肢を捨て去りながら一度きりしかない人生を形作るしか方法がない理不尽への抵抗だった。私は彼と語りながら彼の理想論を深く知る内に、当然ある仮説を考えつく。もしも。もしもその理想を具現化した人形が、模型ではなく人間のごとく実在していたらどうなるか。私はどうしてもそれを作り出したいと思ってしまった。見てみてみたかった、どうなるかを。そして、」

「そしてそれは現実可能だった。何故なら、僕はそれを、実機が実現するが如く、サイズアップして作れば機械工学的に再現可能な理論と設計でもって創っていたからです」

水無川無月がそう説明をひき継ぎ、再び理子さんが語り出す。

「そうなんだ。そして、私は人脈を辿り、信頼できるエンジニアとプログラマ、つまり塩崎氏とサブロウ氏に水無川を引き合わせ、私の計画を打ち明けた。長い時間とありったけの資金を投入して、それは完成した。水無川は縮小模型としてのオリジナルの人形を完成させ、最終的には4人でそれを、『実在する存在』として、実際に製造するところまで漕ぎ着けた。それは水無川のデザインが最初から理論的であったからこそ実現が可能な奇跡だった。かくして私たちは理想の偶像の具現化に成功した。私と水無川が話し合っ、その自動人形には“すべて”という意味をアルファベットのAからZまでの一揃いに掛けて『Az』と名付けた。だがその強すぎる幻想を直視

し続けたことで、私たちはある種の感覚麻痺状態に陥っていることに気が付かなかった。現実のリアリティよりも、自分の中に新たに形成された理想に従い行動を取り始めた。そして個人と他人の自由のバランスを取っているモラルの臨界線を踏み越えた。理想しか目に入らない状態だった。それはリアリティを失った理想だった。当時の国際情勢は、アメリカとアフガニスタンがいつ戦争を始めてもおかしくない緊張状態にあった。愚かな事に、私と水無川と自動人形AZはこの理不尽に対して、自分たちが創った物で抵抗を試みた。理想が本当に理不尽を打ち破れるかを証明する為に、例えば戦争を自分たちで止められるかと実際に行動を起こした。私たちはアフガニスタンの国境上にテントを張って、アメリカ側の宣戦布告の瞬間と同時に行動を開始した。あつという間だった。そして、事が終わってようやく、自分たちが一体何人を殺したのか、その取り返しのつかない結果、私たちが引き起こした結果に気が付いた。数か月ぶりに正気に戻ってももう取り返しがつかなくった。死体の中で、血へどが出るまで嘔吐した。事実、戦争は半日で収束した。しかしすでに私たちは何千人もの人生を終わらせた。こんな理不尽ってない。私は間違った。発狂しそうだった。AZはその性能通りに、高射砲で何十もの戦闘機を撃墜した、何百もの兵士をなぎはらい、ロケット砲で戦車を爆破した。止まらなかったんだ。暴走した戦場に退路なんて無い。水無川はいつの間にか血塗れになって倒れていた。私はその後方で震えている事しかできなかつた。淡々と一秒毎に減っていく命を、本物の戦争を目の前にして、この事態を引き起こしたのが自分たちなのだという事に恐怖した。そして卑怯にも、情報を工作し、惨状を隠蔽する事にのみ必死になっていた。この取り返しのつかなくなった事態を誰かに批判されることに恐怖し、必死でハッキングを続けた。半分以上、自我を失っていた。そして全てが終わった後に、罪を誤魔化すようなメッセージを残して私たちは昏睡する水無川を抱えて逃げた。日本に帰国し、水無川は入院しAZは姿を隠し、私はアパートに引きこもって、ニュースで私たちの仕業が報道される度に、あの光景を思い出し、何度も戻した。ろくに眠れず、食べても吐いた。そんな日々が何カ月か続いた。何も忘れられないんだよ。AZは左から奇襲を掛けて来た三人に左手に内蔵した砲口を5つ展開し15発の銃撃で射殺、上空を通りすぎる護衛の戦闘機には、背中に内蔵したガトリング砲が瞬時に組み立がり掃射で撃ち落とす。黒煙を上げて墜落する戦闘機からパラシュートで脱出したパイロットを地上で待ち構えて、両手の内から出すブレードで4つ切りにする。戦車の砲を全身のスラスタを駆使して舞うように回避して接近し、砲口にグレネードをねじ込み、中の人間ごと吹き飛ばし、その反動と気流に乗って翼を広げ、戦場の空をたゆたう。そんな光景を見せつけられても、AZを作った私には、そんなものはAZの性能の氷山の一角にしか過ぎないと知ってしまっている。無限の可能性の器を、私たちはただこれだけの為に使っているんだ。そう思うと、自分が悔しくて、水無川の内のビジョンを穢して、それでまだ私の事ばかり考えている。私のせいだとかそんな事ばかり。その後の一年はひきこもって後悔ばかりぐだぐだと考えて過ごした。それからやっと、放ったらかしになっていた水無川とAZの事に気が付いて、あれから初めて会いに行った。その時には懺悔をするつもりだった。水無川は意識を取り戻していた。すっかり活力というものを失って、一度割れたガラスの様な、歪で弱々しい姿になっていた。それでも、生きていてくれた事に感謝し泣いたよ。だがAZは消えていた。しばらくは水

無川が所持していたらしい。Azは彼の半身そのものだったから。水無川は私よりずっと冷静だった。意識が戻るとすぐに、彼はAzを見つけ出し、内蔵された機能の内、破壊に関する機能の全てにすぐロックをかけ、そのポテンシャルを制限した。己の理想も否定した。自分の半身であるAzを拒絶した。Azはある日目が覚めたら消えていたらしい。未だ行方は知らない。水無川は理想を自ら否定し、さらに半身からも取り残された。その孤独は計り知れない。これが私たちが隠し通していた過去とウェポンズの実体だ」

ずっと語り続けていた理子社長は、グラスに水を注いで少しずつそれを飲んだ。もう今夜は何の音もしない。しかし、聞いている側は、頭の後ろの方からじーんという音が聞こえてくるようだった。そんな静けさがある。

「時は不平等だ。私と水無川には残りの人生がまだ半分以上残っていた。もう一度生きるために、過去を忘れる振りをして二人で仕事を始めた。残酷にも、日常に帰ると自然と笑顔まで戻ってきた。そしていつのまにか一人、もう一人と仲間が増えて、今の状況に落ち着いている。唯一、いつまでも救われないまま駆動し続ける人形の彼女を除いて。彼女に心が無ければ救いもあっただろう。しかし彼女にはサプロウ氏が精緻にプログラムした心が宿っている。殺戮の記録も消えずに持っている。そして、水無川の優しさに触れた記憶さえ持っているんだ。そんな彼女がもし独りでいるとすれば、ハードデスクが焼き切れるまで苦しみ抜くしかないじゃないか。ずっと苦痛を抱え込んだまま機械人形は夢を見る。あの光景、殺した一人一人の顔、叫び、血の温もりを正確に再生して。私と水無川は今の日常を送りながらも、絶えず彼女に繋がる情報が何処かに無いかアンテナを張っていた。そして先日、私達3人を繋ぐ唯一の単語、“ウェポンズ”を知る何者かが今になって接触してきた。そこからは必ず彼女に繋がっている。だから私と水無川は何があらうと動かない訳にはいかない。そうしないと、いつまでも終わらないままなんだ。過去に取り残されたままになっているAzを見つけ出し、そして今度こそ正しく、水無川の理想を直視しなければならない。それが私達の事情だ。今まで黙っていて、皆にはすまないと思っている」

そう理子さんは本当にすまなそうな押し殺した声で言い、額が冷たいデスクに触れるまで深く頭を下げた。そこにいつもの凜々しさは無い。時刻は11時を過ぎていた。

\* \* \*

同時刻、警備の職員が去った港貿易倉庫街のコンテナの影に、動くものがあった。ザッ、と海岸から運ばれてきた砂を磨る足がある。真冬の夜の闇よりもなお暗い人工的な黒を纏った、ロングコートと防寒帽の人影。一人きりで夜の港を眺めながら。その人影は大きな鞆を持っていた。いや、鞆と言うにはもはや大きすぎる。それは小柄な少女が一人収まるほどの重厚な金属ケースだった。太いネジでしっかりと組み立てられ、側面には強度を与える為のリップが肋骨の様に浮き出ている。海を見ていた何者かは、市街地の街灯が夜空をうす赤く照らしている方角へと歩き出す。大きすぎる荷物もキャスターで人影に従って動く。一步ごとにする金属音は、手首と荷物の取っ手とを繋ぐ鎖が一步毎に揺れる為だ。まるで馴染みある故郷の地を歩く様に迷いなく歩を進める。やがてコンクリートで舗装されたT字路に突き当たって、迷うことなく右を選び、そして夜の闇の中に飲み込まれていった。もし知るべき者がいれば怖れるだろう。見るべき者がいれば

逃げ出すだろう。街に災いがやって来たのだと。しかし、今此処には誰も居ない。またもし仮に、知り得る者、見る者がいたとしても、この何者かの行く先を止める事は出来なかったであろうが。底無しの海から吹く潮風の音に紛れて、カチリ、と機械仕掛けの音がした。後に残るのは闇間に溶ける波と風のみ。今夜は星が見えない夜だった。

First half part END.

\* \* \*

藤原理子の朝は遅い。どのくらい遅いか、同僚の水無川無月の朝と比べてみよう。早朝5時、水無川はスクッと何の前触れもなく起床する。この時、理子は当然寝ている。水無川はフード付きの白のウインドブレイカーを着て、短い朝の散歩に出かける。それから帰ってくると、アパートの駐車場で群れている様々な毛色の野良猫達と戯れる。警戒心が強くてなかなか人に懐かないノラでも、水無川に対してだけは自分から体を擦りつけに近寄ってくる。水無川が猫の首筋をぐりぐりと撫でると、猫はにあ、と気持ち良さげに喉を鳴らし仰向けになる。6時、理子の部屋で一度目の目覚まし鳴るが、理子は脊髄反射的な勢いで目覚まし時計の頭をひっぱたく。もちろん起きない。水無川は朝食を摂らない。部屋の、ベットの対角にある作業机に向かって私的な仕事を毎日少しずつ進める。そうして気が付けば、たいてい8時にはなっている。この時までには、理子の部屋では3度の目覚ましのベルが鳴るが、これぐらいの事で起きる理子ではない。目覚ましをセットする気はあっても、起きる気は無いのである。仕事を終えた水無川は、珈琲を淹れる。たつぷりとミルクを注ぎ、角砂糖を2つ入れてそれをすする様に冷ましながら飲む。珈琲を飲みながら今日の製作のシュミレーションをする。8時30分、ようやく理子が眼を覚ます。しかしベットからはまだ出ない。リモコンでパントスターと珈琲メカを動かす。ちなみにこのシステムは、だらしの無い理子の為に塩崎が造って、誕生日プレゼントとして贈ったものだ。これのおかげで理子はもうひと眠り出来るようになった。9時ちょうど、水無川はハンドヘルドPCでメールチェックを終えた後、白い大型の作業机に向かって今日の分の仕事を開始する。同時刻、理子はそのつと未練らしくベットから這い出て、出来あがっているトーストと珈琲にありつく。頭は半分寝ている状態なので胡乱な眼付きをしている。黙々とトーストをかじってゆく。食べ終わると、適当に温くなった珈琲をごくごく飲む。それで少しは眼が覚めた気になる。それからパジャマを脱いで、いつものスーツに着替える。時刻はそろそろ10時になる。オフィスにはもう全員が揃っていて、理子が居なくとも各人の仕事を始めている。洗面台の鏡に向かって大あくび。それから手ぶらで玄関をくぐり、オフィスに向かう。足取りはまだよろよろしていて、表情も覇気がなく、ぬぼーとしている。時刻は10時半、ようやくオフィスに理子が現れる。完全な社長出勤だが、「社長なんだからいいだろう」と、尋ねれば答えるに違いない。ちなみに、こうして理子がだらしのない朝を過ごすその間に、水無川の方は、既に今日の分の製作の半分を終わらせている。そして残りの半分も大抵は、午前中の間に終わって、午後からは再び私的な仕事に向かうのである。この様にして、理子社長の朝はいつもだらしなく始まるのであった。

\* \* \*

立てつけの悪いドアの開く耳障りの悪い音がしたので三浦は手元から視線上げた。ちょうど理

子さんが入社してきたところだった。眼にはうっすら隈が見える。おはようございます、と挨拶すると、短く、ああ、とだけ言葉が返ってくる。朝の社長はいつもこんな感じだ。おぼつかない足取りで社長用のデスクに向かう様子は、ふらふらというよりはだらだらしている。日常。だから私もすぐに自分の仕事を再開する。目の前に広げられているのは、細いゆったりとした曲線で描かれた新しいウェディングケーキのデザイン画で、既に細部まで描きこまれている、いわば完成稿に近いものだ。至る所に、明らかに三浦の線ではない赤鉛筆の殴り書きで修正の指示が書き加えられている。ウェディングケーキを手広く扱う市内の高級洋菓子店からの新メニュー開発の依頼で、今日がその締め切りだった。うねるような、しかし癖の強すぎない曲線が主体の優雅で豊かな造形で、イチゴの赤色を排した、クリームの白とビターチョコレート黒が対比するイノセントなデザインだ。余白に赤の殴り書きで“コンセプトは無粋だ”と書かれているが、意味は図りかねるので無視している。先を尖らせた蒼軸の2Hの鉛筆で、細部の仕上げを書き込んでゆく。もう9割が完成で、あとはクレイモデルを造ってデザイン画と共に納品するだけだ。今日中には終わりそうである。仕上げを描き終えたデザイン画に理子社長のチェックを貰う為に、デスクを立つ。A4のスケッチを受け取った理子社長は1分ほど無言で眼を通し、胸ポケットから3色ボールペンを出すと、青で幾つかの線を修正しながら説明する。

「このラインの流れは綺麗なんだけれど、残念ながら一般のパテシエの使う道具じゃ再現が難しいね、出来ても時間と労力が掛かりすぎる。あと、ここもこんなにいらぬ。工程をシンプルにしてコストを下げる。ここが無くなっても完成形の印象はそんなに変わらない。でも全体的にいいよ。さて」

そう言ってパンと手を打つ。山根さん、吉岡、そして手伝いに来ていた叶ちゃんが顔を上げて注目する。

「これを今日の夕方までにモックアップするので全員手伝う事。クレイはインダストリアルクレイアルテ57で芯にはスタイロフォームを使用、表面にはホワイトパウダーで白く化粧をする。チョコレート部分は質感表現が難しいので本物を使う事。以上だ」てきぱきと指示を出してゆく理子社長は同性の私から見ても格好良い。判断に迷いが無いのは、彼女の知識の深さ、思考の速さ、想像力の豊かさを物語っている。朝はぼけっとしている様でいて、仕事の事に関しては死角が無い。私もああなりたいなあ、なんて事を思いながら修正の色が入ったスケッチを見直す。細かいディテールの凹凸が消され、深い一本のラインに直されている事で、造形の特徴が際立っている。他にも小さな修正が2、3か所ある。山根さんが備品のある廊下のロッカーから造形用のクレイと大小様々な形のスパチュラを取り出し、叶ちゃんが作業机の上を整理してくれる。作業着に着替えた理子さん、吉岡、山根さん、叶ちゃんと私は道具を持ってテーブルを囲む。デザインを担当した私の指示で、大まかに切り出されたスタイロフォームの塊の上に粘土が切り盛りされてゆく。

\* \* \*

夕刻。窓ガラス越しにオレンジセピアの光が射し、何もかもをほんの少し古く見せている。ペン立てに投げ込まれた緑縞のペリカンの万年筆も、活字が物語る書類の山も、テーブルの隅で埃

をかぶった用途の知れない精密機械も。飴色に染まったオフィスの中央、巨大なウエディングケーキが完成しつつあった。山根と三浦が、シュガーパウダーに見せかけた重そうをふるいでふりかけている。洗い場には、粘土で汚れた金属のヘラが累々と山になっている。ケーキ（のモデル）は、高さが大人の背丈程で、中が粘土で出来ている事もあって、かなり重い。しかし見た目はクリームで出来たケーキそのもので、デザインも相まって、優雅で軽やかだ。理子さんはクライアントに電話して、これから完成したモデルを持って何うとアポイントメントを取っている。吉岡は軽トラを用意している。作業は終わりを迎えようとしていた。今夜は例の如く、理子さんの提案で完成パーティが予定され、コンビニのケーキと珈琲で苦勞をねぎらうという。そして午後5時30分、クライアントに完成したケーキのモデルとデザインの詳細が纏められた書類を手渡し、口頭で幾つか説明をして、無事、今回の仕事が終わったのだった。報酬の入った封筒を理子さんが受け取り、全員がその場で、売れ残りのクッキーと珈琲を頂いた。湯気の昇る珈琲を一気に喉に流すと、体の芯がジーンとして暖まった。心地良い。お礼を言って、パーティのケーキはコンビニではなくここで買う事になった。理子さんがチーズケーキ、私は木イチゴのタルト、山根さんは乾燥フルーツのパンケーキ、吉岡はイチゴショートを注文した。理子さんは、水無川にあって、モンブランも注文に付けくわえた。そうか、今夜は水無川先輩も来るのか。そう思うと少しドキドキした。珈琲は山根さんが淹れるというスペシャルブレンドらしい。一同は洋菓子店を後にした。帰り道、私は山根さんに気になっていた事を尋ねてみた。

「山根さん？」

ん、と運転席から返事がある。帰りは私と山根さんで二人きりだった。舗装の古くなった道をガタガタと揺られながら私は尋ねる。

「山根さんは何でウェポンズの事、知ってたんですか？」

バックミラー越しに一瞬眼が合う。沈黙の後、そうだなあ、と間を持って言う。

「ぶっちゃけ、何となく、かなあ。雰囲気？みたいなものってあるだろう？特に水無川には。それで何となく読めた」

それは私にも何となく共感できた。先輩は優しいのに、いつも宇宙に一人で浮かんでいる様な、澄んだ哀しさみたいなものがある。

「しばらく同じオフィスでいて、ほら、俺って詩人だし、なんか感じ取ったらいろいろと尾ひれが付いた想像をするっというか。水無川の横顔を見ながら、こいつ、きっと人を殺した事があるんだなあって。何十何百人も殺したら、こんな風にカラッポになっちゃうんだろうなあ、そんな風に思っ、それでちょっとジョークのつもりで、もしかすると水無川さんって人殺しなんじゃないですかって」

それはジョークとしては笑えない。親しいとはいえ、人にいきなりそんな事を言うなんて少し呆れた。「そしたら、バツと振り返って、眼を真ん丸にして、どうして分かったんですか？何ですかって」

あれにはびびったなあ、と運転したまま山根さんは言う。全く、何て出鱈目な話だろう。

「さすがに俺もそんな時はジョークに付き合っているだけだと思ったんだけど、社長と水無川が

詰め寄ってきて、どこで知った、他に誰が知っている、てマジな顔で来た時には、ああ、これは当てちまったなあ、って焦った」

何で分かったかには、勘です、って答えたら二人ともキョトンとして、それから、すげーって驚いてたなあ、と懐かしそうに山根さんは呟く。それは驚くだろう。

「それから三人、顔をつきあわせて、少しだけウェポンズの事とか、この会社の生い立ちとかを語られて、まあ、気づかれたからにはしょうがないから、くれぐれも他言無用で詮索もしないって約束させられて、辞職権も剥奪されて、それでその時は落ち着いたんだっけか」

おっと、と言って急にハンドルを切る。遠心力で頭がふわっとする。会社のある町のメインストリートまで戻ってきた。山根さんが少し真剣な声色で呟く。

「多分、今夜あたりでその辺の事についても話が出るだろうな。特に今度に関しては、第三者にウェポンズの事を知られているらしいから、身の危険はお前や吉岡に及ばないとも限らないからには、な。かなりハードな話になるだろう。だから先に言っておくと、話の全ての要点は、どこかに消えたAzという名の人形機械に集約する。そこからウェポンズが生まれ、今もそこに残ったしこりから厄介事が降りかかっている。その事を頭に入れて今夜の話聞くといいのかもな」

Az。アズ。AからZ。すべて。万能？だから危険なのか。

「山根さんはそのアズっていうものの事はどれだけ知ってるんですか？」

「殆んど何も。だから今日は緊張してる。それに話す方の理子さんや水無川もきっと、俺と同じくらい緊張していると思う。だから精々、飛びきり旨い珈琲でも淹れるよ。ただそれに関しては、全てを知っているのは恐らくデザインした水無川のみ、後は理子さんも含めてそれが引き起こした事態にどれだけ関わっているかいけないかの違いで、Azとは何なのか、全部は分かっていないんだと思う」

何たって、水無川無月の最高傑作だからな、なんて呟いたところで、車はちょうど会社に到着した。私はケーキの紙箱を持って降りる。辺りはもう真っ暗で、車から降りると空気が寒い。山根さんは軽トラを離れた駐車場まで戻しに行った。私はビルとビルの間隙間を通過して、その奥にある会社の玄関前に立った。ノブを捻ると硬い反応。いつでも空いたままであるのはずのドアには鍵が掛かっていた。

\* \* \*

山根さんが戻ってきた。私が鍵の話をする、ケータイで理子社長にメールした。そういえば私はまだ理子社長のアドレスを知らない。それからしばらく、薄暗い路地裏で二人待った。ドアに鍵というと別に大したことではないというのが普通だが、この建物に関しては不可解なのである。というのは、これまでに一度もこのドアに鍵が掛かった事なんて無いからだ。真夜中だって、誰も居ない休日だってこの路地裏に隠れるようにあるドアは自由に出入りが出来るようになっている。これはいつでも社員が出入りして作業を進められるように、との事らしい。先日からの不審続きの気配があっただけか、だから今回の事もただ事ではないという予感がする。理子さんからのリプライはまだ来ない。これではせっかくのケーキが悪くなってしまう、とそんな事を考え

た。二人して暗がり黙っていると変な空気が流れてくる。同じ事を考えたのだろう。くすんだ色のフェンスにぎしいと背を預けた山根さんがぼつりと語り出した。

「誕生日にさ」

急だったので、え、と問い返す。

「誕生日にさ、水無川の。三浦が入ってくる前の事だけどさ。あいつ、集中するともう一気にのめり込んで少しも休まずに作るから、多分、すげー肩とか凝るだろうなあって。そう言ったら、じゃあマッサージチェアでもプレゼントしたら良いんじゃないかって。そんで塩崎さんとサブロウ氏が水無川には秘密でコツコツ作ったんだ、マッサージチェア」

作ってしまうんだ、マッサージチェア。と、私は少し呆れた。

「そんで、やっぱりあの二人が作ったからには、もうスゲーマシンが出来たワケ。ハイトルクのモーターやヒーターを詰め込めるだけ詰め込んだ一品モノ。光センサーとか、体格や体勢に応じた制御をする電子系にはアドリブの利く簡単なAIとか付けて。俺も試乗したけどホントスゲーの。で、それをこっそりと水無川のアパートに運んで、誕生日に。それで反応とか見たいからって隠しカメラとかも置いて、みんなで水無川が帰ってからオフィスに集まってモニターで見た。ドキドキしてさ」

それはやりすぎじゃないかな、とも思ったが、まあらしいといえらしい。

「ついに水無川が帰ってきて、部屋のど真ん中のマッサージチェアとパスデイクードを見て、驚いてるのを見てこっちは大盛り上がり。で、当然座るよな。スイッチを入れる。メカが動き出すと、もう、すげーゆったりした顔になって、もう幸せーって感じにふにやふにやした顔で、会社では絶対見せないような無防備な顔になって、こっちは大笑い。塩崎さんとサブロウ氏はハイタッチのにやり顔。あの夜はすげー楽しかった」

思い出したようにクックツと笑う山根さん。私は黙って聞き入っている。

「まあ、そんでサプライズは大成功したんだけど、だんだん水無川の気持良さが、エロい感じになってきて、こっちもだんだん気まずい感じになってきて、それなりに盗み見るのも悪いし、でも気になるしで、結局みんな黙ってずっとモニター見てるワケ。体をひねって、ん、とか、うあ、とか、ひゃう、とか声漏らして、息も荒れてきて。だんだん気まずさが漂って来るんだけど、何となく水無川の知られざる一面を見るのが止められなくて、結局マッサージを止めるまで二時間ぐらいみんなでかたずを飲んでモニタリングしてた」

そこで山根さんは黙る。ずっと黙っているの、それで？、と私は問う。すると、

「それだけ。まあ、予想以上にプレゼントも気に入ってもらえたようだから、そのまま解散になった」

そう言って深く息を吐き出す。全く、良い話のようで、悪い話のようでよく分からない事をする人達だ、と思った。それからまた十分、二十分と二人で、開かない扉の前でつつ立っていた。

\* \* \*

赤い夕陽が地平線を跨ぎ、夜空が深海のように深くなった。生臭い潮の香り。海の微生物が干上がって発酵した港の臭いが立ち込める。黒い海と暗い空は境界線を失って溶け合い、その中に



小切れを海へと洗い流してゆく。人間の物とは分からないだろう骨と、散らばった謎の金属片だけを残して何事も無かったかの様に雨が全てを洗い流してゆく。最初の銃声が響いてからほんの5分も経たない決着だった。その夜、雨は降り続けた。

\* \* \*

朝が来た。黒から紺、そして澄んだ黄色へのグラデーションを描いて空色が移り変わっていくのを、藤原理子はぼんやりとオフィスの窓越しに観察していた。朝の5時である。つまり、徹夜仕事の朝という事であった。小さな幸せは、時に大きな幸せより価値がある。ふとそんな事を思った。昨夜、仕上げたプロジェクトは大きな収入をもたらした。恐らく、一年は道楽出来る程。あるいは、夢見ていた高級車やアクセサリ、あるいは家を買えるぐらい。そんな幸せだ。一方、誰も居ない自分のオフィスでぼーっとして朝日を見ているという、一見して些細な幸せだ。どちらかという、後の方が身に沁みている。実感、とでも言おうか。見の程に合った大きさの幸福の方が、雲の様に巨大で掴みどころのないそれよりも体感的には効果を生む。そんな事を考えた。ふと、チェアから立ち上がり朝の静かな街を見下ろす。誰も居らず、たまたま野良猫がゆっくりと道路を横切っていった。再び深く腰掛ける。背筋が凝っている。ぐっとチェアをリクライニングさせ頭を倒す。逆さまの視界の窓越しに流れる雲と佇む電柱が見える。いや、見ようと思って、そこにある空気を視た。透明で、その形は空間全体からそこに存在する個体と液体の形を差し引いた雌型のようなもの。もっと視線を広げれば地球の表面だけに薄く存在するシャボン玉の膜の様なもの。そこまでイメージして、勝てないなあと思った。人間が作れるもののスケールの小ささを思うと少し淋しくなる。もしここに山根がいて、こんな話をしたら

、「自然に勝とうとするのは人間ぐらいですよ」

とでも言うだろう。思わず口元が緩む。突然、電話のベルが高く鳴ったのでびっくりした。こんな時間だ。良くも悪くも例外的な内容だろう。角の丸い、使い込まれて艶の出たプラスチックの受話器を取る。

「はい」

しかし、相手は何も言わない。黙っている、とは思わなかった。その息づかいがひどく苦しいから。だから分かった。前にも一度、同じ事があったから。つまりは最悪の事態。急を要する。だから手早く聞いた。

「どこに居る。待っている、すぐに行くからそこに居ろ」

ごく小さな声が途切れ途切れに返ってくる。断続的に、港、B4、コンテナ、黄…。そして受話器を置くと、コートをひっかけてすぐにオフィスを出る。駐車場の愛車に急いで乗り込み、キイを挿入する。誰も居ない広い朝の街を最初からフルスロットルで走る。点滅する赤信号は全て無視した。何故なら命に関わるからだ。

\* \* \*

朝日に輝く海面が穏やかに波打つ貿易港には鉄の錆の臭いがする。コンテナの山からは、酸化して流れ出た茶色い液体がコンクリートに染みを作っている。クレーンは動いておらず、辺りには誰もいない。まだ朝早いからだ。藤原理子は、靴音高くコンテナ群に向かって速足でゆく。

クリートの地面にはオレンジで大きくB4と書かれている。錆止め用に塗装された赤茶色のコンテナの山の中に、一つだけ黄色のコンテナがあった。その陰に向かう。角を曲がりきった薄暗がりに、水無川無月が倒れていた。動かないし、こちらに気づいた様子もない。気を失っているのか、あるいは死んだか。血塗れで、両手両足が無くなっている。そこからは乾いた血で赤黒く染まった金属が覗いている。彼の四肢が義手義足だという事を知っているのは理子と塩崎だけだ。空は高く澄んでいる。何か大切な物を一つ、取り返しがつかなくなるぐらいにめちゃくちゃに壊してしまいたくなる、そんな気分させる空だ。そうやってから後で一人泣きたくなるような、すがすがしくもセンチメンタルな青空だ。そんな投げやりにうってつけの空だったから言葉もやや乾いたものになった。

「急いで帰るぞ」

そう言って動かない水無川を抱き上げる。いわゆるお姫様だっこというやつだ。手足が無くなっている事を差し引いても軽すぎだ。そこらに散らばっている義手義足の残骸やその他機械の屑、骨などは、あまり深く考えず、つま先でけっ飛ばして海に落とした。ゆらゆらと沈んでゆきすぐに見えなくなった。そうやって手短かに証拠隠滅を図る。海のゆらゆらした感じは逆説的に焔によく似ている。どちらも生っぽくて実体がない。ただ焔は全てを焼却して無かった事にすが、海は全てをその底に溜め込むという違いがある。だから、と港に背を向けて足早に歩きながら理子は呟く。

「だから、海は嫌いだ」

\* \* \*

鍋パーティでの事だった。

「今から大事な事を話す」

全くの唐突に理子さんがそう言って、私、吉岡、山根さんは箸を止めた。水無川先輩は、もう一カ月近くも顔を見ない。

「しばらく前に、オフィスのドアが開かなくなった事があつたらう」

理子さんは鍋から最後のちくわを上げて言葉を続ける。

「誰かがここの地下に入ると、センサーで全ての出入りにロックが掛かる。そして侵入者を閉じ込める。この建物自体にはそういう檻としての機能が備わっている」

「待ってください」

吉岡が割り込む。

「ここに地下なんて見た事ありませんよ」

そう吉岡が言うように、私もこの建物に地下への入口なんて見た事が無い。小さな建物だ。そんなもの見落とす事なんて有り得ない。理子さんは平坦な口調で続ける。

「それがあるんだよ。ちょっとしたカラクリで、普通は絶対に気づかない様になっている。地下は6階まである。このビルの本来的な目的は地下6階部分を守るため、地上の4階部分と会社としての業務はカモフラージュだ。しかしまあ今となっては、こんなに仲間も増えて会社としての機能も私にとっては大事なものになってしまったが、本来の目的はとにかく地下にある」

「地下1階は、まあ今はただの物置きになっている。地下2階には、ちょっと人には言えない物資がストックされている。火事になると危ない類だ。地下3階は開発室兼実験室で今は開かずの間になっている。地下4階と5階は完全に注水されて扉は水圧で絶対に開かない。その下、地下6階には私と水無川の過去がある。一生外に出すわけにはいかず、しかし絶対に守るべき物だ」

今度は山根が言う。

「そしてこの前の鍵の件は、その地下へ何者かが侵入した事で起こった。地下の存在を知る何者かがいて、結果、袋の鼠となった、と」

その通り、と理子さんが頷く。

「哀れな鼠は地下1階に閉じ込められていたよ。タコ殴りにした後で話を聞いたところによると、ただのヤクザの下っ端で、何者かに金を握らされて、事情を知らず小遣い欲しさで侵入を試みたという事らしい。その裏でコソコソしている何者かが、恐らく最近になってウェポンズの過去を掘り起こそうとしている黒幕という事だろう。その何者かは、地下6階にある物が欲しかったのだろう。水無川を滅茶苦茶の半殺しにしてくれたのも多分そいつだ。」

「私と水無川があの人殺しのウェポンズだという事は前に話したと思う。そして三人組の三人目は何処かへ消えてしまった人形機械の彼女だとも。そしてこの建物の地下、私達のいるこの場所の下に埋まっているものというのは」

そう言って理子さんは言葉を切って眼を伏せたが、ここまでの説明を聞けば、その先に言おうとしている事実はもう明らかだった。

「この建物はね、その彼女を作る為の施設だったんだ。地下6階に閉じ込めてあるのは、水無川の手による彼女のオリジナル。実際にAzを作る為の土台となった云わばアーリーモデルとその開発図面だ。水無川無月という天才が幻想した最高の人形。使い方によっては何事をも起こせる可能性を備えた奇跡の創造物の発端となるものだ。それは、厄災の引き金となった作るべきではなかったもの、しかし、作り得た事を一生の誇りに思えるような私達の夢、悪夢、その原型だ」秘めていた事実が、堰を切って溢れだす。「今頃になって、その存在を知り、何かに使おうとする者、あるいはただ手に入れたいだけかもしれない、そんな何者かが現れた。それを知るからには当然、現在のAzの所在とも繋がっている。いや、その何者かがAzを所有しているという可能性の方が十分に考えられる。彼女自身に辿り着き、しかしその機能の全貌を紐解くことが出来なかった何者かが、その解説書としてオリジナルの資料を手に入れようとしていると考えることができる。大ガラスを理解する為にグリーンボックスが必要なようにな。手に渡れば私達の過去の罪の再現が起こる可能性も、決してないとは言いきれない。創った者の責任として、手渡す訳にはいかない理由がある」

「あの地下6階への鍵の保管場所と、封鎖された4、5階を通りぬける為の排水装置の暗証番号は水無川だけが知っている。私も知らない。鍵にスペアは無い。暗証番号は12桁ある。それが無ければ、地下3階以降には到達できない。云わば水無川無月自身が、唯一の生きた鍵と言える。水無川が襲われたのは、そこまでの情報が知られていた、という事になるだろう。相手は強引な手を躊躇わなかった。これまでは何も無かったからそのままにしてきたが事情は変わった。

ここはもう会社の振りをした集まりではない。みんな、こんな事に巻き込んでしまってすまないのにこう言ってはいけないのだけれど、腹を括って欲しい。出来れば力を貸して欲しい」

理子さんはこれまで見てきた中で一番深く頭を下げた。額を強く強く机に押し付けている。それでも足りないという様に強く頭を下げる。私の答えはもう決まっている。けれどその前に三浦には、ひとつだけ問う事があった。その名を記憶から手繰り、言う。

「まだ理解しきれない事が一つだけあるんですが、そのAzっていうのは、本当に何なんですか？」

\* \* \*

理子は言葉を探す。しかし見つからない。時に言語化されていない概念に出会うと、この様にいくら探したところでそれにかちっと嵌まる様な表現が出てこない時がある。ちょうど今の様に。混乱する頭で、何とか稚拙な言葉を紡ぎ出す。

「かつてまだ私が水無川と出会っていなかった頃。水無川は一人で、全身をギミックで固めた自在可動可変する人形のオブジェを作り上げかけていた。その出来が何と言うか」

それを見た時の衝撃を伝えようとするが言葉が見つからない。見つからない。困った理子は、言葉のプロフェッショナルである山根に、助けを求めるように視線を向ける。彼もそのオブジェを見た事があるからだ。山根はすつと理子の言葉を引き継いで言う。

「それは時間的、かつ空間的に見ても過去、そして恐らく未来においても人間が造り得る至高のオブジェだった」

そう形容した。それは事実過剰な表現だったが、理子の印象にかなり近い表現だった。さすが餅は餅屋だ。

「そういうことだ。それで、そのオブジェの虜になった私と仲間は、水無川と共にその人形のオブジェを元にした本物、つまり等身大で自由意思をもって現実存在に存在する人形機械を作った。その製作にあたって、銃火器等の機能を再現する際の違法性から、製作は先に説明した地下の開発室で進められた。原型になる彼のオブジェを手本に、構造面のハードの再設計と製作は塩崎氏が、動作やインテリジェンスといったソフト面のプログラムはサブロウ氏が担当した。私と水無川、塩崎氏、サブロウ氏のチームは、数年を費やして彼女を完成させる事に成功した。世間では、まだホンダのアシモが一人で飛行機に乗れるようになったという頃だった。それはとても誇らしい気持ちだった。クリエイタとして、これ以上の喜びは無いと、出来上がった命ある人形を見て思ったものだった。その思い上がりが、私にテロリストを演じさせた。最高の作品を結果的に汚し、水無川の心の均衡を破壊する結果を招いた。唯一つだけ明らかな事は、Azという存在は、宗教を信じる者における神のように、人の心を酷く危うい力で掴み、そして実際に全能である様に機能するものだという事だ」

理子は言葉を尽くして説明したつもりだったが、見ると三浦の表情は疑問を投げかけた時のままあまり変化していなかった。だから三浦は言う。

「そのAzという人形がどのぐらいすごいかは先程の説明でも良く分かりました。そうではなく、ただ私が気になっているのはそのAzが、今どのような状況にあって、私達はどうか、

、という事です」

三浦は、少しきつい言い方だったかな、と思いつつも素直な疑問を述べた。それは、さっきから聞いていると、そのAzがいかにも凄いかをあらゆる言葉で褒めているだけで、私達の陥っている状況を説明していないと思ったからだった。まだそれを目にした事の無い部外者の三浦にはそう感じられた。だから、部外者で、冷静な判断が出来る者がその先を考えなくてはならない。思い出す、心を何処かに置き忘れていたかの様に、時々優しく儂げな水無川先輩の笑顔。そして、時々遠い目で考え込んでしまう理子社長。こんなにも言葉を尽くして語る過去。過去に後悔を抱えたままの大事な仲間と、今はもうない彼らのかつての誇りだった人形。全てが過去に失ったモノに束縛されている。三浦の眼には、取るべき行動が明らかであるように映った。ほら、もう答えは出ているじゃない。その提案を口に出す為に、三浦は少し多めに息を吸い込んで、口を開く。

「それはきっと大事な、きっと一生近くに置いておくべきモノ、なんですね。それなら」

組み立てられた解答を口にする。

「彼女を、先輩の手元に取り戻しましょう」

三浦ははっきりとそう言い切った。

\* \* \*

市の大学付属病院の一室。入口のプラスチックの白いプレートには、「水無川無月/ー」とある。その相手がいない二人部屋の病室に5人が集まっていた。清潔なベットに背を起こして座る人物を囲む様に座っているのは入院患者の会社の5人の同僚だった。

「――と思います」

三浦が話し終えたのは、昨夜理子さんに提案したAz奪還の計画だった。対して、それを聞いた水無川は考え込んでいる。白衣からは何本ものチューブが伸びて、壁に据え付けられた機械に繋がれている。頭に巻かれた包帯の合間から白い髪の毛が覗いている。手足は無い。両目も巻かれた包帯で塞がっている。首には酸素マスクが下がっているのに、今こうして会話しているが、口や肺も無傷ではないのだろう。正に満身創痕、死に近い、ぎりぎりの体。面会の許可が下りたのも、理子さんが三十分近く担当医に交渉した末の貴重な時間だった。両目を包帯で塞がれた水無川は静かに沈黙を保っている。辛うじて薄い胸が上下しているのを見逃せば、いつの間にか死んでしまったと思うかもしれない。三浦が話し終えてから数分が経っても、誰も口を開かない。みんな水無川の返答を待っていた。そうしてやがてゆっくりと水無川が口を開いた。痛む肺をいたわる様に一言ずつ、発音を丁寧に、ソツと、話しだす。それでも少し痛むのか、時折言葉を切りながらだ。

「それには」

「一反対します」

何故、と問うより早く、次の言葉が来る。「Azについては、一僕もずっと考えていました。というより、考えなかった日なんてない。毎日必ず、頭に過る。一でもそれは、あの凶行の事じゃなくて、よりもよって、新しいデザインの事なんです。あのスペースにはまだ、何かギミック

が追加できそうだと、とか。—こういう機能をさらに追加するには、何処かに無駄な設計が無かったか、とか。そういうことが、今に至ってもまだ頭に過るんです。実際、スケッチも何枚も書きました。つまり、貴方が言う様に、一過去を再び取り戻しても、もう今更その輝きは私の中では失われてしまっているんです。もっと輝いているプランが毎日次々と出てくるのに、それ以下になってしまった作品を今一手に入れたからといって、空虚さが一消える訳ではない。それは物作りに携わる貴方にも、きっと体験した事のある感情ではないのですか」

山根が言う。

「それじゃあ、ナツキ。お前は何を以てその空虚さを埋めるつもりなんだ。見ていて辛いんだよ、苦しいのは一緒にいて分かる。お前のまだ半分以上も残っている人生を、そんな気持ちのまま生きていくのってないんじゃないか。どうにか出来ないのか。出来る事は本当に無いのか」

誰もが考えている。彼は何を以て救われるのか。本当に決定打は無いのかと。吉岡が何か思いついた様に口を開いた。それは誰も言い出さなかった当り前の様なシンプルな提案だった。

「じゃあもう一度、今の全力を尽くしてもう一度作ってみたらいいんじゃないですか？」

一同が彼を見る。しかしそこには問題がある。過去の最高傑作が今は輝きを失った様に、何度その時の全力を尽くしたところで、時がそれを風化させる。それが問題なのだ。だから吉岡はそれを踏まえてこう提案した。

「全力を尽くして同じものを作るんじゃないです。コンセプトを変えるんです。Azが目指したのが到達点としての傑作だとすれば、今度は一生を通して追加加工をし続けられる傑作を目指すのはどうでしょう。旧設計を残しつつも、新しいアイデアを後から追加していける様に、ベースとなる設計理念を根本から変えてみてはどうでしょうか。新しいアイデアを次々に追加してゆける設計上の余地を予測して、一生をかけてデザイナーと共に深化してゆく、そういう人形。難しいかもしれませんが、そういうのって良くありません？」

理子が言う。

「名案だ、吉岡。どうだナツキ、今度の後輩は言い勘をしているだろう」

水無川は少し考える間を持って言う。

「その可能性も何度も考えました。けれど実行出来なかったのは、もうあれ程の物を一から作る気力は、もうどうしたって出てこないんです。それにそれがもし完成したとしてもまた……」

「完成しない設計なんです」

間を入れず吉岡が言う。みんなが吉岡の顔を振り返る。

「先輩が生きている限り完成しません。人生と同じです。生きている限り先輩と共に同じ高みを目指す人形なんです。作り出す勇氣だって、最初から完成しないライフワークだと思って、一日たった1パーツだけでも作ってゆけば良いんです。千里の道も一歩から、って言うじゃありませんか」

水無川は包帯で見えない眼で吉岡の声の方に顔を向けて言う。

「その発想も、もちろん考えた事はありました」

しかし。

「でも、自分じゃない誰かにそう言われると、何だか出来る様な気がしてきました。ずっと一人で考えていると、つい自分の考えを自分で打ち消してしまいますけど、そうですね。そうやってみるのもいいかもしれません」

吉岡がにっと笑う。

「今度こそ先輩の制作を見せてください。作業に集中出来るように生活のサポートは僕らにらせてください」

そして。言う。

「過去と対峙する機会です。先輩をこんなにした相手を軽く超えてやりましょう」

\* \* \*

二ヶ月後。水無川無月の退院と同時にプロジェクトがスタートした。その日、吉岡は理子さんから預かった茶封筒(札束が詰まった)を持って、ATMで多額の振り込みをした。新社会人であるところの吉岡にとって、この額の金を動かすのは初めての経験だった。緊張よりも何だか奇妙な気分が勝ったのは、振り込んだ大金の用途が、全てネジを買う為のものだった事が原因だろう。水無川先輩の新作の為に、数千本のネジを注文したのだった。今回のプロジェクトリーダーになった水無川先輩は、今朝から早速、塩崎氏が調整し直した予備の義手と義足を装着して、新たなデザインを描き始めていた。みうは、まだ病み上がりの先輩に付いて、生活面でのサポートをしている。吉岡もまだ食べた事の無いみうの手料理である。少し、羨ましかったりする。理子さんは海外に居る吉田サプロウ氏に今回の事情をメールで説明して、新しく設計される人形の為の拡張OSを依頼した。閑さんは、

「今回は詩人の出る幕は無いのか」

と言って出て行き、製作費用を捻出する為のバイトを始めたのだった。見かけの無骨さを最大限に活かして、時給の良い現場仕事に採用され、不向きな肉体労働に性を出している。今回最も忙しくなるだろう塩崎氏は、工房のセットアップに余念がない。前回、会社地下の施設で行っていた部品の製作は、より作業環境の整った塩崎氏の所有する港の工房で行う事に決まった。そこで水無川先輩からFAXで届くデザイン画を図面に起こし、実際の加工を行う。今日から自分達の日常は一変する。ここに至って吉岡にも、今、工作という言葉で括られる世界の、針の先のような高みで物を作っているという恐ろしい実感が迫ってきていた。しかも作っているのが社員10人以下の、玄関が裏路地にある会社のメンツであるというから、もう怪しいという他ない。秘密結社という単語が頭に浮かぶが、急いでその連想を振り払う。しかしポケットから先程送金した金の明細書を取り出して見て思うのは、

「ネジを千本単位で使う人形って何だよ」

曰く、ほぼ全ての部品が合金からの削り出しで、ネジは単なる固定に使うのではなく、可動軸として用いるという。それはつまり、数千か所の可動部を持つ人形を作るという事を意味する。もはや現実感の伴わない妄想の世界である。しかし現実だ。閑さんが出ていく前にぼそっと、超絶可動と言って出ていったその表現が、全くその通りだと言えるのが恐ろしい。そしてそんな創作の現場にいつの間にか加わっている自分の境遇が、何とも言えない奇妙なものに思えてくる。

自分がした想像に実感が追いつかない感覚だ。そんな事を無意識に思っていたせいだろう。吉岡の足が自然に向かったのは、製作の現場である塩崎氏の工房だった。今度の製作にあたり、以前のAzの設計のままで残される部分は、水無川先輩がこれから順次FAXしてくる新規デザイン画に先駆けて、というより水無川先輩の退院前から、既に塩崎氏の記憶を頼りに製作中との事らしい。吉岡は妄想的な現実実感を得んが為に、郊外の港に佇むという塩崎氏の工房に向かった。

\* \* \*

塩崎氏の工房は、主がいるときはいつも正面のシャッターが半分だけ開いていて、そこから金属を削る高い音が聞こえてくる。丁度今の様に。訪問者はシャッターを潜るのではなく、その脇にある小さな扉から入るのが暗黙のルールだ。

「おじゃまします」

そう言って吉岡は扉を潜って工房に入った。扉は、不思議の国のアリスに出てくるように小さく、頭を下げないと通れない。わざと油を注していない扉は開けるときに大きく鳴る。それが訪問者を知らせるチャイムの代わりになっている。冷たい風が容赦なく吹き付ける外とは一変、工房の中はストーブで暖められていて、強張っていた筋肉がじんわりと緩む。待っていると奥から塩崎氏が出てきた。安全ゴーグルにツナギという正に製作中という格好で、ツナギには螺旋の形をした金属の削りカスがひっ付いている。工房に入った時から、吉岡の目は床一面にびっしりと並べられた部品の群れに奪われていた。どれも小さな、金属から削り出された塊だ。どれも掌にすっきり収まる程の大きさの構造部品で、艶の無い黒い色だが、光の加減で繊細なヘアラインが浮かんで見える事もある。小さいが、その形はどれもがささやかな個性を持っている。外装になるのか、少し大きい薄い板状のパーツもある。これは白亜色だ。それらは床一面に縦横のずれ無く整然と並んでいる。圧倒的な量だ。塩崎氏は辛うじて部品の列に占領されていない壁際を縫うように歩いてこちらにやってくる。その間も吉岡は並べられた小品を観察する。一つ一つの部品はシンプルだが、どれも違った形をしている。単純にL字であるとかT字であってもディテールが美しい。見回して全ての部品に共通しているのはφ5から10くらいの貫通した穴が部品ごとに二つあるいはそれ以上空いているという点だ。そしてその穴の片側には、形からすると恐らくサーボモータを収める為の窪みが設けられていて、同じく配線の為の溝が切られている。挨拶もそこに部品の列に興味を奪われている吉岡の無礼に構う事無く、塩崎氏は説明を始める。

「水無川からの連絡を受けてからの一カ月で、だいたい6割の部品が仕上がってる。設計し直す部品を除いて、以前の図面のまま作れるものはこれでだいたい揃っている事になるわな。図面は手元に残っていなかったが、俺は一度作った物の図面は全て記憶しているからな」

記憶、というところで手の甲をとんとんと叩く。頭で覚えているのではない。職人は手に脳があるのである。そんな仕事のひとつに吉岡は戦慄を感じる。塩崎氏は壁に立てかけてあったパイプ椅子を2つ開き、積もった埃を払う。吉岡は礼を言って、二人で座る。

「これがAzさ」

塩崎氏が目を細めて吉岡に言う。

「前に理子から水無川を紹介されて作った時には、こんな面倒なもん二度とやるもんか、と思

ていたんだが、水無川からもう一度頼むって言われて二つ返事で了解してしまった。何でかね」

確かに、そう易々と引き受けれる物量の仕事ではないと目の前を見て吉岡は思う。

「すぐに作り始めて、これが不思議な事にずっと手が止まんねえんだなこれが。一月の間一息も入れずにここまで作っちゃった。何というか、一つ一つの部品の形が面白いから飽きずに一息で出来ちゃう。それをさっささっさと作っている内に体の方がノッてきて、我に返ると小さな部品がもう何十と出来ている。一カ月で何百だ。それを少しずつ組み上げていくと想像もつかない複雑な代物になる。それがAzさ」

細めた目尻に皺を作りながら、にい、と左の口の端を上げて満足そうに言う。

「作る楽しさの判っているヤツの設計なんだな。一つ一つの形が作っていて楽しい。そんな掌に乗る様な小片を飽きずに作って、何百と組み合わせれば、謎かけのように複雑で、見る人の心を掴む大変なものが出来上がる」

その説明に吉岡はレゴブロックを連想した。

「作るのに大そうな技術はいらない。ただ基本的な工作精度をしっかりと、時間さえ注いでやれば正確に完成する。そういうところはエンジニアリングの真髄を地で行っていると言っている。完成した物を見た人は、こんなものをどうやって、と思うわな。でも実際は、ものづくりを知っている人なら、辛抱強くやれば誰だって作れる。そこには、やるか、やらないかの心の持ち方しか差は無い。こいつを作っているとそういう事を考えさせられる」

言葉を聞いて改めて見渡す。並んでいる小品はどれも至ってシンプル。しかし全てが最終的には連結されるひとつながりのオブジェクトだと考えると、恐ろしく作り込まれているとも見る事が出来る。その圧倒的な二律背反に眩暈がする。塩崎氏は、誰にでも作れると言うが、それは図面ど通りに工作すれば、という話で、零からこれを設計するのは、やはり鬼才の成せる技だと思う。頭の中で、立体的に交差する何十もの可動軸を構想し、そのクリアランスを矛盾なくまとめるには、やはり応答の根気が要るのではないか。少なくとも吉岡には想像すら絶する世界だった。あの雑な扱いをすれば簡単に壊れてしまいそうな、タフとは言い難い雰囲気の水無川先輩の中から、こんなパワーのあるものが生まれ出るなんて、創作とは本当に不思議なものだと思う。足元の一パーツを手にする。その金属片は思いのほか軽かった。Tとbを組み合わせた様な小片は掌にすっぽりと取まってしまって、握ると角が手に食い込む。見るとかなりしっかりエッジが立っておりシャープな造形だ。パーツの先端3か所には軸穴と、軸の緩みを調整する為の切れ込みと一回り小さなネジ穴がある。それにサーボと導線が入る凹みがある以外に余計な要素は何もない。機能美に徹している。小さく「G74」と刻印されているのを見つけた。塩崎氏が覗きこんで言う。

「アドレスのG69から80までを含むモジュールは再設計の案があるとFAXが来とったから、そりゃ今回は使わないパーツだな。何だったら持って行ってもええぞ」

持って帰っても、精々文鎮ぐらいにしか使い道はないなと思ったが、これでも壮大な作品の一部なのだと思うと、そとズボンのポケットに仕舞った。多分、遥か高みにいる憧れの水無川先輩との繋がりがあるそれが、吉岡にはお守りか何かか思えたのかもしれない。

「水無川からさっきもFAXが来とった。A14から53までの新しいデザインだ。その分もま

た作り直しになるな」

そう言って塩崎氏はすたすと工房の奥に引っ込んで行ってしまった。一人残された形になった吉岡は、いつまでも居てもしかたがないので帰ることにした。工房を後にすると辺りはもう暗くなっており、しっかり冷え込んでいる。歩きながら思わずポケットに手を入れる。指先が尖った物に当たる。ポケットの中でそれを何となくぎゅっと握ってみた。ただ痛みが返ってくるだけだった。

\* \* \*

オフィスに帰ると理子さんだけが一人残って自分のデスクで目をつぶっていた。背もたれに体を預け、天上を見ている。見ていない、どちらでもなくただ、考えているあるいは思い出しているのだろう。自分の背後でガチャンと扉が閉まる。その音で理子さんは目を開け、さっそこっちを向く。

「なんだ吉岡、一人か。塩崎の所に行っていたね」

言い当てられた。何故、と問う前に理子さんは言う。きっと不思議そうな顔をしていたのだろう。

「顔、洗ってきなさい。オイルが付いてる」

はあ、と返事をして洗面所に行く。鏡の前に立つと、確かに右の頬に黒い染みが付いている。石鹸を泡立て、爪で引っ掻くようにして汚れを落とす。泡を洗い流してタオルで顔を拭くと、黒色の汚れは取れたが顔に引っかき痕が赤く残っていた。力加減を誤ったらしい。背後から

「吉岡」

と理子さんが声を掛けてきた。はい、と返事をして振り向こうとするのを、そのままいい、と理子さんは制止する。背中から投げかけられる声を聞く。

「君が来てから水無川の雰囲気は少しずつ変わってきている。これまでのあいつはもちろん親しみやすいし少しシャイな所もあるけれど、何だかいつも、いつ消えてもいいように距離を保っている様な、俗な言い回しだけでも暗くて重いものを背負っている様な感じがして、もちろん器用なやつだからそんなのは表に出さないし、愚痴の一つも言った事がないんだけど、やっぱり私みたいに長い時間一緒に居ると、そういう気配、みたいなものが伝わってくる時があるんだ。それは淋しいものなんだよ、とてもね。それが君と会ってから、何がどうなったのかのかは分からないけれども、あいつの雰囲気が少し軽くなった様な気がするんだ。ううん、少しなんだけれど、確実に軽くなったと感じた。なんだか前よりも安心している様に見える。それは私達が、何年掛かっても越える事が出来なかった気持ちの壁なんだ。だから吉岡には、社長としてではなく、一人の仲間として感謝している」

ありがとう、そうやって理子さんが腰を折る衣擦れの音を背後に聞きながら、吉岡は返答に困っていた。自分は何もやっていない。ただ凄い技術を持つ仲間の中で、自分の小ささに落ち込みつつこの一年を一日一日どうにかこうにかやってきただけだ。それ以上の事は気にする余裕すら無かった。だからこういう返答しか思いつかなかった。

「僕は何もしていませんよ」

それが正しい答えだ。理子さんが頷く気配がある。

「そう。君は何もしていなかったね。それに出来る事も私達の中では僅かだ。けれど、他人の何かを変えるきっかけとなるのはそういった定量的な力の大小だけではない事も多い。バランスや組み合わせによって何かを変化させることもある。君の場合は恐らく後者だ。私が君を仲間にしたのは、実は君が普通の人間だからなんだ。ただし、ただの普通さではない。極めてバランスの良い普通さだからだ。どこかに突出しようとする強いベクトルも無く、かといって無力に甘んじる訳でもなく適度に努力をしようとする。そういった意味での絶妙にバランスのとれた普通の人間というのは、実際には稀なんだと私は思っている。水無川は見た通り極めて非凡だ。それは同時に危険なまでにバランスを欠いていると見ることも出来るだろう。だから君のような人間と居る事が、何らかの意味で相補完の関係になっているんだと思う」

理子さんがこんな話をするのは、それは多分、ずっと独りだった水無川先輩にこれからも良き友人であってくれという様な意味なのだろうか。だとしたら、それは理子さんの思い違いだろう。だって先輩はこんないろいろな人に見守られているのだから。なんでそうなったかは知らないが、先輩の“淋しい気配”を周りの誰もが気遣っている。例えば今の理子さんの様に。先輩は孤立なんてしていない、ちゃんと自分達の輪の中に居る。そう思うから、理子さんにはこう言わなきゃいけない。

「先輩は大丈夫ですよ」

その言葉に理子さんは複雑な苦笑を作った。一番長い間水無川先輩を見て来た理子さんには、それだけの言葉では心配は消えないのかもしれない。当然だ。でも自分からはこれ以上に説得力のある言葉は生まれそうにない。だから話題を変えて言う。

「とにかく今は先輩のサポート、ですよ。作業の進み具合はどうですか？」

「思っていたよりずっと早いよ。地下を閉鎖すると同時に一切の図面を封印してしまっていたから、またあれを一からのスタートかと心配していたが、塩崎のやつを見くびっていた。まさか図面を全部暗記していたなんて。これなら犯人は塩崎を拉致でもすれば良かったんだ。まあ今となっては彼が無事で何よりだったと思うしかないな。お陰で万事順調だ。二回目だから工作精度も以前より高い。ペースも速い。大変なのは水無川の方かもしれないね」

そう言って理子さんは右手を差し出す。意味が判らなかったので、咄嗟に右手をだして握手をする。理子さんの白い指はひんやりとしていた。顔を見ると苦笑している。

「違うよ。領収書」

吉岡は慌てて握手を解いて、ポケットから入金の詳細書を取り出し手渡す。

「驚いたな。可動軸用のビスが前回より2割も多い。これは久々に水無川の本気が見られるぞ」

そう言ってくっくつと楽しげに笑う。振り込用紙は社長ではなく先輩が書いたようだ。

「そうだ、新人研修のつもりでナツキのアパートに行って、あいつの製作の様子を直に見てくると良い。参考にはならないが眼の保養になるから」

そう言って社長用デスクに向かうと、何やら引出しをガサゴソと漁って、プリントアウトされた地図を取り出した。胸ポケットからパラジウムコート美しい万年筆を取り出すと、地図に道筋を書き込んでゆく。さらに丸と三角で始点と終点を囲む。

「丸印がここで、三角が水無川のアパートだ。一度行った事はあったか？ない？まあどちらでも良いが」  
地図を折りたたんで放ってくる。取り落としそうになりながらも何とかキャッチする。その地図を開いてみる。

「近いですね」

素直な感想を言うと、

「当然だ。何たってここは水無川のアパートに近いから買った土地だからな」

そんな答えが返ってきた。吉岡にはそれが冗談か本気が分からなかった。

\* \* \*

吉岡は水無川無月のアパートメントの一室に居た。壁も天井も真っ白な何も無い部屋で、背中を向けて作業する先輩を見ていた。部屋にぽつんとある作業机に向かって、水無川先輩はシュツシュツとヤスリを動かしている。音が止んだ時にはプラスチックの板からパーツを切り出して、同じくプラスチックの棒材や丸棒と一緒に接着剤でそれら組み立てて、再びヤスリがけをする。早い。そして幾つかの完成したパーツが溜まったら。ワッシャーを挟んで金属ビスでそれらを組立て、動作をチェックしてから、それに合わせて図面を修正する。そしてすぐに新たなスケッチを描き起こし、製作図面を描き、ペンをやすりに持ち替えてまた工作に戻る。そんな作業を延々と繰り返している。手が止まる事は無い。作っているのは、吉岡のポケットの中にある塩崎氏の工房で見てきたAZの部品と同類のもので、縮尺だけが異なっている。小さくて精密だ。そして、プラスチックの各種素材と道具が整理されている机の上には、それらの恐ろしく緻密なパーツで組みあがったものが置かれている。先輩は時折それに目をやり、ドライバーでその一部を取り外しては、新しく出来上がったより精密なパーツの連なりを同じ場所に置き換えていく。つまりこの人形がAzの縮小模型で、置きかえられた部分が今回の製作でリニューアルされた部分という事だ。もっとも、旧設計のままの部位も最初から作っているので手間としては完全新規製作と変わらない。それに、ついさっき作り変えた部位を、他所との兼ね合いでもう一度作り変えたりしているので手間は二重三重になる。さすがの先輩でも、最初から全てを見通しているわけではないのだ。作業を進めることで新たに見えてきたものを作り足してゆく。キッチンでは三浦が三人分のシチューを作っていた。彼女は水無川先輩の部屋に泊まり込んで生活の世話を代行している。また、書かれた図面を清書して塩崎氏の工房にFAXするのも三浦の仕事だ。ずっと制作を斜め後ろから見ている吉岡は図面と模型が合っているかを確認しながら三浦の図面の清書をサポートする。三者三様にやるべきことに向かっており、ずっと無言な三人だった。それはふさわしい沈黙で、ここには無意味な世間話は不要だった。吉岡がここを訪れてから数時間がこうやって過ぎて、黙っているのが普通だと思い始めていたから、その沈黙が水無川先輩の方から破られた時には驚いた。

「君は自分が何の為に生れて来たのか、なんて事を考えたりする？」

吉岡はとっさに反応出来なかった。驚いたし、それに問いかけられた内容にも即答出来る答えを持っていなかった事もある。作業の手を止めないまま机に向かって水無川先輩は返答の無い会

話を続ける。

「映画を見に行ったりすると感動する。そして必ずこう考える。今自分が作っているものと比べて、一体自分は何をやっているんだろうって。きっとこんなものでは、今見た映画の様に大勢の人を感動させることは出来ないだろう、この映画を作った人は、こんなに大勢を感動させて、大勢の他人心に何かしらの変化を残し得た時点で、そんな作品を一つでも作り上げた時点で、生まれてきて何かを残したという手応えを得たんじゃないかって」

また一つパーツを削り終えて、新しい部品に手を伸ばしながらも先輩の独白は続く。

「僕は子供の頃から物を作るのが好きだった。小学校の時から既に、自分は図工が好きだと自覚していたし、クラスの中でも飛びきり器用だという風に見られていたと思う。美大に入って物を作る力をひたすらに高めて、作品と言えるレベルの物をいくつも作った。今では息をするのと同じ自然さで毎日物を作って生活している。作るものが無い時間なんて無い。学生時代に思い描いた通りに、作る事と生きる事が等しい時間になった。だからこそ自分の作った物、人生に等しいものに対して、ふとした切っ掛けでさっきの話だと感動する映画と出会う様な切掛けで、酷く冷めた気持になる事がある。こんなレベルものを作って、生まれた意味があるのか。そんな想いが積み重なって段々と自分の中で無視できない大きくなって来た時に、自分の人生を代弁する様なものをたった一つしっかりと全力で作りたい、そう思ったのがAzを作り始めたきっかけだった。それが、最初に言った、生きていく意味、いや生きた意味になるはずだと、ある時こつんと理解出来た瞬間があって、その時から頭の中に、おぼろげけれども確かに存在するイメージが住みつく様になった。それを何とかはつきりとした見える姿にしようとして、最初はひたすらにスケッチに明け暮れた。そして今度は、それをイメージの次元から現実世界に存在する次元へと生み落とす為に、プラスチックでスケッチの細部までを模型に再構築した。始めてから数年をかけて、他の一切を忘れてその時点までの頭の中のイメージを全て現実世界に出し終えた結果として結晶した作品が、このAzという人形だった。誰も付いて来られない程の部品同士の複雑な結びつきと、そこから生じる可動、変形の多様性と迷宮にあるような謎めいた雰囲気によって、人形表現においての人を感動させ得る可能性を具現化出来た様な気がした。生きた意味を作れた気がした」

そして、理子さんとはそんな時に出会ったんだっけと言う。

「でも、そこまでしてもやっぱり他人が作ったものに感動する度、それと比べてAzは、自分の生きた意味はどうなんだと何度も、何度も.....何度も自問自答してその度に築き上げた自信を少しずつ失って行って、そうしている内に何にも楽しく感じられなくなって。仕舞いの果てに暴走して、気が付けばテロなんかやっている。もう完全にAzの存在価値に失望して、同時に自分の人生にも失望していた。それでも毎日何かを作ろうともがく自分が滑稽でさえ思えた。そんな日々が続いていた」

それは聴いているだけで痛々しい独白だった。それほどまでに真摯に造形に向かった事の無い吉岡には、安易な相槌さえ打てなかった。

「だから君の言う、作り続ける為の新しいAzというアイデアを聞いた時には、それはもしかして

自分を救うんじゃないかと、そう思った。数年ぶりに作る気力が内から湧き上がって来た。もう一度本気で作ろうという気持ちが整った」

独白はいつしか吉岡への告白に変わっていた。過去から今に至る現在までを語りながらも、しかしヤスリを動かす手だけは止まらない。それは本当に息をするかの様な身体に馴染んだ自然さだった。シャツシャツとヤスリの刃が薄くプラスチックを削ぐ軽音がいつまでも生まれては消えるを繰り返す。それは自分もよく使う同じヤスリであるはずなのに、そこから生まれる音は全くの別物だった。道具の扱いの習熟度も違うが、さらにそこには長年累積した想いが、一削り毎に込められている様だった。先輩はどうしてそんな話を自分にしたのだろう。語られた内容には、程度の違いこそあれ自分も直面したことがある制作や作品に対しての思い悩みや執着が込められていた。自然、自分の制作に向かう動機に思いを巡らす。自分の考えに没頭しかけてふと気が付くと、ヤスリの音が止んでいた。見ると先輩は手を止めて、両手を机の上に置いてじっとしていた。その視線の先には白いプラスチックから生まれた一つの人形がある。素材と想いを緻密に織り交ぜた、精密機械にも見える人形だ。

「ここまでが今の僕の全て。完成だよ」

そう言って作業椅子を回転させて、ずっと背を向けていた先輩がこちらを向く。その頬に伝うものがある。水無川先輩は声を上げずに、ただ静かに泣いていた。

\* \* \*

用意の全ては静かに進んでいた。今や全員が通常勤務を外れ、目前まで迫っている決戦に向けて動いていた。決戦とはこの会社の創立メンバーの過去との決着だ。しかしだからか、後になって入って来たメンバー、特に最後尾の吉岡と三浦にとっては、その決戦というのがどういう形になるのかが、未だ具体的に理解出来ていないままだった。特にその対決しようとしている対象が何なのか、それが者なのか物なのか、あるいは技術なのか理念なのかが分からない。そして何を持って決着するのか。恐らく全てを見通しているのは発端である水無川先輩一人なのだろう。そして水無川先輩が口を閉ざすのなら、後輩としてはそれを追求すべきではないと吉岡は思っていた。これまでは。しかし、事態が最終局面を迎えつつある今、ようやく自分達が何に対して相対しているのかが具体的に分かって来た。昨日、理子さん宛てに電話があった。塩崎氏の工房からで完成を知らせる連絡だった。全員で見に行く事になった。そして今、吉岡、三浦、理子、山根、そして水無川の5人は塩崎氏の待つ工房に着こうとしていた。塩崎氏はシャッターの前で待っていた。今日は脇の小口ではなく正面の開いたシャッターから中に這行った。以前吉岡が訪れた手前の作業場は綺麗に片付いている。塩崎氏の案内で工房の一番奥のブースに案内される。ちらっと見た塩崎氏の眼には、かなり深い隈があった。眠らずに制作を続ける水無川先輩に付き合っ、きつと何日も徹夜していたのだろう。その顔には酷い疲れと、それを上回る達成感の笑みがあった。本当の職人だけが出来る特別な笑みだ。塩崎氏はブースの入口で水無川先輩とすれ違う時、ぐつと親指を立てて見せた。水無川先輩もその返事に頭を下げ、笑みを返した。狭くて暗い通路を出ると、瞬間明るさで眼が眩んだ。案内された小部屋は床も天井も壁も一切が白く塗られた部屋だった。どこか水無川先輩の部屋に似ている。天井には一周するレールがあり、そこに取

り付けられた幾つものスポットライトが部屋の中央を、そこにある物をしっかりと照らし出していた。最初それは、細い枝を複雑に広げた一本の木の様に見えた。しかしそうではない。そうと分かるのは、枝に見えたものが金属部品の精密な集合だと分かった事、そしてその幹に相当する中心やや上に小さな白い顔の様なものが見えた事で、つまりそれが人形から変形した姿である事が遅れて理解出来た。

「フルオープン」

最後に部屋に入って来た塩崎氏がそう言った。

「メンテナンスの為に全ての可動部位、展開構造、火器を整備可能なように広げた状態、及び切り札としての全火器一斉発射を行う形態でもある。前回に比べて新規機構が2割増えている。サブロウ氏のOSが届き次第動連携作のテストに入れるが、現状でもメンテナンスに必要な機能だけは動かせる」

水無川先輩が聞く。

「精度、特に新規作成パーツのクリアランスや重量負荷には問題はありませんでしたか」

間を置かず塩崎氏は答える。

「完璧。特に重心に関しては肉抜きで限界まで軽量化を図ったから摩擦面の負荷が減り以前よりもずっとスムーズに駆動する筈だ」

「ありがとうございます。流石ですね」

水無川先輩は塩崎氏に頭を下げる。理子さんが、さて、と前置きをして言う。

「さて、全員が集まったことだから今一度話をまとめてみよう」

無意識に胸ポケットの煙草へ手が伸びたが、途中で気が変わったのか胸まで上げかけた腕をそのまま組む。

「昔、私達はAzという人形を作り、そして失った。それを何者かが手に入れ、今になってこの街に戻って来た。その何者かの目的は恐らくAzアーリーモデル、あるいは設計図面の奪取、推測するにその何者かは今、どんな事情からかAzを所有し、しかしそのロックされたままの膨大な機能を解放出来ずにいる。その為に制作者である水無川を脅迫、設計の全容を奪取する為に強引な方法に打って出た。そのやり口から事態の危険性が分かる」

ここまではいいか、と顔を見回す。4人分の頷きを得て続きを始める。

「それに対して私達の目的は2つ。その何者かと接触し、無効化する。そしてAzを破壊する。その為により性能を高めた新設計のAzによってそれを上回る。具体的な作戦は無い。過去を現在の全力で以って正面から打ち破り、失われた水無川無月の自信を取り戻す。これが最終目標だ」

再び理子さんは一同を見回す。全員の顔に一定の理解の意を認めて続ける。

「相手側からの3回の接触のお陰で私はAzの所有者を特定する為の幾つかの痕跡を発見している。ここ数日の捜査であたりを付けて、およその人物を一人に絞った。恐らく間違っていないと思う。そこでその何者かに果し状を送ろうと思う。来月の一日、市内のT公園にて深夜3時にAzと共に呼び出しそこで迎撃する。と、こんな段取りでどうだろうか、ナツキ」

相手も相手、手段も強引、恐らく非合法的な実戦となるだろう。舞台を深夜の公園に誘導したの

はその為だ。その上で水無川先輩は毅然と言う。

「想像し得る最高のコンディションで迎撃します。あれから流れた月日の価値を証明するには、過去を真正面から打ち破るしか方法はありません。それに今回の準備には、かつては無かった仲間の助力があります。だからこそ実現できた作品が過去に劣る筈は無いです」

ここまでで交わされた会話で、吉岡はやっとこれまでやって来た事の全体像が理解出来た。吉岡はイメージする。深夜の公園で対峙する二人と、闇に浮かぶ鏡に写した様にそっくりな二体の白い人形。知られぬ非合法の対決。水無川先輩の陰りの正体。過去を超える機会。それらが頭の中で、ようやく具体的な一つのイメージに収束した。

「Azは過去の時点で最高の存在だった。それに間違いは無い。しかし今回は水無川の成長を踏まえてそのさらに上に行く事になる。また、同様に相手側もこの数年で、Azを独自にチューンアップしている可能性が十分にある。そのあたりは未知数だ。単純に自己の過去の設計を超えているだけでは敗北する可能性がある。こちらの成長が相手の成長を超えている事が勝利の条件となるだろう。そこらへんの感触はどうだ？」

デザインを自ら行った水無川は迷い無く即答する。一切の躊躇い無く言う。

「死角無し、と答えられます。もともとAzを設計したのは私です。設計の細部まで把握していて、どこに改良の余地があるのか、新しい発想をどこに組み込む余地があるのか、過去の時点でどこに欠点があるのか、それらを一番理解しているのは私です。その私がこの数年の間に頭に浮かんだ全てのアイデアを投入した結果です。死角の無い迎撃と状況に合わせて細部を変形させる状況適応性、新機能の充実、基本性能の総合的な向上。現時点での最高のスペックを実現しているはずですが、やるだけのことは尽くしました、こちらは万全です」

設計上はな、と理子さんが頷く。

「塩崎氏の工作精度を疑う訳ではないが実際に動作テストが必要だろう。明日からオフィス地下のテストルームを解錠する。そこで実動のテストを行う。サブロウ氏に依頼したOSも今晚中には完成すると連絡があった。明日までに機体にインストールしておく。最後にこの新人二人に、私達が作る物のレベルを見てもらおう。まあついでだ。塩崎氏、初期形態へのクローズモーションを見せてやってくれ」

本当は音声認識なんだが、と言って機体後方の黄色いハンドルを操作する。

「よく見ておけよ、これがこれから君らに要求する作品のレベルだ」

変形が始まる。末端から順番に開いていたハッチが閉じられ、フレームは折り畳まれ、展開していた機能部品がパズルのように収納されていく。それは万華鏡を見ている様だった。全方位にあるセンサーアンテナとスタビライザーが短く折り畳まれ、次に長い砲身が中折れして収納される。ガトリング砲の束ねられた砲身が分解し収納され、さらにグレネード用の短い砲身もブローバック分だけ収縮し可動骨格に沈み込む、その可動骨格もまた母体となる可動骨格の規定位置へと収納される、というふうに、次々に構造部品が機体内部に収まり、収束して一つながりの密度の塊になってゆく。四肢や下半身を覆うスカート状のモジュールにも多くの構造部品がそのフレームの一部として組み込まれロックされる。目立つ火器以外目立つ火器以外のより細かな部位

も、収まるべきスペースへと向かって順番に移動してゆく。フレームの変形は円滑で、数百のポイントで軸が回転運動を行っているのにも関わらず、金属同士が音を立てない。各所で収納を完了した後にカチカチカチカチと可動部にロックが掛かる小さな音が静かに響く。それが聞こえるくらい変形は静かだ。収納される機能の中にはおちゃめな機能としか思えないものも幾つか見つかる。最少の収納効率に合わせて、また、造形の統一性を損なわない形状にアレンジされたフライパンであるとかハリセンであるとかモップであるとか、それらが真面目な機能に隠れるようにして収納されてゆく過程はヤドカリのようにユーモラスだ。切断力の高い大鎌や肉厚のブレード類は刃が何層かに割られた上で折り畳まれる。小さな操作翼を持ったブースターやスラスターは、メタルチューブを巻き取りながら丸穴に収まり蓋が閉まる。各所にあるサブアームは顎を閉じた状態で三つ折りになって外装の裏面に隠れる。硝子の丸窓を持つスコープは蓋が閉じ、設置下部へ沈み込む。モーターを冷却する積層フィンが交互に重なり合い無駄なスペースを節約している。あっという間に、枝を広げた木の様に見えた物が、遙かにコンパクトな人の形にまとまってゆく。人の形を作る大部分は、限界まで密集した黒の内部機構で、その周囲に最終外装となる白のプレートが開いている形になっている。最後に白の最終外装が機体をしっかり覆う形にその位置をさせて、支持アームが畳まれる事で順番に構造体を覆ってゆく。そうして折り重なり合いながら最終的なシルエットを完成させてゆく。順番に上腕、下腕、脚部、背部、腰部、肩部、胸部、胴部、頭部、腰部両脇のエクステンション、脚部を覆うスカートプレート、肘部後部のL字ユニット、そして残ったフレームは後部に回り、肩部から伸びる細長いスタビライザーのスペースの中へ全て収まる。そこまでで、それ以上の動きは無い。変形が完了して静かになる。残ったのは頼りないほどシンプルな人形と、それを支持している黒い三本脚のスタンドだ。最初枝を広げた木に見えた時の幹に相当する部分は機体そのものではなくこのスタンドだった。あれ程の構造部品を格納しているとはとても見えない華奢な身体だ。平面的な最終外装でカウリングされているにも関わらず、その造形はどこか女性的なしなやかさと軽さがある。吉岡と三浦は初めて見せられた圧倒的な空間設計力の成果に茫然としている。吉岡は、とてもじゃないが、これから自分がこの水準に到達出来とは思えなかった。その様子を見て理子さんが笑って言う。

「まあこれはちょっとやりすぎだな。水無川のレベルにはもちろん私も到達出来ないし、張り合う気は無い。ただここまでの物を作る仲間が側に居る環境そのものがとても貴重だし自覚している方が良いと思うよ。まあ頑張れ」

人形Azの双方の瞳にはまだ光が無く、透明なガラスがはめ込まれているだけだ。その奥には光学センサーがあるはずなののだが、その瞳は奥く、ずっと見つめていると吸い込まれそうだった。と、急にどこかの電話がリリリリと鳴った。ケータイではない。音は隣の部屋から鳴っている。そこにあるのは塩崎が趣味で買った時代物の黒電話だ。電話を取りに出ようとする塩崎を理子が制して受話器を取る。

\* \* \*

理子は嫌な予感と共に受話器を取った。

「初めまして。準備は順調のようですね。今週の日曜日の深夜零時にK公園で待っています。万

一來られないなんて言われる事が無いように一応人質を取らせて貰きました。白髪の彼に、来なかったら大事な姉が死んじゃうよってお伝えください。もちろん外野の加勢はなしでお願いします。憧れの相手との対面なので一対一にさせてください。よろしくお願いします。」

ブツツと一方的に喋るだけ喋って通話が切られる。嫌な予感的中だった。急いで外まで走って周辺を見るが誰も居ない。

「高みの見物のつもりか。脅迫電話と言うものは丁寧語で掛けるものではない。様式美の分からない奴だ、クソ」

そう一人で悪態をついて理子は中に戻る。どうやら盗聴器でも仕掛けられていたらしい。ここでの会話は筒抜けだった。また、相手の方から接触があるのは予想外だった。それはまあいい。それよりも、と理子は皆のいる部屋に入ると、水無川を睨みつけて乱暴に言う。

「今Azの現在の所有者から脅迫があった。こちらの動きは筒抜けの様だ。それに、お前に姉が居るなんて聞いて無いぞ。どうして黙っていた、こんな状況で一人にしておいたせいで人質に取られたぞ」

頭に血が昇って語尾が荒くなるのを抑えられない。それに対して水無川は、  
「姉...あ。ずっと会ってなくて、失念していました」

なんてとぼけた事を言って退ける。あんまりの返答に一同絶句する。どうしたら実の姉を忘れて居られるのだろう。やはりこいつは一人の人間としてはどこか抜けてはいけないネジが抜けている。各人からいろいろな意味のこもった溜息が幾つも漏れた。何か言いたい事は山ほどあるが、しかたない。終わった事だ。

「全く何て事だ。まあ、それはいい。起きてしまった事だ。それよりも問題なのは時間が無くなった事だ。相手は時間と場所を一方的に指定してきた。遅れれば水無川姉の命を取られる。指定された日時は今週日曜の深夜零時丁度、それまでに全ての準備をしなくてはならなくなった。予定はこれでぎりぎりだ。今夜中にもサブロウ氏のOSをインストールして、明日早朝から実弾を装填しての動作試験だ。少ない時間で試験運用と最終調整をしなければいけない。前日には一度オーバーホールして最善のコンディションに戻さなければいけない。とにかく時間が無くなった。また缶詰になるな。吉岡、今すぐ三日分のカロリーメイトを買い集めろ。私はサブロウ氏を急かす。残りは水無川と塩崎のアシスト。さあすぐにやろう。

終局に向けてラストスパートが始まった。

\* \* \*

吉岡は塩崎氏の工房にて水無川先輩と塩崎氏による最終調整に立ち会っていた。とは言っても、天才二人の最後の詰めに素人の自分が出る事は無い。せめて言われたパーツを、部品の整理された工具箱から見つけ出し手渡すぐらいが関の山だ。そんな事をしながら二人の会話を聞いている。

「手首y関節軸の保持力が甘くありませんか。A72と73のクリアランスが大きすぎて、可変時にガタがくるのが心配ですが」

「いや、そこを強く締めすぎると腕全体で最も負荷か掛かるポイントが肘に集中する。もし折れ

るなら手首の方が良い。ウィークネスリングだよ」

「ならいっそ軽量化の為に素材をカーボンサンドメタルに変えてみてはどうですか。それならしなり強度もありますし」

「いや、時間的に間に合わない。せめてエンジニアプラスチックだ。それならそこそこの粘りもあって加工も間に合う。分かった、10分待て」

塩崎氏が駆け足で別室に去ったので水無川先輩の指示が自分へ向く。

「装弾をします。その段ボールを開けて」

指を指す先には先程理子さんが運んできた段ボールの箱がある。黒字の英語、が上面にプリントされている。ポケットに入れて持ち歩いているツールナイフでガムテープを切って開封すると中には黒いプラスチックの小箱がぎっしりと入っている。一つを手にとるとずしりと重い。蓋を開けるとアクション映画で見慣れた真鍮製の銃弾がずらりと並んでいる。疑問のままを口にする。

「違法ですよね」

「違法です」

忙しく手を動かして細部を金属ヤスリで手仕上げしながら水無川先輩は即答する。その口調は硬く、いつもの優しさは無い。

「相手がAzなら違法対違法。でなければ姉と僕が死ぬ」

それが正論ではないのは言っていて分かっているだろう。しかし罪と死では秤にはかからない。先輩が指を4つ立てたのを見て四本の薬莖を箱から引き抜く。先輩はそれをメインアームの開いたハッチの中のマガジンに一本ずつ慎重に装填してゆく。四つの丸い残弾確認窓が埋まったのを確認すると、マガジンを後方にスライドさせて、その後内側に押し込む。カチンと言う音がするのを確かめて白い外装板を元通りに戻す。閉じた外装に小さなマーキングでBのマークがある。装弾口の位置を知らせるブレットのBだろうか。いろんな箇所と同じマークを見つける事が出来た。中にはB2やB4などもある。手元の箱にもマジックの手書きでBとあり、段ボールの中の箱にもB2、B3、B4などとある。B4と書かれた箱を開けると大きく長い薬莖が並んでいる。数字の大きいものほど火薬の量が多い大型の弾丸のようだ。黒い箱の下には赤い箱もある。これは更に一回り大きく、マークはMMとある。BがブレットならMMはマイクロミサイルだろうか。段々と日常からかけ離れてゆく。その後も塩崎氏が戻って来るまで先輩と装弾の作業が続いた。段ボール一箱分の実弾が装填された。同じ段ボールがまだ壁際にいくつも積み上げられている。これだけでもかなりの金額になるのだろうと思う。少し休みながら、水無川先輩と塩崎氏との会話に耳を澄ませる。

「弾薬を装填したので重量のバランスが変わりました。スタビライザの再調整をお願いします」

「決戦は恐らく瞬間戦闘になるでしょう。グリスの粘度はなるべく低くして駆動速度をなるべく速くして下さい」

「白兵用の刃は多少強度を犠牲にしても肉抜きで少しでも軽くして下さい」

「コンプレッサ圧力の数値は.....ええ、そのまま最良だと僕も思います」

等々、二人の専門会話に完全に置いてきぼりを食らい、吉岡はする事が無くなって、カロリーメイトを開けて齧っていた。しばらくして理子さんが帰って来た。スーツのままだ。会話に集中する二人は訪問者に気づいていない。ちなみに今は夜の2時だ。

「サブロウ氏を焚きつけてプログラムを完成させた。機体の調整が終わってから二人に渡しておいて」

プログラムの責任者代理は一応理子さんの担当だ。一緒にチェックした方が良さだろうと思ったが言い掛ける前に理子さんがバックからケータイを取り出して言う。ディスプレイには派手なポロシャツにサングラスの男が映っている。

「サブロウ氏とテレビ電話が繋がっている。こっちが本職だから分からない事は彼に聞いてくれ。私は私でやる事がある。あとよろしく」

理子さんはそう言い終わるか終らないかの内に、急ぎ足で去ってしまった。黒いスーツはあっという間に夜の闇に消えてしまう。水無川と塩崎氏の二人が手を止めたのはそれから二時間後の午前4時だった。

\* \* \*

OSのインストールは組立てチェックの地道さに比べると呆気ないほど簡単に終わった。TV電話でサブロウ氏が説明する通りの手順でノートPCからケーブルを繋ぎ、OSをインストール、各種のパラメータの調整手順を教わる。後は実際に動作を確認しながら各モーターを再調整すればいいらしい。これでほぼAZは完成した事になる。まだ二日ある。吉岡、水無川、塩崎の三人は完成させたAZの傍らで数時間の仮眠を摂った。

\* \* \*

翌日はオフィスの地下施設の通称“開かずの間”で実働試験を行う事になった。初めて入る地下の開発室は正式にはシミュレーションラボと言うらしい。部屋の半分が強化レジンの透明な仕切りで区切られており、反対側の壁には溝があり、そこから射撃テスト用のターゲットが現れる仕組みらしい。壁は跳弾を防ぐ為に柔らかい特殊素材で出来ており、過去に使用された痕跡として、取り除けない程に深く食い込んだ何発かの銃痕が生々しい。区切られたこちら側からはターゲットを操作しつつ動作を観察出来る様になっている。その場で調整が出来る様にノートPCや工作台、工具箱などが用意されている。水無川先輩と初めて、電源が入られたAZは既にテストルームの反対側で待機している。OSがインストールされ自律駆動する、文字通り命を吹き込まれた人形を見るのはこれが初めてだった。電源が入り、ハンガーから降り立って自分の足で立つ瞬間を見た時には一同から感嘆の息が漏れた。透明な壁越しで部屋の中央にて向かい合う水無川先輩とAZは何やら会話をしているらしい。まるで人形とは思えない。よく見ていると体が左右に少しずつ動いていて置物の様に静止してはいない。自然にぐらつき、それに対して重心のフィードバックが為されている。それが人形をまるで生きている様に見せていると気付いた。水無川先輩がこちらを向いて、襟元に付けた小型マイクに向かって言う。

「今話していて、名前をAZから変える事にしました。彼女はこれからF4という名前になりましたのでそう呼んであげてください」

理子さんがマイクに向かって言う。

「了解した。藤原理子だ、よろしく頼む。君の名前の由来を聞いても良いかな」

YESと返答がある。その声はどこか水無川先輩に似ている。

「マスタの発案で、Free Form Frame Figureの頭文字F F F Fを取ってF 4です」

凝った名だ。前から考えていただろうナツキ、と言う理子さんに先輩は照れながら微笑み返す。凶星だったらしい。

「テスト一分前」

と理子さんがアナウンスする。

「指示を、マスタ」

それに水無川先輩が命じる。

「兵庫ロック解除。最終安全装置解除。ブースタ及びスラスト安全弁開放。センサー展開。全機能任意使用許可、あらゆる手段を以って最高速度でターゲットを破壊。ただし自機の防御を最優先とする。全方位迎撃準備」

15秒前。

F 4がゆっくりと両腕を上げる。最終外装内部からロックが外れる音がする。

10秒前。

足のアンカーが立つ。瞳を左右に振ってターゲットの出現位置を予測する。

5秒前。

動かない。

3秒前。

体の揺れが止む。

1秒前。

完全に静止。

そして、

脳を揺さぶる爆音と閃光が炸裂する。何が起きたのかはすぐには分からなかった。理性が戻り白煙で霞むテストルームの反対側に目を凝らす。そこには全身の火器をヘッジホックスの様に広げたF 4と、完全に出現するよりも速く撃ち碎かれた、壁中のターゲットの残骸があった。スピーカから電子音のアナウンスが流れる。

『ターゲット残数ゼロ。タイム0.4セカンド。射撃精度98%。レコードが更新されました』

透明な壁の上方に設置されたモニターにスロー再生が繰り返し流れる。全火器を静かに収納したF 4と水無川先輩もテストルームから戻ってきて一緒にモニターを見る。ゼロのアナウンスと同時にF 4の腕部外装が一気に全て跳ね上がり、広げた腕から全方位に無数の砲身が現れる。スロー再生でターゲットが壁の溝から頭を出し始める。各砲身が頭を覗かせたターゲットにアジャストする。モニターのタイマーはここまでで0.2秒。爆音と共にモニターが一瞬ホワイトアウトする。弾け飛ぶターゲット、しかし一つだけ外れて残っている。わずかに照準が逸れていた。再度射撃音、残ったターゲットも今度は弾け飛ぶ。0.4秒。3.0秒後に全身から一斉に排

茨、コッキングの連音に合わせて宙を舞う無数の真鍮の空薬莖が床を打つ。10.3秒後にガンスモークの尾を引かせて砲身が収納される。最終外装がスライドして閉じ、腕が下される。そこでスロー映像は一端止まり、再び最初から再生が始まる。

「何故一発外れたんでしょう」

水無川が問う。塩崎が答える。

「組立て精度が原因の動作不良の可能性、いやそれよりも射撃管制プログラムの方が怪しい」

いや、それは無いだろうと理子さんが言う。

「サブロウ氏のプログラムに限ってミスは有り得ない。同時に塩崎氏の組立て精度の方も疑いようが無い、機械に任せるより正確だろう。きっと他の所に原因がある。誰でもいい、何か気付いた事は？」

言われて吉岡はもう一度モニターを見る。繰り返しテストの映像が流れている。ふと、気が付いた事があった。

「外れたターゲットへの射線が水無川先輩の立ち位置に近いですね。マスターへの誤射の可能性を怖れて射線が外側に逸れたという可能性はありませんか？」

なるほど、と理子さんが頷く。

「マスターユーザーへの防衛優先意識のレベルをもう少し下げれば、同様のケースでも命中率の向上を望める可能性がある。その設定を変えて再テストしてみよう」

理子さんがノートPC上で表示されている無数のパラメータから、関連する項目を検索する。キーボードで数値を修正する。それは短距離無線で即座にF4のOSに反映される。貴重な実弾がもったいないのでペイント弾に切り替えて2、3回再テストを行って設定の調整を行った。今度はどちらも全弾命中し、タイムレコードも0.3秒に更新された。

「つまり立ち位置だな。決戦時は水無川はなるべくF4から離れる事。それだけでもスペックを引き出す要因になる。射撃動作に関してはこれ以上の改善は必要ないだろう。今日のところはこれくらいにしよう。解散」

\* \* \*

解散後、水無川とF4、そして塩崎は新規に追加された実験的な特殊兵装の動作テストを始めた。吉岡も興味がありその場に残った。特殊兵装は今回新規にデザインされた構造部中で特に複雑な変形機構を持った部位で、遠距離、中距離、近距離の三つが新規に組み込まれた。理子さんが帰った後にテストをするというのは、それらが明らかに実験的な機構で、密かに開発されたものだったからだ。つまり、やっちゃった系である。最初は近距離用の兵装のテストが始まった。三つの特殊兵装はとも地下施設では発射出来ないのも、使用状態可能への変形動作のみのテストだ。3人が観察する中で複雑な変形が始まる。まず右半身を覆うすべての外装が折り畳まれ、腕部の複合可動骨格が露わになる。そして背中側に折り畳まれていた別のモジュールが丸ごとアームで前方に移動し、右腕の骨格と合一する。その周りに腕部を構成していた構造体が組みつき固定する。合体した腕部フレームが伸長し、隠された第三の関節で折れ曲がる。冷却機が機体後方に口を開け、変形した右半身と可動ダクトで繋がる。変形が終了するまでに3秒も要したが、

半ば人型を破った異形の兵器が出来上がった。実弾テストで見た兵装が実用兵器だとすると、これはその場で組立てられる大型試験兵器と言える。

「いいですね」

「ああ、実にいいね」

水無川先輩と塩崎氏は実に満足げだが、引いて見ている吉岡には、少し頭のネジが飛んでいるんじゃないかと思われた。いいですねいいですね、と何度も変形の動作をF4に繰り返させて、どうにも遊んでいる様にしか見えない。

「さ、次のテストに行きましょう」

見た事の無い陽気さで水無川先輩が言う。酔っているみたいで怖い。次は左腕部と、肩から連なるユニットが丸ごと基部から外れ、可動骨格で背後に外され、背後に回ったメインスタビライザーのカウリングが開き、そのモジュールを構成していた可動骨格の主骨部分がスライドし背部で縦に連結することで、何やらやたらと長い砲身が組み立てられ、それに反動吸収機構やら照準器やらが組み付き、大きくスイングして前方に向く。その際砲身が天井にぶつかりそうだった。長さもテストルームの限界に近い長さがある。最後に背後に避けられていた腕部が基部に戻り、巨大な砲身のグリップを握り、腕部の一部が砲身と合一する。出来上がったのは異形の長砲だ。

「最高ですね」

「ああ、これが浪漫だ」

マニアな二人の要望通りに、F4は何度も複雑奇怪な変形を繰り返す。その無機質なはずの表情には呆れと諦めが見取れるのは吉岡の錯覚だろうか。見あきるほど変形を堪能した二人は最後の変形の指示を出す。まず脚部が一段下がり下半身の補助脚がしっかりと上体を支え安定を確保する。背部のモジュールが開き切り、可動骨格が必要な部品をその場で組み上げる。3次元的な動きで同時にいくつもの可動肢が回転し4本一組のレールを組み上げる。天井に向かってカタパルトが完成し、その横から4分割された特殊弾頭が、個別の4つのマガジンから順にレールに装填され、カタパルトの基部で結合される。最後に砲身を尻から押し上げる様に発射装置が下から射しこまれ変形が完了する。

「リロード」

水無川先輩の指示でカタパルト内の砲弾が排出され、ごとんと床に放り出される。発射装置が後退し、カタパルトに先程のマガジンが再結合し4つの砲弾を順番に送り出す。マガジンが離れ、発射装置が再度差し込まれる。床に放り出された弾頭はまるで戦車砲だ。

「これが見たかったんですよ」

「これが作りたかったんだな」

はしゃぐ二人を無視して、F4は組み立てられた仮設の発射台を逆の動作で元の状態に自動解体し、元のモジュールに格納してゆく。傍らに放りだされた砲弾を自分で拾って4つに分解すると、先程のマガジンだけが背後から顔を出し、補助腕でそれを再装填して後始末する。後始末するその姿は哀愁さえ漂っている。

「変形動作には特に不具合は無さそうですね」

「まあ実戦で使う機会なんて無いから気楽なもんだがな」

黙っていられなくなって、吉岡は思わず尋ねる。

「それって意味があるんですか？」

二人は、分かって無いなあ、という顔をする。

「意味はない。しかしそこにこそ浪漫がある」

塩崎氏が断言し水無川先輩がぶんぶんと頭を縦に大きく振り同意する。こんな風に傑作は生まれるのかと、吉岡は複雑な後味を抱えたままラボを後にした。

\* \* \*

翌日、同テストルームにて。今日は白兵戦闘の試験を行う事になった。テストルームには既に調整を終えたF4と塩崎氏特製のテストマシンが向かい合って待機している。今日は水無川先輩もこちら側もモニタールームで監視している。狭いテストルームに一緒にいては危険だという理子さんの判断だった。テストマシンは三脚型に肋骨の様なフレーム剥き出しの上半身を持った、蟹を連想させる自律ロボットだ。AIこそ積んでいないが、光学センサーで周囲の遮蔽物を感知し複数のプログラムから状況に応じた適切な切断動作を行う。現代技術が再現した優秀な斬撃手だ。カウントダウンが始まる。5秒前、テストマシンの4本のアームが上がり先端の切断刃が回転を始める。三本の脚部が低く沈み前屈みの突撃姿勢を取る。F4は自然体のまま動きを見せない。一秒前、F4の前髪を模したアイガードが下りて、指先が僅かに動く。ゼロのカウントと全く同時に、テストマシンが3メートルの間合いを瞬間で詰め、その勢いからの斬撃を放つ。左上から袈裟に走る切断刃の速度は目視の限界を超えている。小さな破裂音を聞いたと思った瞬間にF4は立ち位置をテストマシンの右後方に変えている。小爆発の反動を利用したクイックブーストだ。左肩から回避運動に使用した空薬莖が排出される。右腕は既に斬撃用のブレードが展開済みだ。テストマシンが最初の切断動作を終えながら旋回して振り返るよりも速くF4は再度のクイックブーストで背後の死角に回り込む。同時に左上腕部の外装が開き、左右に押し開く骨格の中から短砲身のグレネードがせり出し射撃体勢を取りながら構造が組み上がる。全ての可動部品が合致するよりも速く、右腕のブレードがテストマシンの背から腰までに突き立ち貫通する。組みあがり初弾のコッキングを終えた左腕のグレネードの銃口がテストマシンの頭部に背触する。間を置かず零距离からの爆発が起こりテストマシンの胸部から上を粉々に吹き飛ばした。勢いを持って飛び散った金属片がテストルームの壁面に突き刺さり、モニタールームを隔てる透明壁に跳ね返る。ゼロカウントから僅か2秒弱、近距離試験のテストが完了した。塩崎氏と水無川先輩は、試験で使用されなかったギミックも含めた点検作業に入り、理子さんはPCでテスト時のF4の全てのアクチュエータの動作記録を点検し、各アクチュエータへの電圧配分を微調整する。三浦と吉岡はテストルームに散らばった、溶けてひしゃげた金属片を片付けて、焼けた床素材を張り替えたりして午後の試験の準備をした。完全に破壊されたテストマシンの残骸を運び出しながら、吉岡は何とも言えない複雑な気分だった。一体自分達は何をしているのだろうか、段々分からなくなってきた。

\* \* \*

弾丸数百発の弾幕。息継ぎの間を与えないグレネードの連続爆発に砲身のきしみとコッキング音。射線ではなく面で圧倒するロケット弾の雨、いや嵐が轟く。曇みかけるように巻き起こる爆煙と途切れない乱射で、モニタールームからは状況がほとんど見えない。それでもまだ火薬量は増える。高速でターゲットの周りを旋回する姿が白煙をスクリーンとして陰で見える。チェーンガンの掃射もさらに加わる。追加のロケットランチャーの炸裂音。特徴的なショットガンの着弾音もそこに加わり、後部のカタパルトから十数の爆雷がばらまかれる。宙を舞う無数の爆雷のランプが緑の放物線を描く。そしてターゲットに接触してそれらが一斉に赤になる。ひととき大きな爆発が起こる。腹に響く音の衝撃波に、モニタールームの天井からばらばらと粉が振る。鼓膜が耐えられる限度を超えた爆音だった。それでもまだ終わりではない。全ての火薬を消費し尽くした瞬間には兵装が斬撃用に切り替わっている。サブアームも全て使用した10を超える軌道でターゲットを滅多切りにする。白煙の中に銀の軌跡と斬撃の火花が舞い乱れる。地を蹴り駆けながらの斬撃は一振りでも16本、16方向から同時に放たれる。炭素鋼を5工程で焼き入れされた刃が、破壊対象を削り、つんざく音が耳を劈く。一瞬斬撃が止むと、展開していた刃が互い違いに組み立てられ合一し身の丈を超過する一振りの巨大な刃を形作る。幾つもの火薬の爆発の勢いに乗って身長超過の大斬撃が放たれる。超重量を刃の一線に乗せた切断圧力が、ターゲットを斜めに押し切った。最後の一振りを以ってやっとの静寂が訪れる。けぶる透明壁越しの粉塵の中で、全ての兵装を使い放したまま展開した異形のシルエットが、逆再生の機械的な動きで人型に戻ってゆく。瞳に点った紅紫の光が、光量を抑えて透明な白光に戻ってゆく。分断されたターゲットが斜めに崩れて再び小さな粉塵が巻き起こる。開始一分経過を告げるブザーが鳴り、テストルームの密閉が解除される。吉岡は恐る恐るイヤガードを外す。さらに1分、2分が経ち、ようやくテストルームの粉塵も収まり、おぼろに中の様子が伺えるようになる。試験室の中央に、1分前にはきちんと直方体だったターゲット（一鋼鉄と炭素繊維とコンクリートを積層した）がガレキの屑になって僅かに残っており、床一面に大小様々の空薬莢が散乱している。他にもグレネードを4発収納していた樹脂のカートリッジや折れてパージされた合金の刃などが燦燦と散々と散らばっており、戦場を切り取って持ち込んだ様な有様だった。部屋を仕切る透明壁には、よくぞ衝撃に耐えてくれたと思ひ冷や汗が出る。午後に行われたこの最終テストは最大火力での複数機能同時運用試験だった。ここまでやらなくても、というのが吉岡の本音だったが、真剣な雰囲気の中ではもちろんそんな事は口に出せない。ただ、入手困難な本物の弾丸や爆薬が一度の試験で何百万円分も消費されたのは事実だった。けっこうな時間をかけてそれを装弾した吉岡には、その消費スピードの異常さが身に沁みる思いだ。埃まみれになったF4がテストルームから出てきて申告する。

「使用したどの機構にも不具合はありません。駆動も円滑です」

水無川も言う。

「実動試験はもうこれで十分でしょう。後は今晚までにオーバーホールとクリーニング、弾薬の再充填と充電がありますが、塩崎さんを中心をお願いします」

少し、休ませて下さい、と言うと水無川先輩はモニタールームの隅に持ち込まれた毛布に倒れ

込んでそのまま寝入ってしまった。連日、試験後のメンテナンスと調整に朝まで立ち会っていたので水無川先輩だけは貫徹続きだったと思います。他のメンバーは交代で睡眠を摂っていた。緊張の糸が一度切れた先輩は人形のように動かず、深い睡眠に落ちている。あまりにも微動だにしないので、死んでしまったのではないかと心配になる程だ。静かで、無防備だ。白い首元が、柔らかに広がる白髪が、眠っているとより一層白さを増して、先輩の性別をますます分からなくさせていた。一方的に見ていることが、何だか背徳的な気になってきたのであるべくそちらを見ない様に反対を向く。さて、とテストルームの惨状に再び眼を遣る。数分前にはそこに幅1メートル四方高さ1.8メートルの綺麗な試験材があった。重いので分割した上キャストにて運び入れ、テストルーム内で接着し一体化させた。素材本来の用途は戦車の砲撃を防ぐバリケード材で、それを特注し極太の柱に成型したのだ。普通ならそうそう破壊されない筈の素材である。ここ数日で、自分の中にあった常識的な感覚が揺らぎつつある。精神的に良くない兆候だと吉岡は思った。日常や常識が恋しい。そんな事をぼーっと考えてつつ立っていたから、理子さんに目を付けられた。

「吉岡、手が開いているなら塩崎氏と合流してメンテを手伝え。ここの後始末は私でやっておく」

後始末、と口にする時に視線が隅で眠り続ける水無川先輩に止まった様な気がしたが、深く追求せずに部屋を出た。地下から抜け出し、見慣れた街並みに戻ってくると、その風景が遠い旅先の風景のように錯覚する。時計を見るとまだ午後3時だった。ずっと爆音に晒されていたせいで全身の筋肉が緊張している。ばきばきと伸びをしながら、吉岡は塩崎氏の工房に向かって歩き始める。

\* \* \*

塩崎氏と水無川先輩は最後まで調整を繰り返していた。ああでもないこうでもない。これは唯の勝負ではない、勝てば良いという問題ではないのだ。全力を試みる、ただそれだけなのだ。自分はいつだって全力でモノを作っているつもりでいたけれども、本当の全力とはこういうレベルなのだと吉岡は思い知った。あつという間に夜がやって来た。これから、予定通りの時と場所にて、人形師同士が相対する。その実、人形師同士ではない。かつての全力と今の全力の相対だ。どちらの人形も水無川先輩が生み出した物だ。昼の時間はそわそわと過ぎ去り、やがて赤色の夕日が街のシルエットに沈んでいった。

「そろそろ行こう」

蛍光灯の下に集まった仲間がそろそろとオフィスを後にして指定の公園に向かった。冬の夜の公園に到着した。相手の方が少し速かった様だ。黒のウインドブレイカーにフードで顔をすっぽりと隠した小さな人影が、より深い黒色をした直方体の箱を傍らにして待っていた。一人一人がすっかり収まる大きさの巨大な箱だ。水無川先輩だけが人影の方へ向かう。待ち人と同じく、大きな黒の箱を従えて。吉岡達は公園のずっと後方に待機する。もう第三者が出来る事は何もない。水無川先輩が歩みを止める。約10メートルを間合いに、互いに無言でケースのロックを外す。もともと同じ作者の手によるケースは当たり前のように全く同じ動作で十字に壁面を開いた。そ

して、殆んど同一の姿をした2体の人形が姿を現す。相手が手にしたAzと言う名の白い人形。それに対峙した、人形師水無川無月が二度目に作ったF4と言う名の白い人形。細部を除けば鏡に向かうように錯覚的だ。対峙する2人の間に、もはや言葉は必要無い。言葉で理解し合える領域はとっくに超えていた。同一の作者による人形は同一の手順で以て起動する。

「「スタンバイ」」

二人の声が重なる。

一つは重く、一つは小さく。

「「フルオートアタック、カウントダウン。スリー」」

一人は相手に向けて、一人は己に向けて、言葉で以って最後のセイフティを解除した。

カウントダウンが始まる。あと二秒で全てが終わる。あと一秒で全てが始まる。

カウント、ゼロ。

突撃用の火薬が同時に炸裂し、二体の間合いが一気にゼロになる。排出されたカートリッジが高く舞う。決着は一瞬だった。Azが展開したサブアームがF4を捕らえる前に、F4が再度の瞬間加速でAzの側面を抜ける、その通りざまに既に展開が完了した三本のブレードがAzの頭部を撥ねていた。正確には頸部を含む右首元から左脇までの胸部ごとを切り取っていた。一本目の刃が白亜の最終外装を裂き、二本目の刃がその下部の複合構造の厚みを深く抉り、三本目の刃がそれらを完全に両断した。ガシャンという音を立て、切断された頭部がアスファルトに落下する。次いでカラン、カラン、宙を舞っていた両者の排出したカートリッジがようやく地面を跳ねる。たったそれだけの間、ほんの数秒で全て決着した。黒のウインドブレーカーを翻し相手が闇に走り去る。けれども、もう意味が無いので追わない。開始の立ち位置から一步も動かなかった水無川先輩が、倒れたAzとその頭部に歩み寄る。そして手を伸ばして、やさしく、頭部を失って機能停止したAzを抱きしめた。過去の誇りの死を看取る。その背後に足音。F4が隣に並ぶ。自らが破壊したかつて想いの全てだったものを見る。

「どう感じた」

どちらかが問うた。

「あっけなかった」

答えたのはどちらか。

「これからも登り続けられると思いますか」

「それが理想なら」

作り続けるというのが理想かと問うF4に、

「いいや」

水無川無月は大事な言葉を使う為に間を持って言う。それは応じでもあり、自分に向けての認識の確認でもある。

「理想は虚像だと解った。生きていることを主張する限り、二人で登ろう。」

\* \* \*

あの星より遠く。そんなフレーズが頭によぎった。吉岡は思いついてふと視線を左にやる。そこには白木のキャビネットがあり、雑誌やファイルがきちんと整理されて並んでいる。その中にやや空間を開けて、大きめのガラスケースが詰め込まれた様にして置いてある。中には一体の白い人形がある。あの頃、先輩が追いかけた彼の中の幻想、全身の精密構造を白く大きな木の様に広げた人形。プラスチックで作られたF4の精巧な縮小版がそこにあった。記念に、といて譲り受けた物だ。もうあれから数年が過ぎた。思い出になる程遠くもなく、しかし決して近くもない年月が経った。急な不況の波に飲み込まれて、当時自分が入社したばかりだった小さな名も無い会社はあっという間に潰れてしまった。自分達が共有したあの狭いオフィスでの時間、琥珀色の夕焼けに染まった放課後の教室のようなあの空間。その時間も場所も今はもうない。子供の遊び仲間の様にしていつまでも同じ時間を過ごしてきた自分達も、今はばらばらになり、一人の大人としてそれぞれの場所で働く様になった。あのオフィスも今はリフォームされ、どこかの旅行代理店が入っている。地下にある空間の事は誰にも知られず、今度こそ本当に開かずの間になった。何もかもが少しずつ変わった。その事を思い、淋しいとか虚しいとか、青春小説のクライマックスで描かれる様な特別な感慨は、以外に思う程湧いてこなかった。変わってしまったものは、夢の中の出来事の様にししか思い出せない。決着の着く過去なんて無く、未来は相変わらず不安交じりのままで、でも毎日半分苦く、しかし半分は楽しく、のんびりと、時々にはあくせくと流れて行く。止まる事は無い。止まって欲しくは無い。あの頃は、刻々と過ぎて行く時間に何とか抵抗しようと必死だった。最近は、過去を思い返し現在の自分を叱咤する時間より、明日何をするかということを考える時間が増えた。それが一番の心境の変化だ。過ぎた時間は戻らないが、今でも一年に一回は夏のキャンプであの頃の仲間、理子さん、みう、閑さん、塩崎氏、吉田家の一同、そして水無川先輩が集まり、昔のままの雰囲気ではしゃいだりしている。ざっと仲間達の近況を報告しよう。理子元社長は今現在、どこぞの社長秘書として再就職し働いているという。依然となんら変わらない漆黒のスーツに白タイの姿で毅然と働く凛々しい姿が目浮かぶ。みう、三浦とは結局上手く行かず、再就職を機会にふられてしまった。本来の希望通りに広告広告デザイン会社に入社を果たし、ポスターやCMの開発にセンスの良さを発揮している様で、年取は理子さんを超えて、かつての仲間の中で最も多い。ちなみにまだ独身らしい。閑さんは今でも詩人を自称しながら、かつては道楽だったカフェを本格的にし始めた。客の入りは渋いが、そこは昔の仲間がちょくちょく顔を出しているのだから、仲間の近況を知る事の出来る貴重な場として重宝されている。珈琲は相変わらず美味しい。喫茶なのにメニューには何故かお好み焼きが充実していたりと客を不思議がらせている。TVでも小さく一度取り上げられたと自慢していた。吉岡家の面々は特に変わりなく、昔も今もおっとり平和である。叶ちゃんは麗しい女子大生に成長した。サブロウ氏はアメリカで今もプログラマをやっている。塩崎氏はついに引退して、第二の人生を歩み始めた。と言っても相変わらず工房の奥底に籠って趣味で工作を楽しんでいる様で、匠としての技の切れは少しも衰えていない、むしろますます鋭さを増している程だ。自分

の話もしよう。あの日、理子さんが自身も含めた全員にリストラを告げた時、途方に暮れていた自分に水無川先輩はアシスタントをやってくれないかと声を掛けてくれたのだった。もちろん二つ返事で承諾し、弟子入りする事となった。何故大した才能も無い自分がアシスタントに選ばれたのか、これまでに何度も聞いてみたけれども、いつも答えははぐらかされるだけで、今に至りその理由は教えてもらえない。その日から始まった仕事の内容は、水無川師(仕事中は先輩ではなく師である)のスケッチを午前中に図面に描き起こし、水無川師がその図面を元にスケールモデルを製作して、それでいたい夕方になる。規則的なサイクルだ。食事は自分が作り、二人で早めに就寝する。水無川師は毎日必ず新たなスケッチを描く。毎日途切れる事無く新たなデザインが描けるのは、本当に好きなものを作っているからなのだと思う。デザインをし続けているのは、もちろんF4の追加モジュールだ。今ではもうver8.0にまで深化したF4は、もう実機は作らず、縮小模型そのものを複製販売するレプリカとしての作品形態に変化した。“深化し続けるフィギュア”として高額ながら少数のカルト的なコレクターに受け入れられている。定期的に拡張パックが発売されるという作品形態は、オークションなどでもその実力を見出された。機能拡張の際に置換された古いモジュールに希少価値が付くのである。水無川師本人の様子はというと、環境が変わっても自分が見ている限り以前とあまり変わっていない。柔らかい物腰でいて、はにかみ屋の子供の様で、老人の様に落ち着いている。自分の頭の中に一つの世界を持っていて、それをごく自然に、こちらの世界に生み落とす。水無川師と一緒に働ける事が吉岡にはとても誇らしい。師が切り開く人形世界の最先端で共に制作が出来る事で見える世界は楽しくて堪らない。自分もいつかこの人に追いつく日が来るだろうか。本当に作りたい物を見つけた師の様に、いつか自分にも本当に作りたい物が見つければそうなるかもしれない。今はまだそれを見つけてはいないけれども。それが星の光よりも遠い日であったとしても、それを目指してもう歩き出しているのだ。ゆっくりだけれども。進んでいる事が分からない程遠い道しるべではあるけれど。その事が今は生きる理由。それが作る理由。それだけで十分だ。作るのを止めない。

[まえがき]

まえがきを書こう。そう思いついたのが書き始めてからだったのであとがきで書く事になりました。それに、あとがきを最初に読む人も居るので……。それでは、「まえがき」です。

---

これはつくる人達の物語です。

物語のどこかには貴方が探しているなんらかの「共感」が含まれている可能性がひよっとするとあるかもしれません。あれば読んで幸いです。一方で、あなたが探しているもの「そのもの」が含まれている可能性は、残念ですが零です。過度の期待をもって読み進める事はお勧めしません。それは他人の創作物であるから当然です。少し話を抽象化すると、探しているもの、願うものが「見つかる」なんてことは、多分現実には起こり得ないと私は考えます。「自分でつくる」事にはだからこそ意味があり、またそうする事でしか獲得できない価値があるのだと考えます。少なくとも自分の場合はものづくりをしながらそんな事をぼんやりと感じて生きてきました。まだまだ探しているものをつくってはいません。イメージだけがあります。まだ生きる余地、つまり作る理由があるようで幸いです。

\* \* \*

物語はあと少し続きます。最終章をお楽しみください。

\* \* \*

ここ数日、外では吹雪が続き、窓から見える視界の全てを白く染め上げた。いや、全ての色を雪が吸い取った。全ての決着が付いたあの夜から降り始めた雪は、止む事なく降り続いていた。積雪はそろそろ1メートルに達する。それでも天気予報の通りではまだまだ雪は止まないという。そんなある夜。いつも通りの白色の冬の夜。F4はマスタである水無川無月のアパートから家出する事に決めた。彼女に搭載された知性はこれまでの状況から、自己がマスタにとって特別な存在であることを認知していた。願いの果てに具現化した夢は、実体をもって心を束縛する茨となる。マスタは気づいてはいないけれども、私は側にいるだけでマスタの心を捕らえてしまう。それは、縛ってしまうと同義だ。実現した夢とはそういうものだ。そう、実在しえる幻想を夢というなら、私はマスタの夢だ。たった一つをととてもとても大切にする事は、自覚のない束縛だ。これからマスタが、一生を私に捧げてしまう可能性を危惧する。だから私はここから去る。もっとマスタが他の事に心を開けるように、もっと自由に生きられるように。あては無いけれども私はここから去るべきだと判断した。恐らく、かつてのAzがそうしたように。万能故に荷物はいらぬ、充電もメンテナンスも自己改良さえも自ら行えるように私は作られた。深夜、暗い部屋の中、私は静かにハンガーラックから降りる。動作音を最小限に、八畳の部屋をゆっくり歩く。物音でマスタを起こさない様に。恐らく最後になるだろうマスタの寝顔を見下ろす。何の感情も見いだせない透明な寝顔だった。

私を作ってくれてありがとう。

声に出さずに回路の中だけでその感謝を口にする。そして、自分の中にあるプログラムに問いかける。

<水無川無月をマスタから解除しますか？ Y/N>

最後にマスタとの数日の思い出をもう一度思い返してプログラムにYと答える。

<設定を削除しました>

そう回路の中で声がある。メモリーが少し軽くなった感覚がした。何か大切なものがずっと溶けて消えた様な。F4は自機の周囲の環境を見回した。狭いけれど整理が行き届いた部屋だ。認知したのはそれだけの視覚情報なのに、何故だかここが暖かい場所の様に思えた。AIはそれをエラーだと判断した。見下ろすと知らない人間が一人眠っている。この人間にも何か気に掛かる感情が生まれたが、それもエラーであると処理された。ゆっくりと玄関をくぐる。外は激しい吹雪だった。手を伸ばしてみたら指先が見えなくなった。視界をカメラからセンサーに切り替える。ゆっくりと積もった雪を掻き分け階段を降りる。ふと先程のエラーを思い出して視界をカメラに戻してアパートメントを見上げるが、数分前に後にした部屋は吹雪で全く見えなかった。再び視界をセンサーに戻して建物から一步一步離れてゆく。どこへゆくあても無いままF4は歩き続ける。白い人形は高く積もった雪の中に紛れ込む様に、やがてその後ろ姿も吹き荒れる吹雪の中へ消えていった。

---

この物語はフィクションです。

全ての人物、団体、および事件は頭の中だけに存在しますが、作中に登場するF4の検討用縮小模型に関しては著者が製作を計画中です。

## 冬の夜

<http://p.booklog.jp/book/74178>

著者：河上真琴

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kawakamirennji/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74178>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74178>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ